国委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」

公民館ふるさと教育推進事業
報　告　書

富山県公民館ふるさと教育推進協議会

は　じ　め　に

公民館では、これまで生涯学習の振興に熱心に取り組んできました。今日個々人のニーズに応じた教室や講座が各地で盛んに行われるようになり成果をあげています。しかし一方で、これまで大切にしてきた地域に伝わる伝統行事や文化・歴史、特産品などを伝承・活用したり、地域の自然を体験し守り育てたりする学習活動や地域を担う人材の育成が十分に進んでいないのではないかと危惧しています。

また全国的に、行財政改革のもと、公民館のコミュニティセンター化、指定管理者制度の導入が進んでいます。市町村では、首長部局に市民協働課を設置し、協働のまちづくりが模索されています。こうした流れの中で、地域の社会教育施設としてノウハウを蓄積してきている公民館のはたすべき役割は今まで以上に大きくなってきております。

今の日本は、急激な社会の変化や情報化・都市化などの影響で、地域社会への帰属意識や地域社会での人間関係が希薄になってきていると言われています。このような時代だからこそ、公民館を中心とする身近な地域で、自己の原点を探ったり自然を体験したり、さまざまな人との交流の中でお互いを認め合ったりしながら「ふるさと教育」を推進していくことは、活力と思いやりあふれる「ふるさとづくり」とグローバル社会で活躍する「人づくり」を目指す活動となると信じております。

とりわけふるさとの未来を担う子どもたちには、地域の一員として地域の人々と交流しながら、身近なふるさとの素晴らしさを体験し学んでほしいと思っております。それらが子どもたちにとってかけがえのない宝物となるとともに、人としてのあり方を支える、ふるさとに対する愛着や誇りの心を育むことになっていくと思います。

ふるさとに係る学習は全国どこの公民館でも取り組むことが可能です。この報告書には、公民館におけるふるさと教育推進のためのヒントとなる事例が数多く載せられています。各公民館で大いに活用していただき、ふるさと教育が県内全域で、また全国各地で進み、地域の教育力が一層充実していくことを願っております。

終わりに、本事業の実施ならびに本冊子の作成にあたり、ご指導ご助言いただきました文部科学省、富山県教育委員会、市町村教育委員会並びに特別アドバイザーの山西潤一富山大学教授、岩田繁子富山県婦人会長様に心より感謝申しあげます。

平成２３年３月

富山県公民館ふるさと教育推進協議会

会　長　鹿　熊　　久　三

目　　次

はじめに

ページ

１　事業の全体像
（１）趣旨　1
（２）公民館が置かれている現状と課題　1
（３）事業の概要　1
（４）実施主体　2
（５）研究の視点　2
（６）推進の方向　2

２　富山県公民館ふるさと教育推進協議会の取り組み　3
（１）推進体制づくり　3
（２）事業の広報　4
（３）　アンケート調査の実施　4
（４）市町村教育委員会との連携　4
（５）Ａタイプ・Ｂタイプの各推進委員会が実施した事業　5
①Ａタイプ研究実践委託公民館の概要　5
②Ｂタイプ研究実践委託公民館の概要　6
（６）地域の教育力を考える地区研修会　7
（７）地域の教育力を考えるフォーラム　8
（８）写真で見る事業の様子　8

３　ふるさと教育の推進は公民館に大きな可能性をもたらす　9
（１）市町村における郷土に関する学習状況について　9
（２）ふるさとに愛着や誇りをもつ人は多い　9
（３）多くの住民が、ふるさと教育推進の必要性を高く捉えている　9
（４）富山県の公民館職員は、ふるさと教育推進に意欲的　１０
（５）４０代も子育て世代　１０
（６）公民館におけるふるさと教育で目指すもの　１０
（７）公民館におけるふるさと教育の可能性　１１
（８）切り口が変わっただけ　１１
（９）公民館が取り組む活動は全て「ふるさと教育」活動である　１１
(10) 活動の中で「ふるさと」を意識するだけで変わる　１２
(11) 地域住民か期待する事業を大切にしたふるさと教育　１２
(12) 地域住民の参加動機を満足させるふるさと教育　１３
(13) メニューはいっぱいのふるさと教育　１３

４　さまざまな団体や機関とのネットワーク（連携）によって活動が一層豊かになる　１４
（１）事業におけるさまざまな団体や機関とのネットワークの状況　１４
（２）公民館におけるネットワーク（連携）の可能性　１４
（３）共通のテーマで事業に取り組むことで公民館の結束が強まる　１５
（４）まつりの保存会などとネットワークで伝統行事が変わる　１６
（５）公民館の参加がボランティア団体を育てる　１６
（６）市や町のイベントや実行委員会との連携で公民館が地域をアピール　１７

（７）共同作業を通して地域ネットワークが太くなる　１７
（８）専門機関や専門家とのネットワークは不可欠　１７
（９）事業を長く深く追求することでネットワークも深まり広がる　１８
(10) 住民総参加の活動は、地域ネットワークを一層強くする　１９
(11) ＮＰＯ等との連携で新たな活動が可能となる　１９
(12) 実行委員会形式、役割分担の明確化がネットワークを強くする　１９
(13) 商工会などとの連携は町づくり活動になっていく　２０
(14) 担当者の熱い思いや地区の必要性がネットワークを形成していく　２０

５　今後の方向性　２１
（１）ネットワーク（連携）をキーワードにふるさと教育を推進　２１
①　公民館連携のエリア　２１
②　ネットワークで双方に利益を　２１
（２）地域情報のインターネット発信で公民館が変わる　２２
①　県内の公民館におけるパソコン等の設置状況　２２
②　公民館のホームページに関する実態　２２
③　地域住民が公民館に求める事業とＩＴ　２３
④　ホームページ作成を支援　２３

６　事業実施推進委員会の取り組みの様子　２４
・　薮波公民館ふるさと教育推進委員会　２５
・　上条公民館ふるさと教育推進委員会　２９
・　安野屋公民館ふるさと教育推進委員会　３３
・　村木公民館ふるさと教育推進委員会　３７
・　大町公民館ふるさと教育推進委員会　４３
・　城端地区公民館ふるさと教育推進委員　４９
・　福光地区公民館ふるさと教育推進委員　５３
・　福野地区公民館ふるさと教育推進委員　５７
・　砺波地区公民館ふるさと教育推進委員　６１
・　氷見地区公民館ふるさと教育推進委員　６５

資料

地域住民のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察　６９
公民館職員のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察　７８
公民館ふるさと教育推進事業の概要　８７
社会教育施設や各種団体とネットワークを形成し「公民館ふるさと教育」を推進　８８
公民館のネットワークを構築し「公民館ふるさと教育」を推進　８９
富山県の公民館におけるふるさと教育の推進　９０
富山県の公民館における公民館同士のネットワーク　９１
富山県の公民館における行政・他団体・他施設・他機関とのネットワーク　９２
富山県公民館ふるさと教育推進協議会会則　９３
富山県公民館ふるさと教育推進協議会事務局規定　９４

公民館によるふるさと教育の推進と公民館ネットワーク

平成 22 年度　公民館ふるさと教育推進事業
文部科学省　「社会教育における地域の教育力強化プロジェクト」

1　事業の全体像

（1）趣旨

ふるさとに係る学習は全国どこの公民館でも取り組むことが可能である。今、それを地域住民に最も密着した社会教育施設である公民館が中心となって、「ふるさと教育」として諸団体や各種機関等との効果的なネットワークを模索しながら推進する。

「ふるさと」をキーワードとして人々が地域人としての在り方に目を向けていくとともにふるさとへの愛着や誇り、地域の絆づくり、地域の教育力の向上、地域住民によるまちづくり等に資するモデルを開発する。

（2）公民館が置かれている現状と課題

公民館では、これまで生涯学習の振興に熱心に取り組み、個人の趣味などのニーズに応じた教室や講座が盛んに行われるようになり成果をあげている。一方で、これまで大切にしてきた地域に伝わる伝統行事や特産品などを伝承・活用する教室や地域を担う人材の育成が十分に進んでいない傾向がみられる。今、公民館には単に住民ニーズに応える講座や事業を展開するだけでなく、下記のような地域エリアの課題を自ら見出し解決していくことが求められている。

①	人々のライフスタイルの変化や価値観の多様化などによって、地域住民であるという意識が低下し地域における人間関係が希薄となり、ふるさとへの愛着や誇りなどが薄れ、地域の連帯感や地域の教育力の低下がみられる。それらの回復のために、ふるさとへの愛着と誇りをもつよう、住民が自主的なふるさとづくりに取り組むことが求められている。
②	全国的な市町村合併に伴って地域における活動や組織等が広域化する中で、公民館の人的ネットワークが弱くなってきている。今後は地域住民の生き甲斐づくりとなる生涯学習の推進とともに、住民の学習意欲を生かし生活の基盤となる地域に目を向け、地域づくりに役立つ講座や事業の企画、既存事業の改善、地域づくりに関わる成果の発信などが求められている。
③	これからの地域を支える地域の子どもたちや若い親世代を積極的に公民館にとりこみ、既存の公民館に集う諸団体や公民館を所管する教育委員会だけでなく、商工会や首長部局とも連携した活動や、地元の各種イベントなどと連携して地域に伝わる伝統行事や祭りをを活性化するなど、公民館の教育力を生かして、地域全体で地域の賑わいづくりや町おこしを図っていく、地域づくりに資する活動を推進していくことが求められている。

（3）事業の概要

ふるさとに係る学習は全国どこの公民館でも取り組むことが可能である。今、それを地域住民に最も密着した社会教育施設である公民館が中心となって、「ふるさと」を一つの切り口として、諸団体や各種機関等との効果的なネットワーク化を模索しながら推進する。

「ふるさと」をキーワードとして、人々が地域人としての在り方に目を向けていくとともに、ふるさとへの誇りや愛着、地域の絆づくり、地域の教育力の向上、地域住民によるまちづくり等に資するモデルを開発する。具体的には、

①	それぞれの公民館が「ふるさとのカルタ（復刻カルタ）の作成」「ホタルの飛び交う地域づくり」「新旧住民の交流活動の促進」など、地域として大切に残していきたい活動や地域の抱える課題を、地域内の様々な団体と連携して推進し、地域の人々がふるさとへの愛着を深める活動を行う。
②	市や町単位で全ての公民館が連携し、商工会、まつり保存会、観光協会などと新たな協力関係を模索しながらネットワークを形成する。 また、地域ぐるみで伝統文化を継承する人材の育成やまつりを盛りあげて観光を促進するなど、地域活性化の活動を行う。 さらに、博物館、資料館、図書館などと連携し、観光スポットや地域の文化財の掘り起こしを図り、地域を再発見する活動を通して郷土愛や地域の絆を深めるとともに地元のよさをPRしていく取り組みを実施する。
③	これからの地域を支える地域の子どもたちや若い親世代を積極的に公民館にとりこみ、商工会や首長部局と連携した「銀座通り小学生児童のシャッターの絵付け活動」や、地元の各種イベントなどと連携して地域に伝わる「田楽武者絵の作成・展示PR活動」をするなど、公民館の教育力を生かして、地域全体で地域の賑わいづくりや町おこしを図っていく活動を推進する。

（4）実施主体

富山県公民館ふるさと教育推進協議会

（県公民館連合会、市町村教育委員会、県教育委員会で組織）

（5）研究の視点

①	公民館を中心としたふるさと教育を推進し、ふるさとに愛着と誇りがもてるようにするための、諸団体や諸機関との効果的なネットワーク構築の方向性を検証する。
②	地域ニーズを解決するための公民館どうしの広域的・人的なネットワークの形成と、複数公民館の連携による事業の方向性を検証する。
③	全国的な公民館のコミュニティセンター化、指定管理者制度の導入の動きの中で、社会教育施設としての公民館の今後の在り方、公民館のはたすべき役割を探り、その実践プログラムを検証する。

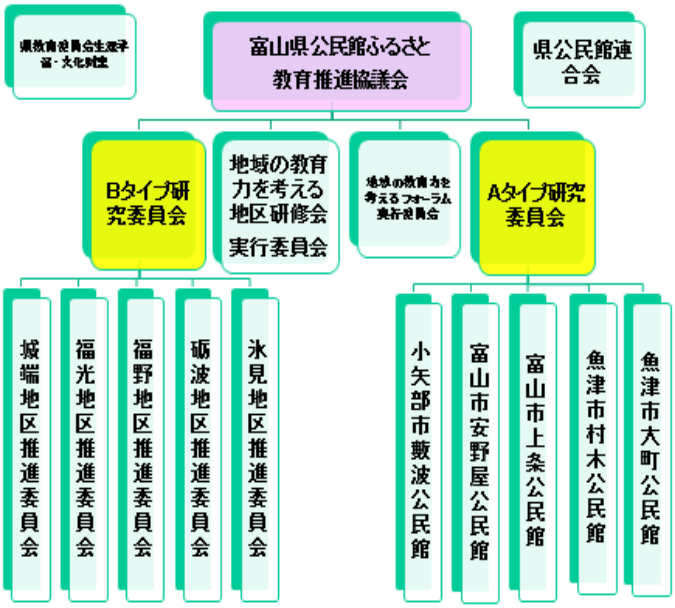
（6）推進の方向

①	人々の地域住民としての意識の低下や連帯意識の希薄化、地域の教育力の低下が全国的に懸念されている。また、新しく地域に住むことになった新住民の増加などの影響で、多くの地域で住民のふるさと意識が希薄化してきている。 そこで、地域住民にとって最も身近な公民館が中心になって、ふるさとの自然風土、歴史、文化、産業に関する理解を深め、ふるさとに対する誇りや愛着を育む「ふるさと教育」を振興し、地域の絆づくりを深め、地域の教育力低下を防止していく。
②	平成の市町村合併によって行政単位が広域になり、それぞれの市がかかえる公民館数も急増した。そしてそれに伴い、従来まであった公民館間の人的なネットワークや行政との関係が薄れ、一部で活動の停滞がみられるようになってきている。 そこで、複数の公民館が連携して事業を実施する先駆的なモデルを開発し、公民館の広域的・人的ネットワークを改めて再構築していくとともに、その拡充と新たなネットワークの形成を図る。

③	全国的に行政改革のもと、公民館のコミュニティセンター化、指定管理者制度の導入が進んでいる。また市町村では、首長部局に市民協働課が設置され、協働のまちづくりが模索されている。 そうした流れの中で、地域の社会教育施設としてノウハウを蓄積してきている公民館の今後の在り方や公民館のはたすべき役割（テーマで学ぶ公民館活動からエリアで学ぶ公民館活動など）を探っていく。

2　富山県公民館ふるさと教育推進協議会の取り組み

（1）推進体制づくり



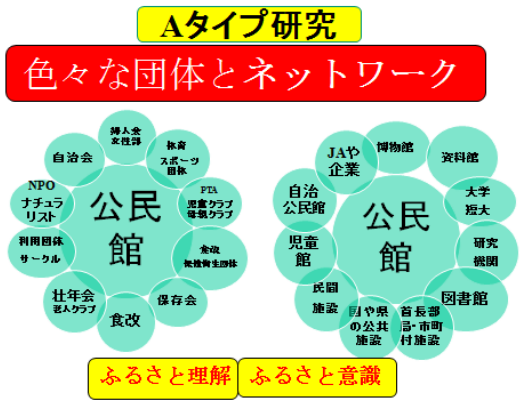
富山県公民館連合会関係者、市町村公民館担当者、富山県教育委員会等で、研究実践のための富山県公民館ふるさと教育推進協議会を設置した。また、有識者２名を特別アドバイザーとして委嘱して研究を進めた。

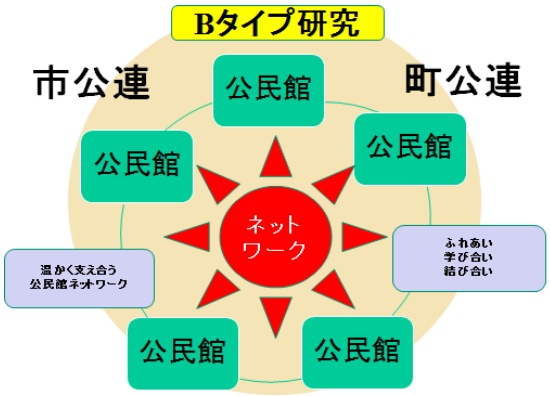
効果的に研究を進めるために、ネットワーク（連携）の方法によってＡタイプとＢタイプに分類し、各地区での実践を通して検証する研究とした。

これまで県内の公民館では「地域の絆づくり」を共通のテーマとしてきたが、今回は「ふるさと教育」という新たな共通のテーマで、各地域の特色やこれまでの実績などを生かして推進した。

Ａタイプは、これまでも多くの公民館が取り組んできている、地域内のさまざまな団体などと連携し、各公民館が単独で公民館ふるさと教育を実施するタイプである。

Ｂタイプは、市公連・町公連といった広域単位で、エリア内の公民館が複数連携し、共同で公民館ふるさと教育を実施するタイプである。





今回参加した公民館は以下の通りである。

【Aタイプ　5公民館】

小矢部市立薮波公民館

富山市立上条公民館、富山市立安野屋公民館

魚津市村木公民館、魚津市大町公民館

【Bタイプ　51公民館】

①城端地区推進委員会(5館)

城端・南山田・大鋸屋・蓑谷・北野

②福光地区推進委員会(11館)

福光・石黒・南蟹谷・広瀬・広瀬舘・西太美・太美山・東太美・山田・北山田・吉江

③福野地区推進委員会(7館)

福野中部・福野東部・福野西部・福野南部・福野北部・高瀬西・安居

④砺波地区推進委員会(21館)

出町・庄下・中野・五鹿屋・東野尻・鷹栖・林・若林・高波・油田・南般若・柳瀬・太田・般若・東般若

栴檀野・栴檀山・東山見・青島・雄神・種田

⑤氷見地区推進委員会(7館)

中央・上庄・窪・阿尾・宇波・速川・十三　　**合計56公民館が参加**

（２）　事業の広報

①　富山県公民館連合会の既存組織や大会を活用した。

- 県公民館連合会理事会、評議員会、初任者研修会、館長等研修会など
- 県公民館大会（県公民館連合会創立６０周年記念公民館大会）で、事業の意義や取り組み状況等を報告

②　各地区で実施されている市公連単位の研修会（自治公民館職員も参加）で、ふるさと教育を推進する意義や取り組み状況等を詳しく説明して理解を深めた。

- 富山市公民館研究大会
- 砺波市公民館研究大会
- 高岡市公民館研究大会

（３）　アンケート調査の実施

ふるさと教育推進に関して、公民館職員と地域住民にアンケート調査を実施し、現状と課題などを探った。

- 全市町村立公民館職員対象にアンケート調査（約７６０人）
- 事業参加者対象にアンケート調査を実施（約８００人）

（４）市町村教育委員会との連携

公民館は市町村が設置し、市町村教育委員会が所管しているため、県の協議会が市町村教育委員会と協議し、事業を実施する推進委員会をそれぞれ設置してもらって推進した。

事業計画作成に当たっては、実施地域の実態に応じ、次年度以降も継続可能となる事業とするため、市町村教育委員会の助言のもと次の３点を明らかにした上で計画を作成した。

①当該公民館における、ふるさと教育の推進・効果的なネットワーク化の現状と課題

②当該公民館の、ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

③当該公民館が、事業を実施した結果見込まれる効果

また、県の協議会では、市町村教育委員会と常に連絡を取り合いながら事業を実施した。各推進委員会でも常に市町村教育委員会と相談しながら事業を推進した。

（5）Ａタイプ・Ｂタイプの各推進委員会が実施した事業

①Ａタイプ研究実践委託公民館の概要

（地域内のさまざまな団体などと連携し、各公民館が単独で公民館ふるさと教育を実施）

これまで、公民館が事業を実施する時に連携してきた、小学校、中学校、保育所、児童クラブ、地区ＰＴＡ、母親クラブ、老人クラブ、長寿会（老人会）、食生活改善推進委員会、文化振興会、体育振興会、体育協会、自治振興会、地区振興会、自治公民館・区長会、公民館教室参加者、地域住民などとの連携を強めると同時に、事業を一層充実するために新たな連携先を模索した。

実施公民館	実　施　事　業　の　概　要
小矢部市立 薮波公民館	富山県小矢部市薮波地域は、県七大河川の一つである小矢部川に流入する渋江川と薮波川の合流点がある。十数年前に薮波川にもどってきたホタルは、環境学習のシンボルとなっている。住民の会話の中に「今年のホタルは云々」がよく出るようになり、薮波川・ホタルを通じ、環境問題が話される環境が醸成されてきている。 この機会を捉え、各世代が次世代を担う子どもたちと共に体験することで、地域の絆を深め、住民自身による自然豊かで美しい地域づくりを推進し、薮波地区に愛着をもち、誇りをもつ気風が生まれるよう地域の活性化につなげていく。
富山市立 上条公民館	近年、当地域内に新興住宅が誘致され、若い世代の人口が急激に増加した。これまで住んでいた人たちと新しく住むことになった人たちとの交流は十分とは言えない。しかし、当地域は、緑豊かな富山平野の田園地帯にあり、昔から田畑を育み守ってきた用水・河川が地域内に多く存在する。 この素晴らしい水郷の恵みや水郷の地について、新たにこの地に住むことになった人たちに積極的に働きかけ、講義・体験・調査等の活動をともに行い、情報を共有し、さらなるふるさと上条の魅力を探求していく。ふるさとに関する知識・知力の循環と人の交流を生む住民参画型の活動を展開する。
富山市立 安野屋公民館	富山市安野屋地区は、少子高齢化、独居老人の増加、核家族化の進行など典型的な都市型地域であり、また高層マンションの建設誘致により若年層の核家族の増加もみられ、新規転入者と従来の居住者との交流は活発ではない。さらに、市町村合併により県内最大の新富山市が誕生したが、合併した町や村のことをよく知らない住民も多い。 そこで地域の各団体、地域住民が集い活動を共有体験して楽しむことにより、地域の世代を超えた交流を促進し、かつ新規転入住民と従来の居住住民とのつながりも促進する。参加者が相互理解と互助の精神をもつようにし、地域活力の向上につなげる。
魚津市 村木公民館	公民館では各種団体が共同した、3 世代ふれあい清掃、3 世代ふれあいペタンク大会、花植え、七夕作り、七夕祭り、灯篭作り、灯篭流し、蝶六踊りの街流し、敬老会、体育祭、紅葉集会、文化祭、ケーキ作り、御幣作り、火祭り等の行事が大変盛んに行われている。 さらに、地域住民が自らの手で今はなくなった昔のふるさとのカルタを復刻し、当時の町の全容を明らかにしていく。将来的には魚津市全体のふるさとカルタづくりへと広げていきたい。

魚津市 大町公民館	大町ではこれまでも多くのイベントを地域住民と連携し実施してきたが、地区内にある「魚津城」や「米騒動発祥の地としての米倉」の掘り起こしの活動で、商工会や首長部局とも連携していくことで、地域の賑わいづくりと共に、街おこしにもつなげていきたい。 さらに、町商工会などと連携した「銀座通り小学生児童によるシャッターの絵付け」などの活動は、公民館と地域住民による街おこしのみならず、公民館と首長部局が進める協働のまちづくりのモデルにもなっていきたい。

②Ｂタイプ研究実践委託公民館の概要

（市町公連といった広域単位で、エリア内の公民館が複数連携し、共同で公民館ふるさと教育を実施）

Ｂタイプでは、市公連や市町村合併以前から続いている旧の町公連単位で、各公連を構成している全ての公民館が連携して事業を展開していくこととした。これまで市や町の公連では、各公民館を利用している地域住民や学級・サークル利用者が、日ごろの学習の成果を発表する場である「公民館祭り」などで広域連携をして共同開催していたが、ふるさと教育などの共通のテーマで社会教育事業に取り組んだことはなかった。ふるさと教育は各公民館単位でそれぞれが実施していた。

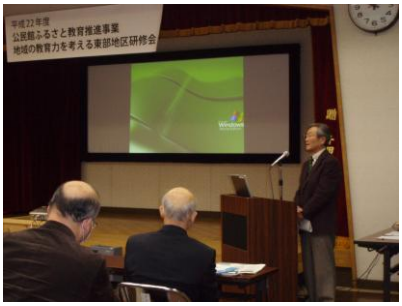
今回、公民館が広域連携して、これまで連携してきた小学校、中学校、小中学校ＰＴＡ、自治振興会各地区公民館、老人クラブ連合、婦人会などの団体や機関と連携するとともに、事業を豊かにするために新たな連携先を模索した。

実施公民館	実　施　事　業　の　概　要
南砺市 城端地区 (5 公民館)	城端地区には富山県の二大民謡祭りの一つである『城端むぎや祭り』があるが、住民の祭りに対する思いや、参加形態、運営方法などが変化しつつあり、この状態が続くと確実に先細りしていく。そこで、これまでのやり方を大切にしながらも、各種団体と連携し、『城端むぎや祭り』の歴史や成り立ちの歴史学習、祭りで演奏される歌の種類や歌詞の内容、むぎや踊りの体験学習を地域全体を対象に開催して祭りへ参加し、地域のネットワーク化の強化と祭りの活性化を図る。 また、城端地区の５公民館全てが協力参加することで、商工会や保存会、観光協会などとの地域ネットワークの強化、地域の活性化、観光資源化を図る。
南砺市 福光地区 (11 公民館)	福光地区は自然環境に恵まれ、また歴史的にも貴重な文化財などが多く存在している。そんな環境の下、公民館・自治振興会・市文化課・地区住民などが連携し、ふるさと福光の文化財などの現状を調査し、全ての公民館が協力してふるさと教育の学習に必要な看板・教材などを整備する。 また、「親子で再発見ふるさと文化財探訪ツアー」を企画し、文化財を通じて先人の英知を学び、ふるさと福光への愛着と誇りを持ってもらう機会とする。 この事業の推進により、人間関係の構築や地域の絆づくりに貢献し、ひいては安心安全な町づくりに繋がるようにしていく。

南砺市 福野地区 （７公民館）	南砺市福野地区は、豊かな水と緑に恵まれ散居村風景が広がる農村地域であるが、近年になって当地域でも核家族化が急激に進み、地域間や世代間の交流が希薄になってきた。 そこで現在まで大切に引き継がれている田楽武者絵作りに、大行燈のある町部だけでなく村部まで、この地域の子どもから大人まで挑戦し、それを田楽行燈に仕立てる。作成した行燈は各地区の文化祭や市の公民館祭りで飾るとともに、平成の一大イベントにまでなったスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドでのパレードや県内最大の福野地区の菊まつり、地産地消の大イベントである特産のさといも祭りでも展示発表し、多くの県外観光客や県内他市町村の人々にもアピールする。
砺波市 砺波地区 (21 公民館)	砺波市の増山城跡は平成２１年７月に国指定史跡として認可され、城趾が所在する地元住民の中では機運が非常に高まってきているが、よく知らない市民も多く、もっと市民レベルでの学習機会の創設や市民全般へわかり易く周知していくことが求められている。市民共有の財産として意識し市民全体で大切にしていきたい。 市内の 21 全公民館が各世代層や児童生徒にも分かりやすく親しみやすいリーフレットを、市民目線で協議し作成するなど、同一テーマで連携・協力して取り組むことにより、増山城跡が砺波平野の散居村の景観やﾁｭｰﾘｯﾌﾟによる観光資源と同様に、市内外から注目度が高まり、公民館発の砺波市の活性化につなげる。
氷見市 氷見地区 (7 公民館)	氷見市内には多くの誇れる史跡や天然記念物が存在するが、そこを訪問したことにのない住民も多い。多くの地域住民が、今まで知ることが少なかった史跡、天然記念物、博物館を見学し、現地で学習することにより、氷見には海や山の大自然やその豊かな恵みが豊富であるだけではなく、歴史や文化にも誇れるものが多くあることを改めて認識するとともに、地域住民が共に地域に出かけ地域を学習することの楽しさや喜びを知るきっかけとする。 さらに、文化遺産を広報活用することで、県内有数の水産資源（キトキトの魚）やそれを活かした民宿など以外にも、氷見を訪れた人々への新たな観光資源としても活用されるようにしていく。

（6）地域の教育力を考える地区研修会

ふるさと教育推進事業委託研究を実施している公民館の実践をもとに、成果・課題等について研修するとともに、ふるさと教育関連施設等の見学を通して地域の教育力を活かした施設・人材のネットワーク形成等について研修を深め、ふるさと教育に係るコーディネーターとしての企画調整力の向上を図ることを目的に実施した。



県西部の公民館職員は県東部を会場とする研修に、逆に県東部の公民館職員は県西部を会場とする研修に参加した。研修の前半は、各推進委員会から、ふるさと教育推進に取り組んでの成果や課題を発表し、お互いの共有財産とした。

① 県東部　平成 23 年 1 月 25 日（火）
　場所： 魚津市大町公民館
　発表： 県推進協議会、大町公民館・村木公民館ふるさと教育推進委員会
　施設見学：魚津城址跡（大町小学校）米騒動発祥の地、魚津埋没林博物館、魚津水族館

② 県西部　平成 23 年 2 月 9 日（水）
　会場：高岡市立古府公民館
　発表： 県推進協議会、福野地区・砺波地区・氷見地区公民館ふるさと教育推進委員会
　施設見学： 高岡市万葉歴史館、瑞龍寺（国宝）

（7）地域の教育力を考えるフォーラム

平成 23 年 2 月 16 日（水）　富山県教育文化会館

県公民館連合会理事会と連携し、市町村関係者・社会教育関係者・協力大学、図書館、博物館・協力 NPO・県生涯学習団体協議会等の参加を得て実践の成果を発表した。

〈内容〉

基調講演	山西　潤一　氏	富山大学教授
	演題「ＩＣＴで広げ深めるふるさと教育　ー地域の絆が教育力を高めるー」	
実践発表	村木公民館ふるさと教育推進委員会（Ａタイプ）	
	福野地区公民館ふるさと教育推進委員会（Ｂタイプ）	
シンポジウム	出口　寿久　氏	和歌山大学地域連携・生涯学習センター長・教授
	山西　潤一　氏	富山大学教授
	岩田　繁子　氏	富山県婦人会長
	平内　幸典　氏	魚津市大町公民館長

（8）写真で見る事業の様子

①　Ａタイプ公民館の活動のようす

（上条）

（大町）

（薮波）

（安野屋）

（村木）

上条・・・上条のふるさと自然（水郷の恵みと水環境）現地探訪
大町・・・銀座通り商店街シャッターへの小学生による絵付け
薮波・・・薮波川の調査・清掃活動、上流調査
安野屋・・神通川下り
村木・・・村木地区郷土かるたづくり　　など

②　Ｂタイプ公民館の活動のようす

（城端地区）

（福光地区）

（福野地区）

（砺波地区）

（氷見地区）

城端地区・・公民館で麦屋おどりの踊り手を育成
福光地区・・文化財の看板設置と文化財巡り
福野地区・・武者絵行燈の製作とｽｷｬｷ･ﾐｰﾂ･ｻﾞ･ﾜｰﾙﾄﾞ等の行事への参加
砺波地区・・国指定遺跡増山城趾学習会と分かりやすいパンフレットづくり
氷見地区・・国史跡、国天然記念物の学習会　　など

３　ふるさと教育の推進は公民館に大きな可能性をもたらす

平成 22 年度に実施した、全公民館職員（館長、主事、書記、指導員）と地域住民への「ふるさと教育推進」に関するアンケート調査並びに、平成 21・22 年度に市町村教育委員会の協力得て実施した公民館実態調査から、公民館のふるさと教育の今後の在り方、可能性、課題などを検討する。

（１）市町村における郷土に関する学習状況について

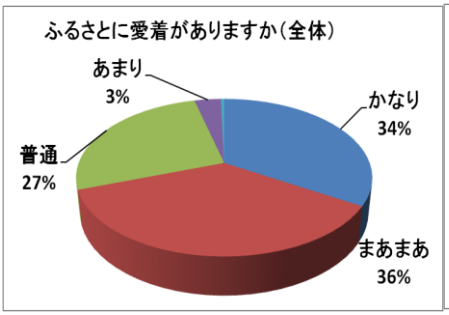
（市町村で平成 19 年度、20 年度に実施された事業）

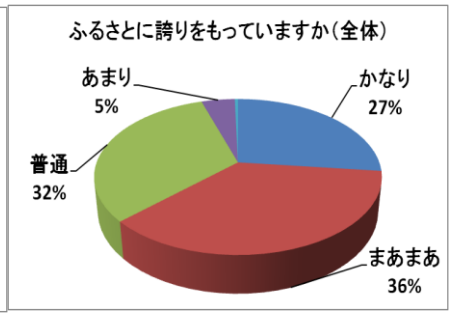
教育委員会等が主催事業	３６事業
公民館が主催	１２７事業
図書館が主催	２事業
博物館資料館が主催	１９事業
その他	２８事業

富山県では、学校教育だけではなく社会全体でふるさと教育を推進していくために、平成 21 年度ふるさと教育有識者懇談会をたちあげた。その提言を受けて、平成 22 年度にはふるさと教育推進協議会を組織し、県をあげてふるさと教育を推進していくこととしている。

市町村での 19・20 年度における郷土に関する学習や講座は 212 事業あり、そのうち公民館で実施された事業は 127 事業である。全体の 60%を占めており、これまで公民館はふるさと教育推進の中心的な役割を担ってきていたといえる。今後も公民館には、ふるさと教育推進に大きな期待が寄せられている。

（２）ふるさとに愛着や誇りをもつ人は多い

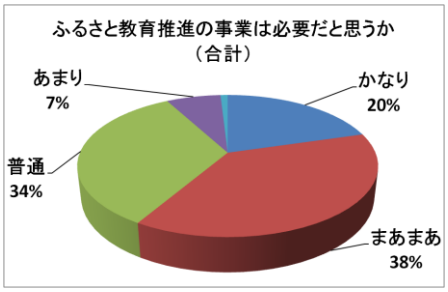




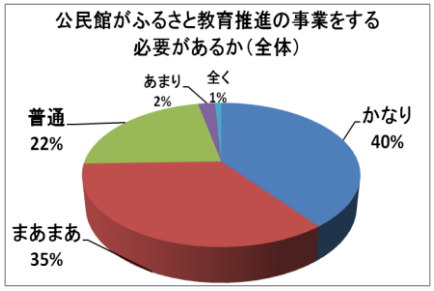
地域住民へのアンケートでは「あなたはふるさとに愛着をもっていますか」の問いに、「かなり」「まあまあ」と答えた人は全体の 70%であり、「普通」も含めると 97%であった。

近年、地域のつながりや人間関係が希薄になり、地域への愛着が薄れてきていると報じられているが、公民館の事業に参加する地域住民は、自分が住んでいるふるさとに、愛着をもっている人が大変多い。同様に誇りをもっている人も多く、この割合が一層高くなることが期待されている。

（３）多くの住民が、ふるさと教育推進の必要性を高く捉えている



（公民館職員の回答）

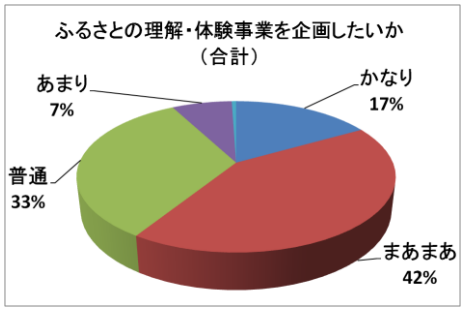


（地域住民の回答）

公民館職員より地域住民の方が、ふるさと教育の必要性を高く意識しており、75%の人がその必要性を高く捉えている。普通も含めると 97%にもなる。否定的な人は非常に少ない。

富山県における、公民館でのふるさと教育推進のための事業は、地域住民が受け入れやすく喜ばれる事業である。

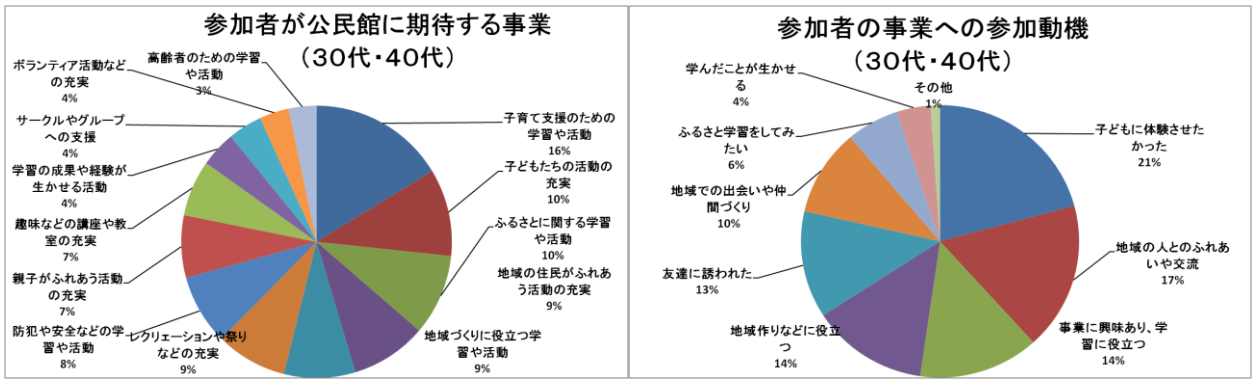
（4）富山県の公民館職員は、ふるさと教育推進に意欲的



富山県の公民館では、ふるさと理解やふるさとのよさを体験する事業を企画してみたいと意欲的に思っている職員が約6割いる。

職員のこの高い意識に支えられて、平成22年度に実施した国委託事業「公民館ふるさと教育推進事業」の成果をもとに、今後県内各地で公民館でのふるさと教育を推進していくことができる。

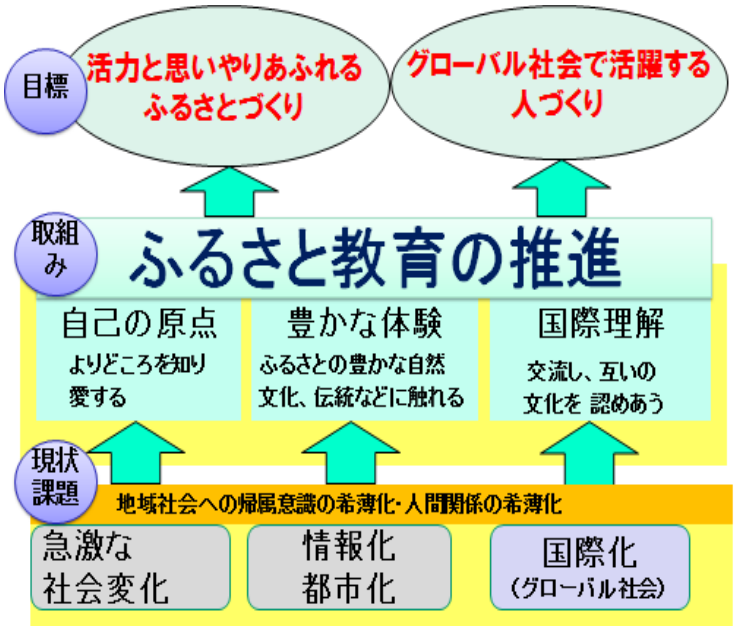
（5）４０代も子育て世代（子どもをキーワードに若い親を公民館へ向かわせる大きなチャンスに）



公民館に期待する事業は年代によって違う。その中で、30・40代が公民館に求める事業は、子育て支援のための学習や活動、子どもたちの活動の充実である。また、参加動機も子どもに体験させたかったが1位となっている。

現在では、40代も〈子育て世代〉と見て行く必要がある。そして子どもを「キーワード」に、公民館が子どもたちの行事を取り入れていけば、これまで公民館活動に参加が少なかった20代から40代の地域住民を、子どもという共通の話題で公民館に取り入れていく、大きなチャンスになっていく。

（6）公民館におけるふるさと教育で目指すもの

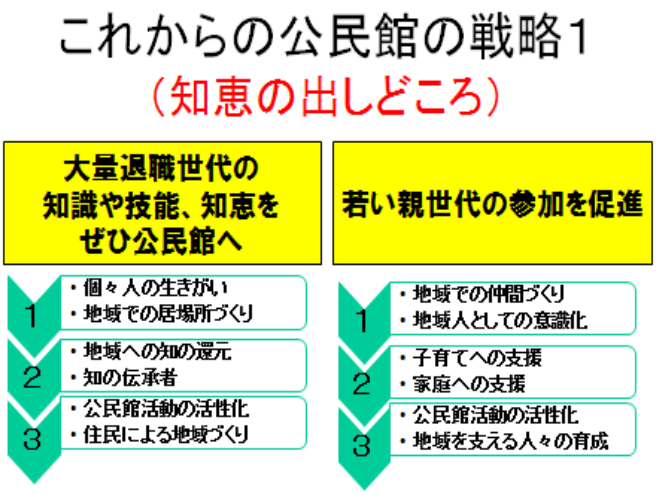


公民館における「ふるさと教育」は次のように捉えていけばよいのではないかと考える。

急激な社会の変化や情報化・都市化などの影響で、地域社会への帰属意識や地域社会での人間関係が希薄になってきたと言われる。富山県も例外ではない。

公民館を中心とする身近な地域で、自己の原点を探ったり地域での豊かな体験をしたりするふるさと教育を推進していくことは、活力と思いやりあふれる「ふるさとづくり」とグローバル社会で活躍する「人づくり」を目指す活動（学習）となる。

（7）公民館におけるふるさと教育の可能性（知恵のだしどころ）

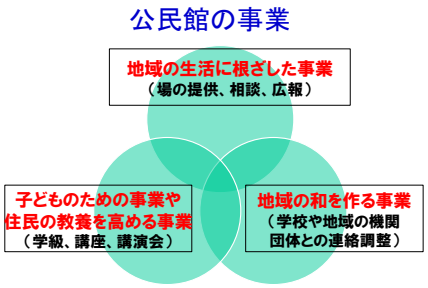


ふるさと教育では、単に事業を計画し参加者を募って実施するだけでは新たなものは生まれない。

参加者をお客さんから当事者にしていく工夫が必要である。地域住民にさまざまな活躍の機会を提供した実践や、実行委員会に多くの人が参加した実践では、地域の活性化にもつながっていった。

またそこに、退職世代の知恵を生かしたり、若い親世代の参加を促進したりしていくことで、活動の輪が大きく広がっていく機会となった。まさに公民館の知恵の出しどころとなっていく。

（8）切り口が変わっただけ（地域の絆づくりからふるさとへの愛着や誇りを育む活動へ）



公民館での事業は左図のように定義されることが多い。、各地区の公民館では、地域の生活に根ざした事業など、さまざまな事業を実施してきた。そしてこれまでは「地域の絆づくり」という視点から検証してきた。

それをこれからは、地域への愛着を育む活動なのか、誇りを育む活動なのかなど「ふるさと教育」の視点から検証していく。切り口が変わったことでさまざまなことが見えてくる。

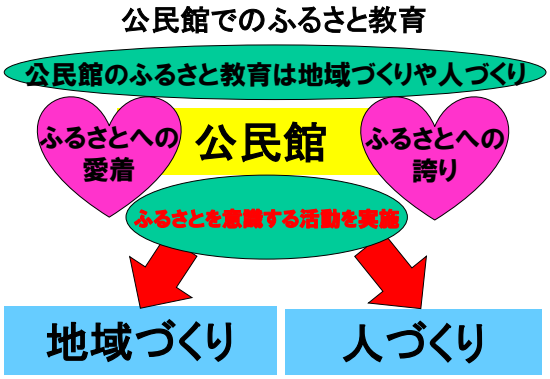
（9）公民館が取り組む活動は全て「ふるさと教育」活動である

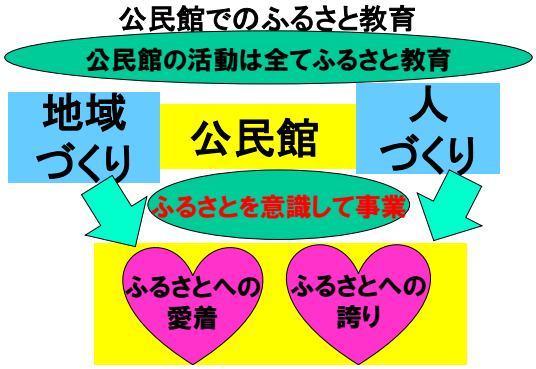
公民館では、上記のように、事業の目的を「地域づくり」「人づくり」において、青少年健全育成活動、文化・教養の向上活動、子育て支援、ボランティアの推進などさまざまな活動をしている。

これらの活動は全て、ふるさとに対する愛着や誇りを育む活動でもある。

公民館における「ふるさと教育」は何も改まって考えたり、難しく考えたりする必要はない。

(10) 活動の中で「ふるさと」を意識するだけで変わる。





推進委員会での実践を見てみると、公民館でのふるさと教育推進へのアプローチには単純に分類すると２通りである。

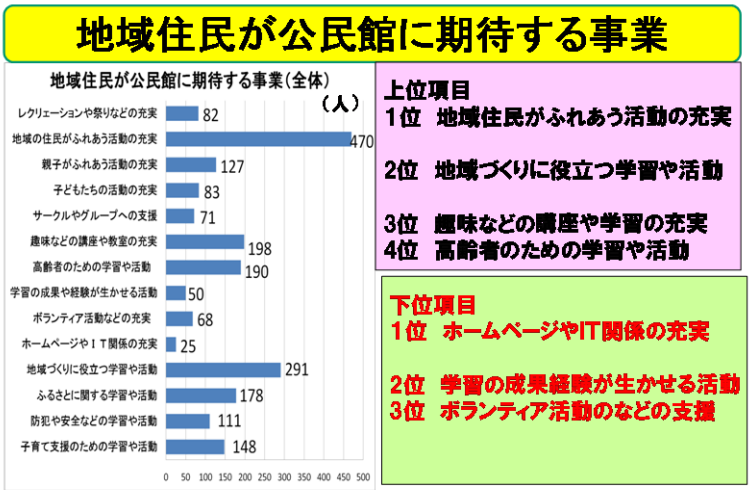
これまでの事業にさまざまな工夫を加えているが、基本は今までの枠組みの中で実施。だたし事業のさまざまな場面で「ふるさと」を強く意識して実施したケース。

意識して事業を取り組むだけで、ふるさとへの愛着や誇りの心を育むことが十分できた。さらに結果としてそれが、地域づくりや人づくりの活動になっていった。

もう一つは、人づくりや地域づくりを目的としてはっきり打ち出しながら、そのなかでふるさとを意識して活動したケース。その結果、ここでも「ふるさと」を意識していくだけで、十分ふるさとへの愛着や誇りの心を育む活動となった。、

ふるさと教育は、「ひとづくり」「地域づくり」等をしていく手段として非常に有効である。

(11) 地域住民か期待する事業を大切にしたふるさと教育



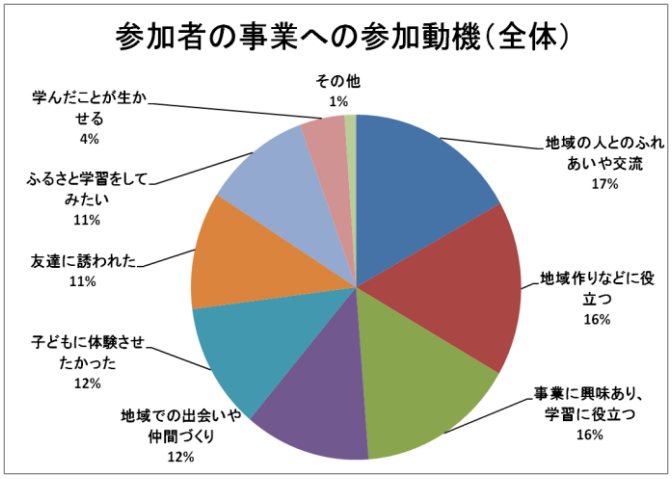
ふるさと学習といったとき、その地域素材はそれこそたくさんあるので、各公民館ではそれぞれの地域の実体を捉えて、自分の地域では何を大切に、何を伝えていくのかをしっかり捉えて事業を企画していく必要がある。

地域住民へのアンケートでは、一番に「地域の成り立ち」をあげているが、これに関しては、例えば、自然をテーマに、伝統文化をテーマに、城をテーマにと、さまざまなテーマで地域の成り立ちを探っていくことが可能である。

Ａタイプ・Ｂタイプのどの取り組みでも、漠然と活動に取り組むより、テーマをしっかり決めた活動のほうが効果が高く広まっていくという結果が出ている。

さらに今の親世代は、親自身が子どもの時に自然体験をあまりしていない世代でもあることも明らかになった。生まれた時から車社会の中で、地域内を歩いたり自転車で回ったりして身近なふるさとの自然や史跡などを自分の体で直接感じるようなことをしていない親が多く、自分のふるさとのことをよく知らない実態がある。ふるさと教育事業では親子参加型の事業とし、親世代を積極的に引き入れていくなどの工夫をすることで、参加者の大幅な拡大を図っていける。

(12) 地域住民の参加動機を満足させるふるさと教育



地域住民はさまざまな動機によって公民館の事業に参加している。公民館ではこれらの、地域住民の参加動機に応えていかなくてはならない。

しかし何か一つの事業を実施することで、オールマイティのようにさまざまな参加動機を満たしていくことはできない。そこで、例えば、ふるさと学習に取り組む中で、地域の人とのふれあいがあり地域での出会いや仲間づくりにつながるように工夫して、参加者の満足感を得ていくように事業を計画する。また、同じふるさと教育でも、住民の興味をひくような内容で企画し、参加したことが地域作りに役立ったと実感させていくように計画することが大切である。

公民館が１年間の中で実施出来る事業数は限られているので、一つの事業の中に複数のねらいをさだめ、参加した人々に満足感をもってもらうようにしてふるさと教育を推進するのが望ましい。

(13) メニューはいっぱいのふるさと教育

ふるさと教育で公民館が取り組む活動や学習は、地域に密着すればするほど千差万別となる。

公民館が取り組むふるさと教育活動は、右図のように地域の特性によって多種多様である。「歴史探訪、ふるさとマップづくり、ふるさとカルタづくり」などさまざまなメニューがある。

子どもから大人までの参加を図り生涯にわたってふるさとへの愛着と誇りの心を育てていくことが大切である。

そのためには、これまで取り組んできた 県委託事業「公民館わくわくどきどき自然体験事業」や「公民館子ども自然体験事業」での成果や、今回の国委託事業「公民館ふるさと教育推進事業」での成果を全ての公民館の共有財産として生かすことが重要であり、そうすればゼロからのスタートではなく、各公民館でのさまざまな工夫を加えて、ふるさと教育は大きく展開できる。

公民館のふるさと教育は、県民の期待が高い活動であり大きな意義を持っている。立山連邦のような高い志と視野をもって、富山湾のような広さ、深さを究めることで大きな恵が生まれることを期待したい。

４　さまざまな団体や機関とネットワーク（連携）によって活動が一層豊かになる

推進委員会での実践をもとに、公民館ネットワークの今後の在り方、可能性、課題などを検討する。

「ふるさと教育」を推進した中で、これまで公民館がネットワーク（連携）してきた団体や機関以外にも、新たな連携先や連携方法がが生まれた。

（１）事業におけるさまざまな団体や機関とのネットワークの状況

◆　Ａタイプ公民館の連携先

小学校、中学校等、保育所、児童クラブ地区ＰＴＡ、育成会、補導委員会、交通安全協会
学校開放委員会、母親クラブ、老人クラブ、長寿会（老人会）、食生活改善推進委員会
文化振興会、体育振興会、体育協会、地区環境保健衛生協議会
自治振興会、地区振興会、自治公民館・区長会、女性セミナー、公民館教室、地域住民

【新たな連携先】

銀座通り商盛会、市商店街連盟、商工会議所、コミュニティセンター、まちなかアートin商店街
消防団、NPO法人とやまアウトドアスポーツクラブ、富山市ネイチャーゲームの会
ボーイスカウト、市商工観光課

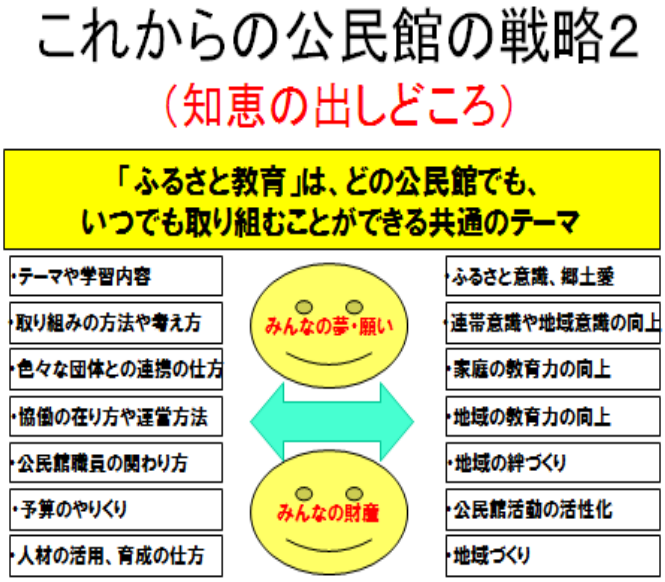
◆　Ｂタイプ公民館の連携先

小学校、中学校、小学校父母と教師の会（ＰＴＡ）、市内の学校関係者
自治振興会、各地区公民館、老人クラブ連合、婦人会
文化財審議委員・市教育委員会、市立博物館

【新たな連携先】

むぎや踊り推進委員会、城端麦屋祭保存会、商工会、観光協会、アニメ制作会社
曲輪の会（増山城跡解説ボランティア）観光ボランティアグループつままの会

（２）公民館におけるネットワーク（連携）の可能性（知恵のだしどころ）



ふるさと教育は、全国どこの公民館でも取り組むことができる共通テーマである。

そして、テーマや学習内容の設定の仕方、取り組み方や募集方法、色々な団体との連絡や連携の仕方など、共通で学び生かせるものは非常に多い。

これまで公民館では地域によってではあるが、地元意識が非常に強く、自治振興会（自治会）の運営などと同様、他所の公民館事業運営に口出しをしたり意見を述べたりするなどはタブー視されてきた面がある。これがこれまで思うように連携が進まない要因の一つとなっていた。

公民館が連携してネットワークを形成していくこと、お互いに成果を共有していくことは、職員の資質の向上にもつながり、またさまざまな地域課題を公民館がスムーズに解決していく道標にもなっていく。

それぞれの公民館では独特の手法などが引き継がれている。それらの手法を大切に引き継ぐとともに、さまざまな先進事例を積極的に取り入れながら公民館ががネットワークを広めていくことで、公民館が地域住民に提供する事業の可能性は大きく広がっていく。今回の事例から検証してみる。

（３）共通のテーマで事業に取り組むことで公民館の結束が強まる（ネットワークが太くなる）

公民館が連携して、共通のテーマで事業取り組むことによって、企画する指導員等の結束が強くなる。

氷見地区では、地図上ではすぐ横に見える村でも、隔てる山が海岸線近くまで伸びているために、一度市街地まで出て別の道を利用しなければならないなど、地理的に公民館が連携するのは難しいという条件があった。そのためこれまで公民館同志の連携は必ずしも十分ではなかった。

今回７つの公民館共通の課題として①全ての館共通の文化財巡りと各地区別の文化財を巡りをする。②地区文化財はそれぞれが探す。③募集から実施時期・方法は各地区に任せる。この条件で実施したところ、自分が計画して実施しなくてはならないという危機感も相まって、お互いの連絡が始まった。実際に事業が始まると、実施済みの公民館に未実施の公民館が頻繁に電話等をしたり会合で顔を合わせたりした時に、そのノウハウを一生懸命学ぼうとする姿が見られるようになった。お互いに聞きあう、教えあうことに抵抗感が全くなくなってきたようにみえるという報告があった。現在は、一緒に事業に取り組んだ公民館職員同士の結束が非常に強くなっている。

このように、共通のテーマで取り組むが、実施方法はそれぞれの公民館に任されるというやり方は、職員の企画能力が増すとともに、企画する公民館職員間のネットワークも必要とされ強化されていく。

また福野地区では、町中心部の伝統として伝わっている武者絵教室に取り組んだ。そしてこの活動が継続していくように和紙のサイズを共通のＡ４とし、木枠もそれに対応する大きさの物を準備するなどの工夫をした。教室は一カ所で実施するのではなく、福野地区の各公民館を中心に７会場で行なうという方法で実施した。

これまで、福野地域の７公民館の館長、主事、指導員はそれぞれ地域で引き継がれてきた事業（伝統）を先輩に習い、各地区独自のやり方で実施し頑張ってきた。福野町の伝統的な夜高まつりにしても武者絵にしても、それは中部公民館の行事だという意識があった。

今回、Ｂタイプの事業として各公民館が連携し、全地区で武者絵教室を実施するという共通テーマで取り組み、定期的に相談したりやり方などの工夫を教習したりしたことで「やって良かった」という満足感と指導員同士の信頼感が深まり結束が大きく増した。

砺波市では、これまでも国指定遺跡の増山城跡を紹介するパンフレットはあったが、専門的すぎて一般の人が見づらいものであった。そこで、市内外への周知と児童生徒へのふるさと教育推進を目的として、公民館が意見を出し合いわかりやすいリーフレットを作成することに取り組んだ。

公民館事業参加者（児童生徒からお年寄りまで）を意識して簡易な言葉で絵を多く取り込むなど、各地区公民館からの様々な意見を出し合い編集したことで、増山城跡への学習が進んだだけでなく、編集に携わった人の信頼感や一体感が非常に強くなり、以降の活動に生きている。

このように、公民館が連携して共通のテーマで事業に取り組むことによって、事業成果はもちろん、公民館の職員間のネットワークが強化されていく活動になる。

（4）まつりの保存会などとのネットワークで伝統行事が変わる

富山県南砺市城端地区に伝わる『城端むぎや祭り』は、昭和２６年から始まり、本年で６０回を数える歴史ある祭りである。越中八尾のおわら風の盆と並び富山県の二大民謡祭りとして県内外より観光客が集まり賑わいをみせ、地域振興に役立っている。

しかし、住民の祭りに対する思いや、参加形態、運営方法などが変化しつつあり、この状態が続くと確実に先細りしていく心配がでてきた。そこに加え近年、町の中心を走っていた国道が拡幅されたのをきっかけに、多くの家が郊外へと移転した。移転したことで町内会ごとの保存会には入れないことになり、子どもも大人も含めて深刻な後継者不足が問題化してきた。存続そのものが問われる状態になってきた。

今回、町内５つの全ての公民館が保存会と連携して、これまでのやり方を大切にしながらも、各公民館でも踊りの継承を始めた。全ての公民館が関わることで、城端地区一丸となって伝統を守り、人材を育てていくという意識に変わった。行政主導型の人材育成ではなく、住民自からの声による、まさに住民主導の活動が始まった。町全体で取り組む活動となったことで、町に各１校ある小学校・中学校も、学校をあげて今まで以上に協力できる体制が整っていった。

さらに今回、むぎや祭りの歴史や歌詞の学習も合わせて行ったことで、町の人たちにとって伝統を受け継ぐ活動だけではなく、改めてむぎや祭りを通して、ふるさとへの愛着と誇りを育む活動となった。アニメ制作会社とのネットワークもでき、今後、観光による町づくりにも大きな期待が寄せられている。

（5）公民館の参加がボランティア団体を育てる

公民館が参加することでボランティア団体も育つことが分かった。

砺波市では、ボランティア団体「曲輪の会」が平成 21 年砺波市の増山城趾が国指定遺跡に指定された時に、増山城趾を学び伝えていくことを目的に結成された。その後研修を積み重ね、市では観光ボランティアとしての成長を期待していたが、そのような機会はあまりなかなかった。

今回公民館が市民のふるさと意識を高めるために、積極的に市の事業に参加し、多くの参加者が集うことになったのをきっかけに「曲輪の会」では、改めてしっかり勉強して戦国祭りに臨んだ。実際に多くの参加者を前にし、自分が話をして多くの方に喜んでもらえたことで大きな自信になった。また、市の観光ボランティアとして本格的に活動に取り組んでいこうという意識の高揚にもなっていった。

また、参加者や公民館関係者からは、同じ市内にこんなに上手に案内してくれる人るのだという再認識になった。話する人も喜ぶ、参加した人も喜ぶ大変素晴らしい活動となった。

氷見地区でも、史跡巡りで観光ボランティアグループ「つままの会」との連携で事業を実施した。「つままの会」は国の指定史跡や天然記念物などを、主に県外からの観光客に説明しているグループで市民を対象とすることはほとんどなかった。公民館や参加者にとっては、同じ市内に住む素晴らしい人的資源の再認識になるとともに「つままの会」にとっても新たな活躍の場の発見になった。

両実践に共通していえるのは、それぞれの市にはかけがえのない史跡名所があるのに、市民は意外と知らない、訪れたこともない人が意外と多い実態を知ったことである。ふるさとを知る活動などで観光ボランティアは、身近な「ふるさと案内人」として今後も連携を強めていくことが大切である。

（6） 市や町のイベントや実行委員会との連携で公民館が地域をアピール

南砺市旧福野町では平成３年に生涯学習の拠点施設として福野文化創造センター「ヘリオス」が建設された。その時から「ヘリオス」を中心に続いている異文化交流である８月の「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」は、県外からも多くの参加者が集う一大イベントに成長している。

福野地区では伝統ある田楽武者絵の制作に取り組んだが制作して満足するだけではもったいない。何か自分たちの活動や福野町のよさをＰＲ出来ることはないかと考えた。

「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」は県内の多くの若者が中心に、実行委員会形式で運営されており公民館はこれまで傍観者であった。そのイベント（実行委員会）と連携し公民館も初参加した。
制作した握り手棒付行燈をそれぞれがもち「田楽あんどん隊」としてパレードに参加し大好評であった。その後、南砺市の菊まつりや富山県曳山サミットで、制作した行燈を展示した。
150 を超える行燈が並ぶ姿は爽快であり、県内外の多くの人の目をひいた。

市や町のイベントや実行委員会と連携することで、公民館活動の新たな展開の可能性が見えてきたと同時に、多くの方と準備やイベントを通して人的ネットワークが大きく広がった。

（7）共同作業を通して地域ネットワークが太くなる

南砺市福光地区には多くの文化財が存在するが、市指定文化財でも予算の関係などで、説明看板の整備が遅れている。設置されていなかったり、老朽化して朽ちてしまったりしているものも多いという実態があった。何とかしなくてはいけないという思いをもつ人は多かったが、単独公民館ではできないしこれは、市の仕事だと考えていた。
今回、旧福光町内全ての公民館が連携して、自治振興会や地元の方々の協力により、看板を設置することにした。市が設置する場合、材料も違うが１基あたり数十万円もかかるが、今回の看板は基本的に手作りの為、1 基当たり約 5 万円と廉価でできた。手作りなので、とても愛着があり作業も楽しいという感想が寄せられた。また、設置しただけでなく、その後文化財を巡るツアーを企画し、手作りパンフレットを手にふるさとへの理解を深めた。

看板を手作りで設置するという作業は容易なものではなく、どこにどんな看板を設置するのか、看板には何を書くのかなどの話し合いから始まり、組み立て、塗装、設置などでも非常に多くの時間と労力を要した。

しかし、多くの時間と労力を要した分、自治振興会や地元の方々とのかかわりも多く、これまでのネットワークがより太く堅固なネットワークへと発展していった。公民館だからこそ出来るこのような活動には非常に大きな意義がある。

（8）専門機関や専門家とのネットワークは不可欠

Ｂタイプ実施公民館では、事業実施にあたって、城端庵唄保存会、麦屋節新声会、郷土史家、商工会、観光協会、工務店、各種伝承者、文化財審議委員、郷土資料館、市立博物館、学芸員、市の文化財担当者など。実にさまざまな専門的知識を有する人や機関とも連携している。これらの人たちや機関との連携なくしては今回の事業は成り立たなかった。専門機関や専門家との連携は、公民館として今まで以上に大切にし強めていかなくてはならない。

（9）事業を長く深く追求することでネットワークも深まり広がる

小矢部市薮波公民館では、従来より自然体験活動を大切にしてきており、身の回りから地域へ、地域から地区外へと、活動が活発化・拡大化してきている。この地区では十数年前に薮波川に戻ったホタルが環境学習のシンボルとなっている。活動が理解され浸透するにつれて、次第に多くの住民や団体の協力が得られるようになってきた。

今では、活動は極めて安全に、効果的に運営されるようになり、公民館職員や指導者は子どもたちへの細やかな指導に専念出来るようになってきている。

現在は、薮波川の水質調査だけではなく、四季を通した薮波川の観察や薮波川の清掃活動、環境学習会へと活動が深まってきている。今回活動範囲をさらに広げ、薮波川から小矢部川へ、そして上流の山田川までと活動範囲が広がった。

活動では学校や多くの地区の団体の協力を得ているが、常に参加協力する環境保健衛生協議会員や保護者が生まれ、指導の層が厚くなってきている。最近は２０代の青年が参加するまでになってきている。

また今年度、小学校の時に何度も参加し、今年中学校に進学した中学生が、移動範囲が大きくなるから、小学生では大変だろうと自主的に手伝いに来るなど、子どもたちの心を動かす素晴らしい活動となった。

このように、公民館が地域に根を張って「ホタルの住む薮波川」をテーマに継続的に活動してきたことで、公民館を中心に地域住民の協力ネットワークが広がっている。

富山市上条地区は緑豊かな富山平野の田園地帯にあり、昔から田畑を育み守ってきた用水･河川が地域内に多く存在する。

しかし、近年、当地域内に新興住宅地が誘致され、若い世代の人口が急激に増加した。これまで住んでいた人たちと新しく住むことになった人たちとの交流は充分とは言えないなどの新たな課題も浮かび上がってきている。

そこで、地域が一体となって、幅広い世代が共に学び、豊かな自然・歴史・伝統など地域のすばらしさを再発見する活動と住民同士のふれあい活動をあわせて推進していくことでその解決を図ることとした。

この地区では、これまでも小学生を対象にした地域内の用水施設見学などを行っていたが、この素晴らしい水郷の恵みや水郷の地について、新たにこの地に住みことになった人たちにも積極的に働きかけて実施した。

さらに活動範囲を広げ、今年度は上流の白岩川ダムから上条地区に至るまでの水の流れなどを学習し、水のふるさと「上条用水マップ」作りにも取り組んだ。

ふれあい活動では、小学校との連携で５年生が年間を通して米づくりを体験する事業や、魚のつかみ取りで新旧住民が交流する活動を実施した。幅広い年齢層の人が集まり、また協力体制のある活動となっている。自治振興会、長寿会、小学校、上条小学校育英会、自治公民館、消防団などとの連携で、行事ごとにチラシを全戸配布したり参加への声かけをしたりと、強い連携がみられる。

また、米づくり体験では長寿会の方々、魚のつかみどり体験では水の管理や清掃に地元の消防団の方々が役割をしっかり分担して協力しており、今後も長く続いていく活動となる。

水という自然からの恵みをしっかりと伝えていくという一貫したテーマで活動を続け、工夫を加えてきたことで、公民館を中心に地域住民の協力ネットワークが深まっている。

(10) 住民総参加の活動は、地域ネットワークを一層強くする

魚津市の村木地区には、埋没林館があり、たてもんまつりや蝶六踊りの発祥の地でもある。伝統行事としては灯篭作り、灯篭流し、蝶六踊り、御幣作り、火祭りなどがあり、多くの地域住民や団体が協力し合って行事を推進している地区である。

今回、昭和７～８年頃の村木尋常小学校で作られたカルタに詠われている詩をもとに、当時の町の様子の全貌解明に近づけていくとともに、今の魚津を様子をも残す村木「郷土カルタづくり」に取り組んだ。

①広報で知らせる。②アンケートをつくる。③お年寄りから話を聴く。④現地見学、調査をする。⑤講演会を開くなどの手順を踏んだ。また、一部の関係者だけではなく、文化振興会、老人会、女性セミナー、育成会、小学校、各種団体など、公民館の協力団体全ての知恵を結集して取り組んだ。

カルタに掲載する内容や詩に関しては、全ての地域住民を対象に公募し、集まった多くの作品の中から、選定委員会が何度も集まって決めていった。作成過程を通して住民の強い一体感が図られた。

大変な手間ひまのかかる作業であったが、地域住民総参加を目指した活動であったため、完成の喜びも大変大きく、村木小学校でのカルタ大会に取り入れられるなど、今後村木地区から魚津市全体へと広まっていくことが期待されている。

(11) ＮＰＯ等との連携で新たな活動が可能となる

富山市安野屋地区は、富山県有数の水量を誇る神通川流域に位置し、かつては河川において鮎、鱒漁がさかんであった。今はその様なことを知る人も少なくなり、少子高齢化、独居老人の増加、核家族化の進行など典型的な都市型地域となっている。

さらに高層マンションの建設誘致により若年層の核家族の増加もみられ、新規転入者と従来の居住者との交流は活発ではないという状況が見られる。

その様な状況を何とかしたいとこれまでも小学生と保護者を対象にした自然体験教室などを地区内を流れる松川や神通川で実施してきていた。今回「NPO 法人とやまアウトドアスポーツクラブ」との連携で神通川下りという新たな事業に挑戦した。また、富山市ネイチャーゲームの会やボーイスカウトなどとも連携したことで、大人も子どもも初めての体験がいっぱいできた。世代間を超えた地域住民のつながりの強化と新規転入者と従来の住居者の交流を促進していく事業となった。

県内には多くのＮＰＯが存在するが、公民館での活用はあまり多くない。ＮＰＯのような団体や、専門的な指導者がいる富山市ネイチャーゲームの会やボーイスカウトなどの団体と連携することで、スケールの大きな新たな活動が可能となってくる。

(12) 実行委員会形式、役割分担の明確化がネットワークを強くする

公民館では、さまざまな事業で多くの地区住民や諸団体の協力を得て事業を実施している。公民館主導で参加者を募ってという事業も多いが、実行委員会形式で準備段階から時間をかけて、地区のみなさんと話し合って準備したり、役割分担を明確にしてそれぞれが責任を持って準備したりして実施した事業では、公民館との連携だけでなく、事業に携わった個人の間でも、団体の間でも連携が強まっていった。連携する内容や実施方法は、各地区によってさまざまであるが、これまでの地区のやり方をベースに、前例周到ではなく、事業をより豊かにするために新たな連携を求めていく方法が、一番受け入れやすい。

(13) 商工会などとの連携は町づくり活動になっていく

魚津市大町地区は、歴史遺産である魚津城跡やその周辺の寺社等の旧跡、旧北陸道沿いの商店街など、市の中心として賑わっていた地区である。

公民館ではこれまでも、それらの歴史遺産や伝統的行事などについて、地域住民やさまざまな施設との連携を図りながら、大町キラキラ七夕まつり・うおづ祭り蝶六街流し・ふれあいもちつき大会・火祭り御幣作りなどさまざまなイベントを行ってきた。地域住民は公民館に非常に協力的で、子どもたちの参加率も高い地区である。

また、地域内にある「魚津城」や「旧北陸道」及び「米騒動発祥の地としての米倉」の学習や保存・活用活動では、博物館だけではなく、図書館等とも協力してそれらの歴史的背景についての知識を深め、自分達のふるさとの大町の「名物」は何であるかをイベントや行事を通して模索してきている。

しかし、近年は大町地区でも市街地の空洞化、高齢化が大きな社会問題となってきている。そこで、今年度新たに、大町地区にある銀座通り商店街の活性化のため、空き店舗のシャッターに小学生の絵を描き、住民自らの手で街中に賑わいを取り戻す活動に取り組んだ。商工会や首町部局とも連携して「銀座ワイワイもちより市」の会場として使用している店舗のシャッターに、子どもたちが絵を描いた。デザインは、地元の大町小学校６年生の中からプロジェクトチームを組織して行った。小学生のデザイン画は、実行委員会有志の手でシャッターに転写し、「まちなかアート in 商店街」のイベント開催時に６年生が彩色した。そして「銀座ワイワイもちより市」開催日に序幕式を行い完成を祝った。

シャッターの絵を見に来る人の姿が見られるようになり、街の賑わい創出に一役買うという町づくり活動となった。

「魚津城」や「旧北陸道」及び「米騒動発祥の地としての米倉」の掘り起こしの活動では、商工会や首長部局とも連携したことで、地域の賑わいづくりと共に、街おこしにもつながった。

さらに、町商工会などと連携した「銀座通り小学生児童によるシャッターの絵付け」などの活動は、公民館と地域住民による街おこしのみならず、公民館と首長部局が進める協働のまちづくりのモデルともなる活動となった。

(14) 担当者の熱い思いや地区の必要性がネットワークを形成していく

ネットワークを形成していくのはやはり「人」である。今回実施したＡタイプ、Ｂタイプのどの事業でも共通して言えるのは、館長、主事、指導員、書記などの公民館職員や市町村の担当者の熱い思いや願いがあったことである。そしてそれは同時に、各地区での解決が求められる地域の必要課題でもあった。

城端地区の麦屋まつりを・・・。福光地区の大切な史跡を・・・。福野地区の武者絵を・・・。砺波地区の国指定増山城趾を・・・。氷見地区の史跡天然記念物を・・・。新旧住民の交流を・・・。子どもたちに体験を・・・。地区の自然を守っていかなくては・・・。地区に残るふるさとカルタづくりを・・・。街の賑わいづくりを・・・。ｅｔｃ。

みなさんの地域への熱い思いや願いが、これまで連携してきていた地区住民やさまざまな団体とのネットワークを一層強固なものとしていった。また、新たな連携先の開拓や連携方法の開発、広域での公民館同士の連携など、新たなネットワークを形成していく、最も大きなエネルギーであった。

公民館のふるさと教育では、公民館職員の熱き思いや願いが人々を動かし地域をも変える。人づくりや地域づくりの大きなうねりが公民館から生まれることを期待したい。

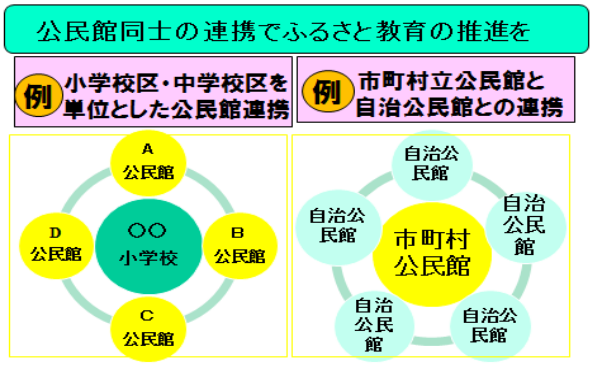
５　今後の方向性

（１）ネットワーク（連携）をキーワードにふるさと教育を推進

公民館を中心とした地域でのふるさと教育は、単なる学びから「人づくり」「地域づくり」にと発展していくことが大切である。

例えば観光ボランティアの育成や特産品による地域づくり・町おこしなどは「人づくり」「地域づくり」にと発展していく。このようなときに「市町村の商工会や経済団体」や「ＪＡ・ＮＰＯなどの民間施設や団体」との連携は、公民館にとっても相手方にとっても大きな力となっていく。〈新たな公共〉という考え方なども積極的に取り入れ、固定概念にとらわれず連携していくことが必要になってくる。

さらに、自治公民館を含めた公民館同士がふるさと教育で連携していく新たなスタイルは、活動が豊かになるだけではなく、公民館の可能性が飛躍的に大きく広がっていく。



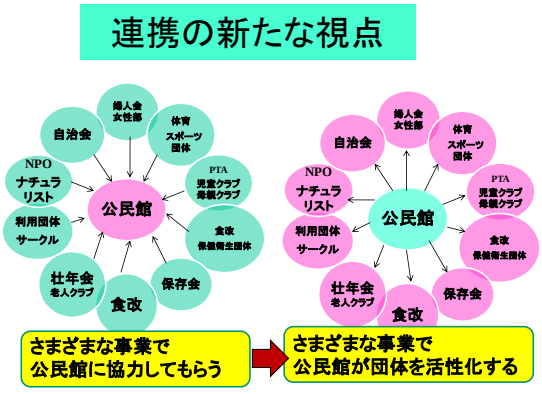
①　公民館連携のエリア

今回のＢタイプ事業では、市や町の全ての公民館が連携して事業を実施するというスタイルであった。

連携による事業はその効果が非常に高いことが報告されたが、富山市や高岡市のような大きな市では市全域で公民館が共通事業に取り組むことは無理である。そこで、エリアを狭めて、南砺波市の取り組みのように、旧の町を単位とする事業は取り組みやすい。

また、小中学校の統合が進んだため、一つの小学校区に複数の公民館が存在しているケースも多い。小学校に通う子どもたちにとっては、複数の公民館のエリアが、子どもたちの校区となる。ＰＴＡ活動も校区を単位として実施されている。地域でのふるさと教育を推進していく時、この子どもたちの校区意識を大切にしてふるさとへの理解や誇りを育てていくことが大変有効である。学校やＰＴＡの協力が得やすくなり、協力できる人材も多くなる。例えばＡ公民館のエリア探検ではＡ公民館が中心になって、Ｂ公民館のエリア探検ではＢ公民館が中心になって実施することで、活動回数や内容が一層充実する、人的交流が図られふるさと意識が一層強まるなど、大いに期待できる。このような公民館連携は取り組みやすく効果も大きい。単独公民館でふるさと教育を実施する時にでも、市町村立公民館のエリアにはたくさんの自治公民館が存在する。自治公民館の人的資源を有効に生かした活動はふるさと教育推進の大きな力となる。

②ネットワークで双方に利益を



これまで、公民館が事業を実施する時には、エリア内のさまざまな団体が、公民館に協力をするといったスタイルがほとんどであった。

これからは、公民館はその人的ネットワークなどを生かして、さまざまな団体のコーディネート的な役割で、それらの団体を育てていくことが大切となってくる。

公民館事業に参加することで、団体の構成員が増えた。活動がやりやすくなった。など目に見える形で貢献していくことが求められる。団体が活発になることで公民館活動もまた活発になる。双方に利益のある事業展開が大切である。

（２）地域情報のインターネット発信で公民館が変わる

10 年前には想像だにしなかった位、インターネットが急速に普及し、パソコンやインターネットが使えるのが当たり前の世界になった。携帯電話の普及同様、インターネットが使えないと非常に困る世の中になっている。反面使いこなすことで大変便利な世の中でもある。

このような高度情報社会においては、当然のことのように公民館による地域情報の発信並びに、職員の情報発信能力が求められる。公民館も積極的にそれに応えていかなくてはならない所であるが、現実には十分に進んでいない状況が見られる。しかし公立公民館である以上、どんなに立派な活動をしていても、ホームページは作ってないでは済まされない時代となっている。ふるさと情報を積極的発信することは、ふるさと教育の推進と公民館によるネットワーク形成の大きな手段となっていく。

①　県内の公民館におけるパソコン等の設置状況（平成 21 年 9 月調査実施）

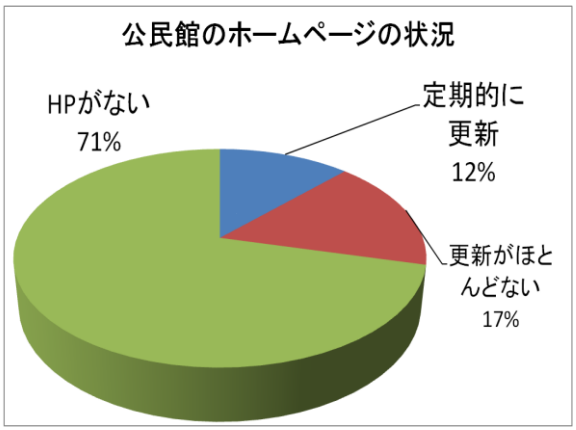
調査対象の公民館総数	３２５館
パソコンを配置している公民館の数	２９３館
そのうちインターネット接続がしてある公民館数	２８４館
公民館に配置してあるパソコンの県内の総数	５９７館
そのうちインターネット接続がしてある公民館数	４８９館
一般の方も利用できるようになっている公民館の数	９７館
一般の方が利用できるパソコンの総数	１０２館

パソコン配置に関しては、全公民館の内 90%の公民館に配置されており、そのほとんどはインターネットに接続している。しかしまだ 10%の公民館にパソコンが配置されていないという状況がある。

また、セキュリティや管理の関係で、一般の方も利用できる環境になっているところは 102 館であり、公民館全体の約１／３となっている。まずは全ての公民館に、公民館専用のパソコンが配置されインターネットに接続されているという環境整備が急務である。

②　公民館のホームページに関する実態（平成 22 年 10 月調査実施）

ホームページで事業や講座・教室の様子などを公開し、定期的に更新している	４０館
作成しているがほとんど更新していない	５４館
ホームページは作成していない	２３１館



県内の公民館でホームページを公開しているのは、94 館で全体の約 30%である。その中で、定期的に更新して地域情報等を発信しているのは 40 館である。

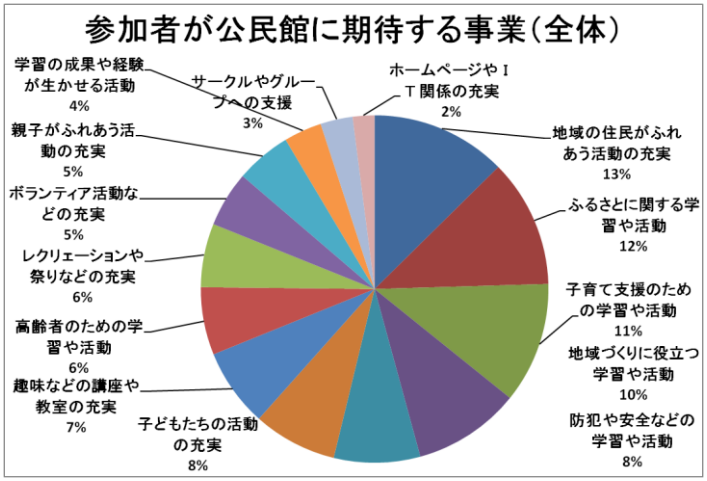
ホームページがある公民館の半数以上では、ほとんど更新されていないといった状況である。

富山県の公民館にあって、全くホームページがない公民館が約 70%あることは早急に改善すべき課題である。

またホームページに関しては、市町村によってその整備状況が大きく異なっているという現状がある。

さらに、アンケート調査から、富山県の公民館職員は、地域住民はＩＴ関係の事業を公民館に期待していないと思っており、地域住民もまた公民館でのＩＴ 関係の事業を期待していないという現状があり、これまで公民館でＩＴ化が進まなかった大きな要因となっている。

③ 地域住民が公民館に求める事業とＩＴ



地域住民が公民館に期待する事業は、「地域住民がふれあう活動の充実」「ふるさとに関する学習や活動」「子育て支援のための学習や活動」「地域づくりに役立つ活動」が上位を占める。「ホームページやＩＴ関係の充実」や「学習の成果や経験が生かせる活動」は低い割合を示している。公民館職員のアンケートでも同様の傾向を示している。

しかし、情報化社会にあってＩＴ関係は避けて通れない事項であり、また大量の団塊世代が退職している時代にあって「学習の成果や経験が生かせる活動」は大変重要な公民館が取り組むべき現代的課題である。

ホームページやＩＴに関しては、公民館職員でＩＴのノウハウをもっている人はまだ少ないし、地域住民もそのような直接的なＩＴ講座を求めていない。そこで、ＩＴのノウハウをもった退職世代の活用やＩＴの特性を生かした地域情報の積極的な発信という考え方で取り組んでいくことになる。

④ ホームページ作成を支援

○○公民館　地域まるごと情報館

ふるさと学習 動画「○○祭り」 イベント　講座 団体　ボランティア 講師　施設　文化財 ふるさとを学ぼう お知らせ ○○市 富山県　子育て情報 商工会　観光協会	公民館だより ○月○日　祭準備 曳山の早朝組み立て作業。午前３時にふれ太鼓が響き男衆と通りを行きます。・・・ コメントをどうぞ・・・ 家族で水芭蕉に親しもう 水芭蕉の育成・観察会です ○月○日（○）13:00 ○○公民館前集合 ご家族でご参加ください。 コメントをどうぞ・・・

富山県には、生涯学習社会を見据えて整備してきた、全国に誇ることができる学習情報システム「とやま学遊ネット」がある。

各公民館がＩＴの必要性を認識しても現実的には単独でホームページを作成していくのは、技術面、経済面からも困難である。そこで、県公民館連合会では、平成 23 年度から県の支援を受けて

① 県の学遊ネットを活用し、県内全公民館の WEB サイトを作成する。
（サイト作成に当たっては、学遊ネット内の約 12 万件の情報やデジタル映像ライブラリーの情報を生かす）

② 公民館職員を対象としたホームページ作成のための研修会を市町村に出向いて実施する。
（１回の研修で上記の「地域まるごと情報館」のような公民館トップページが完成できる研修を行い、後はＩＣＴボランティアや公民館職員等が、公民館だよりなど情報発信や地域資料等の PDF 等を作成して蓄積発信できるようにする）

このことで、それぞれの公民館から身近なイベント、地域映像、学習情報・文化財画像情報などが幅広く提供されることになり、また、学遊ネット上でいつでも他の公民館情報を得ることができるようになる。ＩＣＴを通して地域住民と公民館、公民館同士の新たな交流が始まる。

６　事業実施推進委員会の取り組みの様子

Ａタイプ公民館の実践

（地域内のさまざまな団体などと連携し、各公民館が単独で公民館ふるさと教育を実施）

藪波公民館ふるさと教育推進委員会
上条公民館ふるさと教育推進委員会
安野屋公民館ふるさと教育推進委員会
村木市大町公民館ふるさと教育推進委員会
大町公民館ふるさと教育推進委員会

Ｂタイプ公民館の実践

（市町公連単位で連携し、複数の公民館が共同で公民館ふるさと教育を実施）

城端地区公民館ふるさと教育推進委員	５公民館が連携
福光地区公民館ふるさと教育推進委員	１１公民館が連携
福野地区公民館ふるさと教育推進委員	７公民館が連携
砺波地区公民館ふるさと教育推進委員	２１公民館が連携
氷見地区公民館ふるさと教育推進委員	７公民館が連携

薮波公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

富山県小矢部市薮波地域には、県七大河川の一つである小矢部川に流入する渋江川と薮波川の合流点がある。古来、薮波川は地域南側に灌漑を行う重要な小河川であった。近年この河川環境を保全し、さらに昔の姿に再生しようという住民意識の高まりが見られ、当公民館でも、毎年小矢部川、薮波川の生物・環境調査や環境学習を行い身近な自然に対する体験を中心にした学習を実施してきた。

しかし、三世代で暮らす世帯が多い当地区においても、各世代が共同で作業を行ったり、体験したりする経験が少なくなってきている。また、少子化の影響で、子どもに次の行動を指示しすぎる親や仲間作りがうまくない子どもも見受けられるようになっている。自然体験や集団行動・キャンプ合宿を通じ子らの弱点を補う活動を意識して実施している。また、環境への意識の高まりを契機に、各世代の団体が共同体験をすることで地域の絆と地域愛・さらには環境保全の気風の醸成を図る。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

本事業は、地区住民を主たる対象として活動する。なかでも、河川調査については、地区PTA、児童クラブ、環境保健衛生協議会、長寿会、学校、保育所等と連携し、公民館が核となることで、児童・生徒の地域活動への参加と地域の団体の参加によって安全の確保と異世代交流が促される。

加えて、児童・生徒の通う蟹谷小学校・蟹谷中学校校区には、薮波川と類似する小河川（砂馳川・本堂川・五郎丸川）が３流ある。これらの小河川の調査を行うことによって、薮波川の特徴と将来を考える契機とする。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

十数年前に薮波川に戻ったホタルは環境学習のシンボルとなっている。住民の会話の中に「今年のホタルは…」がよく出るようになり、薮波川・ホタルを通じ、環境問題が話される雰囲気が生まれてきている。この機会を捉え、成人世代が次世代を担う子どもたちと共に体験することで、世代間・地域の絆を深め、住民自身による自然豊かな地域づくりを推進する。このような体験・交流は地域に愛着をもち、誇りをもつ気風を醸成すると共に地域の活性化に繋がる。

◆事業の流れ

実　施　日	活　　動　　名	場　　所	参加人数
8月13日（金）	校区三河川調査	小矢部市内	５人
8月22日（日）	薮波川夏の調査会・学習会	薮波地区内	１６人
9月26日（日）	小矢部川上流探検・調査会	南砺市城端	６２人
10月16日（日）	薮波川清掃と秋の調査会	薮波地区内	２２人
12月18日（土）	環境学習	薮波公民館	５３人
2月7日（月）振替休業日	薮波川冬の調査会	薮波地区内	６人

◆事業の様子

☆　校区３河川調査（平成 22 年 8 月 13 日）

今年度中学に進学した中学生が移動範囲が大きく、小学生では移動困難だろうと自主的に手伝いに来てくれた。

もっとも西の五郎丸川にはスナヤツメ・ドジョウが多く産する。他に渋江川との合流点にはアユ、オイカワ、ヨシノボリ、シマドジョウ等が見られた。

本堂川は三面コンクリート護岸が多くなされ、限られた場所に生きものが生息していた。　ドジョウ、スナヤツメ、オイカワ、ヨシノボリ等が見られた。

〈砂馳川投網を打つ〉

砂馳川は灌漑のための堰が多く堰上流部は池の様相を示しフナ、コイ、ブラックバスが見られる。スナヤツメは見られない

☆　薮波川調査会（平成 22 年 8 月 22 日、10 月 16 日、2 月 7 日）

河川工事のため浅地・安養寺・戸久の３地点を調査した。浅地地内浅北橋付近は流れも弱く、岸辺には湿性植物が生え多くの魚種がみられた。安養寺地内も浅地地内同様であった。戸久地内は、上流域で川の環境は三面コンクリート護岸がなされ、その中に流路がみられる。

内容

環境調査項目…気温・水温・DO・COD・NH_4^+・NO^-_3・PO_3^-

生き物調査　…魚類・水生昆虫

☆　薮波川清掃活動　（平成 22 年 10 月 16 日）

河川の清掃は春・秋の２回薮波川中流域を中心に実施している。春も秋も川の中に捨てられているものはほぼ同じ種類で、ペットボトル・アルミ缶・鉄製缶・発砲スチロール箱・ブルーシート等の人工物と、木の枝・草・竹等の自然物で、１回につき軽四トラック１台を超える流入物が環境保健衛生協議会員によって処理場に搬入された。

☆　小矢部川上流探検・調査会　（平成 22 年 9 月 26 日）

上流探検・上流調査会は小学生対象の事業が 9 月 23 日、保育所園児対象事業が 9 月 26 日に予定されていたが 9 月 23 日が大雨で 26 日に延期して、小・保合同で実施した。

実施日を 26 日に延期したことによって凡そ半数の子どもたちが行事が重なって不参加になった事は極めて心残りである。だが、小・保合同実施は、小学生が保育所園児にタモ網の使い方や魚の名前を教えたりして、学校の垣根を超えた交流が生まれ、予期せぬ効果が見られた。

☆　環境学習会（平成22年10月16日・12月18日）

環境に係る学習会は事業を終えた直後、毎回行っている。本事業における第１回の環境学習会は、８月22日薮波川の調査終了後に実施した。この日薮波川上流部・戸久地内でサワガニの抱卵状態の個体が見つかり、手の中で、次々仔ガニが生まれる様子を観察した。子どもたちは初めての体験に興奮していた。これを教材にカニの発生を中心に学習会を開催した。

◆参加者の声（感想や意見）

子どもたちの声

- 学校ではやらない自然の学習が出来て良かった。
- 山、川、田、畑などそれぞれ異なる自然がある事がわかった。
- 難しいこともあるが参加して少し賢くなったように思う。
- 薮波川の上流に比べて小矢部川の上流はとてもきれいだ。

保護者の声

- 上流探検やキャンプ等、親がなかなかしにくい事業の実施に感謝。
- 何回か参加、来るたびに新しい発見がある。
- 私の勉強になった。

支援団体の声

- 息子に体験の機会を与えてやれなかったことが孫の活動に参加して痛切に感じる。
- 自分の子どもの頃と比較して此処まで来ないときれいな川が無いのかと感じた。
- いつでも声をかけて下さい。応援します。

他地区からの参加者

- 素晴らしい体験ができた。
- 自然体験の機会がない中で感動的な体験が出来た。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

①　共通目標

公民館が行う子どもの自然体験活動は、年々その活動が活発化・広域化してきた。こうした中で、保護者・地域の関係団体の協力は欠かせないものとなっており、それぞれの活動が子どもの学習を支えているという面で、最高の教室の確保の前提となっている。

・子どもたちの行う自然体験学習の安全確保と大人の自己研鑽を行う。（自己啓発）。
・地域住民の地域理解と住民同士の絆の再構築を図る。

共通目標＝安全確保・自己研鑽・地域理解・地域の絆

②　連携先と連携内容

・連携先

学校・保育所…地域生徒・園児に事業案内配布と事業の視察・指導
蟹谷小地区PTA　薮波地区児童クラブ　薮波長寿会　青年有志　地区環境保健衛生協議会

・連携内容

連携先には、主として子どもの体験活動の安全確保・活動指導を担当願っている。

年度当初、それぞれの組織に公民館の年間計画を提示しておき、事業ごとに各団体に派遣人数をお願いする。また、公民館で保護者対象の事業説明会を開き、理解を得るようにしている。小学校には「校外班」を活用してチラシ等の配布をお願いしている。

③　ネットワークの成果

当公民館の行う自然体験活動が、身の回りから地域へ、地域から地区外へと、活動域が活発化・拡大化してきている中で、多くの団体の協力が得られるようになって、活動は極めて安全に、効果的に運営されるようになった。公民館職員や指導者は子どもたちへの細やかな指導に専念出来るようになってきた。

また、常に参加していただける環境保健衛生協議会員や保護者の中には指導できる方がおり、指導の層が厚くなってきている。

最近は２０代の青年が参加してくれるようになり、現地での化学調査の指導を行ってもらっている。また、保護者の中に水生昆虫の指導ができる方がおり、その方面の指導を任せることが出来るようになっている。

④　ネットワークの課題

ネットワークを構成する各種団体は、２年毎に役員改選があり，改選年は事業の内容・支援について丁寧な説明やお願いが必要となる。

公民館の子どもの自然体験活動が、多くの地域住民の中にしっかりと認識されていくようにしていかなければならない。子どもたちの反応等から見て事業はとても有意義であると考えるが、公民館側の独り善がりではなく、さまざまな人たちの意見を真摯に受け止め対応していく必要がある。

◆事業の成果と課題

①　成果

◇　これまで殆ど、無関心であった地域の各種団体が、公民館の諸活動に関心を示し、公民館の全ての活動に積極的に関わりを持つようになった。

◇　子どもたちの体験学習に付き添い参加した保護者や活動支援に参加した成人達にとって、子どもたちと一緒に学習や体験に参加することは、自己啓発の機会やふるさとの再認識の機会となった。上流体験は古き良き時代の川を再認識する機会となった。

◇　地域を流れる薮波川に戻ったホタルは、観察会や河川清掃の契機となり、環境学習の最高の教材となっている。住民全体の共通話題、地域環境の指標となっている。

◇　公民館事業支援団体の増加は、地域全体で子どもを見守る意識の高まりに繋がり、世代間の交流も活発化してきた。

②　課題

◇　指導者がまだまだ不足している。事業を理解し事業に参加する人が増えるに従い、子どもたちの体験活動を指導できる指導者や安全確保などの協力者の一層の確保が必要である。

◇　予算の確保が年々厳しくなってきている。

◇　豊かな体験や学習をするため、新たな体験場所の開拓が必要である。（上流体験）

上条公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

当地域では、若い世代の地域離れ、ますます進む高齢化、三世代同居の減少など、さまざまな現象の中で、これまでの地域のつながりや地域の活力が失われつつある。

また近年、当地域内に新興住宅地が誘致され、若い世代の人口が急激に増加した。これまで住んでいた人たちと新しく住むことになった人たちとの交流は充分とは言えないため、地域が一体となって、幅広い世代が共に学び、豊かな自然・歴史・伝統など地域のすばらしさを再発見し、住民同士のふれあい活動を推進していくことが求められている。そして様々な具体的な交流を通して、地域住民の絆を再構築し、住民自らが地域づくりに参画する機運の醸成を図っていかなくてはならない。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

当地域は、緑豊かな富山平野の田園地帯にあり、昔から田畑を育み守ってきた用水･河川が地域内に多く存在する。小学生を対象にした用水施設見学がこれまでも行われてきた。

この素晴らしい水郷の恵みや水郷の地について､新たにこの地に住むことになった人たちに積極的に働きかけ、講義・体験・調査等の活動を共に行い、情報を共有し、さらなるふるさと上条の魅力を探求していく。ふるさとに関する知識・知力の循環と人の交流を生む住民参画型の活動を展開する。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

地域の子どもから高齢者、地域で長年生活をしてきた住民、他地域より転入してきた住民の交流が広がると共に新たな連携（ネットワーク）の輪が広がり、地域のつながり方や、世代間交流が促進され、地域がより一層元気になる。

地域を理解し、地域を誇りに思う仲間が増えることで、自らの視点で身近なふるさとの自然や歴史のよさを探訪し、子ども達にも積極的に関わるようになっていく。そして地域の事業・行事に、新たに上条地域に住むようになった人や、若い世代の参加者が増加し活性化される。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
７月　４日(日)	ふるさと上条を育む水の源 「白岩川の源流を探る」	白岩川上流（立山町）	４１人
７月　７日(水)	米作り体験「ころがし除草」	上条地域内	４８人
７月３１日(土)	ふれあい交流「親子魚のつかみ取り」	上条地域内	１００人
９月２４日(金)	米作り体験「稲刈り」	上条地域内	４８人
１０月１１日(月)	ふるさとの水を守る 「上条用水施設めぐり」	白岩川ダム～ 上条地域内用水路	３８人
１０月２７日(水)	水のふるさと「上条用水マップ作り」	上条地域内	８人
１０月２７日(水)	ふるさと上条水環境調べ「自噴地下水」	上条地域内	１８人

◆事業の様子

☆　ふるさと上条を育む水の源「白岩川の源流を探る」

源流へは谷筋を登るため、今回はバスで移動できる場所（国立立山青少年自然の家から５ｋｍ先）まで行った。雨天続きの天候で、源流付近の沢の水量が多く驚いた。近くにミズバショウの群生地があり、花の時期は終わっていたものの、新緑を楽しむことができた。

午後からは、改修された横江頭首工で、現地見学と職員から説明を受けた。洪水の流下に安全な構造への改修、取水施設の整備、以前の優れた景観を継承されるよう石積みや化粧型枠などが採用され、生態系に配慮した魚道等を見学した。

☆　米作り体験「ころがし除草」

上条小学校５年生３０人が地域住民の指導で５月から米作り体験が行われた。７月、農家から持ち寄られた１０台余りの「ころがし」という手押しの道具を使い、昔ながらの草取り作業の体験をした。

また、指導にあたった地域の方から、昔の米作りの苦労話や、用水路の生き物の話を聞いた。

☆　ふれあい交流「魚のつかみ取り」

幼児から高齢者まで１００名余りが暑い日差しの中、ニジマスやイワナなど手づかみでワイワイ、ガヤガヤ。大人も夢中になり、親子で水に親しむ楽しいひとときを過ごした。

猛暑のなか会場内の除草・池の清掃等、多くの住民の協力が得られ、一日を通して地域交流の場になった。

☆　米作り体験「稲刈り」

５月の田植え、７月の草取りを終え、９月に、稲穂が充分に実った田んぼに入り、稲刈りを行った。地域の方々の指導で鎌の持ち方から稲の縛り方を習い、一株一株丁寧に刈り取り、わらで束にし、コンバインで脱穀した。その後、乾燥され米になるまでの説明や、米作りには、豊かな大地とおいしい水が必要なことなどを聞いた。

子ども達は収穫の喜びと米一粒の大切さを学んだことと思う。

☆　ふるさとの水を守る「上条地区 用水施設見学」

上流の白岩川ダムから上条用水頭首工、白岩川サイフォン、下条用水頭首工を見学・説明を受け、身近な用水について理解を深めた。

初めて見る頭首工の仕組みや設備の素晴らしさに驚き、水管理の大変さを感じた。

☆　水のふるさと「上条用水マップ作り」

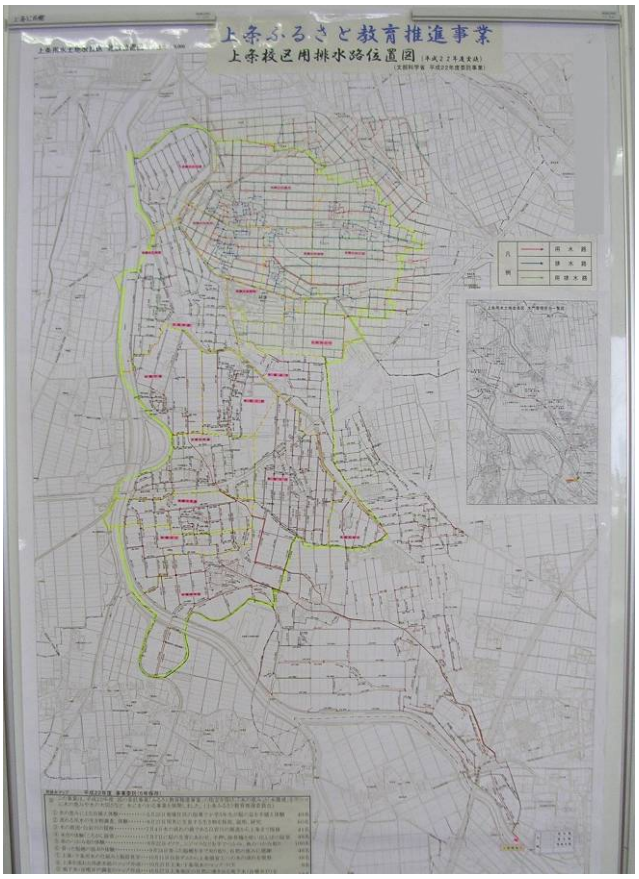
地域にある用水路のすべてをひとつの地図にまとめる。

☆　ふるさと上条水環境調べ「自噴地下水」

町内会長を中心に各町内で、地下水が自噴している箇所を調べ一枚の地図にまとめる。水量が多い自噴地下水を調査することで水資源の豊かさを実感。

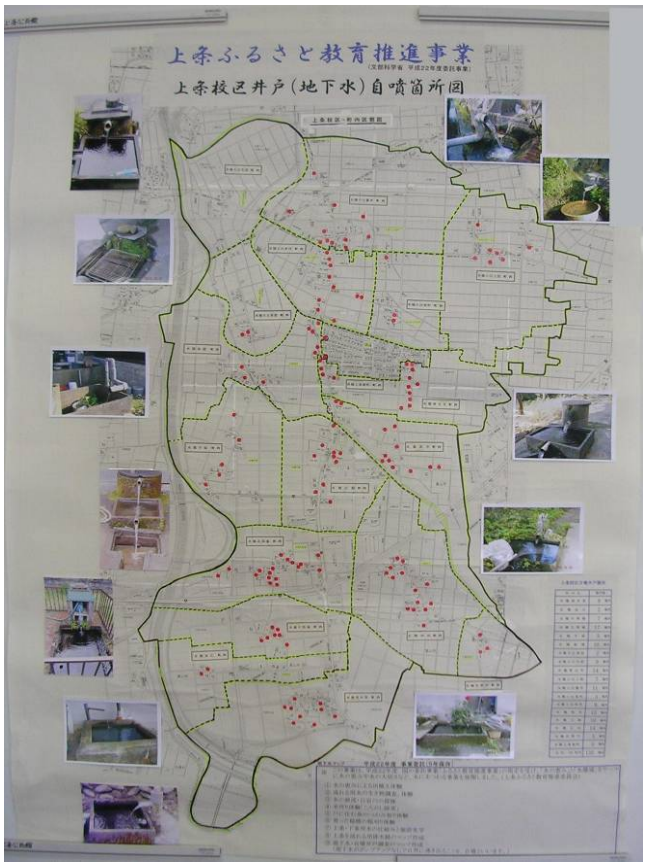
(※自噴とは、ポンプアップしないで地下水が自然に湧き出ること。)

≪上条地区 用排水路位置図≫



用水マップ

≪上条地区 井戸(地下水)自噴箇所図≫



自噴地下水マップ

◆参加者の声（感想や意見）

◇ふるさとの再発見ができる良い企画だと思う。 ◇長年住んでいながら、知らない事が多く、地域を知る事ができて良かった。 ◇自噴井戸数が多く、豊かな水環境に住んでいると感じた。 ◇用排水路の必要性、先人達の苦労が少し分かったように思う。 ◇住民同士の交流ができて、楽しかった。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

① 共通目標

◇ 地域の豊かな自然･歴史･伝統等の再発見、伝承を図る。
◇ 交流活動を通して、地域住民の絆を深める。
◇ 住民自らが地域づくりに参画できる環境を作る。

② 連携先と連携内容

◇ 人員協力　自治振興会、長寿会、小学校、上条小学校育英会、自治公民館、消防団
・各行事毎のチラシの全戸配布（自治振興会）
・　〃　声がけ（上条小学校育英会）
・米作り体験での指導者（特に長寿会）
・魚のつかみ取り体験での、池の掃除・水管理（消防団）
◇ 場所提供　米作り体験（北馬場地区）
魚のつかみ取り体験（工業団地内公園）
◇ 日程調整　小学校の行事に重ならないように調整

③ ネットワークの成果

◇ 豊かな水資源を持つふるさとに、気付いた。
◇ 幅広い年齢層の参加者が集まり会話ができ、ふれあいができた。

④ ネットワークの課題

◇ 予定より参加者が少なかった原因を考え、多くの住民にふるさとの素晴らしさを実感してもらえるよう、企画･内容を検討する必要がある。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ 幅広い年齢層の参加者から、「今まで知らなかったことが分かり、ためになった」「楽しかった」等ふるさとの良さを再認識できた。
◇ 用水施設見学、魚のつかみ取り体験により、水環境の大切さを学んだ。
◇ 新旧住民の世代間交流ができた。

② 課題

◇ 豊かな水資源に恵まれていながら、多くの住民が気付いていない。この身近な地域の素晴らしさを意識できる事業の企画を図ることが大切である。
◇ ふるさと郷土への関心を高めるために、個々の意識向上が望まれる。多くの住民が参加できるよう地域全体で取り組める住民型事業を検討することが大切である。
◇ 地域の埋もれた人材を発掘し、共に学べる環境をつくる必要がある。

安野屋公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

現在の富山市安野屋地区は、少子高齢化、独居老人の増加、核家族化の進行など典型的な都市型地域である。さらに高層マンションの建設誘致により若年層の核家族の増加もみられ、新規転入者と従来の居住者との交流は活発ではない。また、少子化のために芝園中学校下の四小学校が統合したが、反面各地区や学校と地域の交流もままならない状況である。

さらに、市町村合併により県内最大の新富山市が誕生したが、旧富山市の都市部に位置する安野屋地区の住民の中には、合併した町や村のことをよく知らない住民も多い。

そのため、公民館を中心に安野屋地区の自治振興会やふるさとづくりに関与する団体とが連携し、ふるさと安野屋のよさと新富山市を知る共同事業を通して、地域の恵まれた自然環境や伝統を再発見し、地域の横のつながりと世代を超えた住民のつながりを再構築し、地域住民の相互理解と互助の精神を高めていくことが急務の課題となってきている。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

安野屋地区は、富山県有数の水量を誇る神通川流域に位置し、かつては河川において鮎、鱒漁がさかんであった。

そこで近年、小学生と保護者を対象にした自然体験教室を地区内を流れる松川や神通川で実施してきている。この恵まれた自然環境を活動の場に、地域の団体が連携して、子どもから高齢者まで参加が可能な野外体験活動を提供し、「ふるさと安野屋」の良さを再認識してゆく。また旧婦中町の自然を体験することで新市のよさを知る機会とする。

そして、地域全体が協力して人と人がよりふれあうように活動する事業を通して、参加者全員が「ふるさと安野屋」の自然を実体験し「ふるさと安野屋」の素晴らしさを共有することで、世代間を超えた地域住民のつながりの強化と新規転入者と従来の住居者の交流を図っていく。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

地域の各団体、地域住民が集い活動を共有体験して楽しむことにより、地域の世代を超えた交流を促進し、かつ新規転入住民と従来の居住住民とのつながりも促進され、参加者の相互理解と互助の精神をもつことが期待される。結果として地域活力の向上につながる。

また、地域住民が地域の特色を理解、再認識し、「ふるさと安野屋」の恵まれた自然と歴史を学習し、「ふるさと安野屋」を愛する心を持つ人達が増加することにより、子どもから高齢者までの地域の人々が、地域の行事に積極的に参加し関わるようになっていく。さらに、旧富山市以外へ出かけてさまざまな体験することで新富山市をもっと知ろうというきっかけとなっていく。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
８月２２日(日)	親子で神通川清掃ボランティア活動	神通川・安野屋の森	２３０人
８月２２日(日)	ふるさと探訪神通川川下り体験	神通川	８０人
８月２２日(日)	新旧住民交流魚つかみ体験	安野屋公民館広場	１２０人
８月２２日(日)	安野屋の森でふれあいネイチャーゲーム	安野屋の森・旧安野屋小体育館	６０人
９月２４日(金)	パークゴルフで世代交流	神通川河川敷	４０人
１１月１３日(土) １１月１４日(日)	安野屋地区文化祭	安野屋公民館	３３０人

◆事業の様子

☆　親子で神通川清掃ボランティア活動

当日の行事の前に、参加者とともに安野屋の森、神通川川下り到着場所の清掃を行った。児童・保護者の方々が、炎天下にも関わらず、一生懸命足元や周りのゴミを集めてくださったおかげで、きれいになった。心は川下りの不安と楽しみの思いで一杯だったようだ。

行事の後始末も、保護者と各種団体の皆様や参加者全員で行った。行事の前とは見違える程、すっきりとした。

☆　ふるさと探訪神通川川下り体験

普段は様子をながめるだけの神通川を地域住民の幼児から高齢者まで８０名が熟練した指導者のもとゴムボートで川下り体験をした。

約５キロの航行だったが、途中に中州に上陸して河川に自生する植物を観察したり、昔の神通川の川の流れ方を学習したりした。

川の中は思ったより涼しく、参加者全員が安野屋の地理的歴史的特性を改めて理解し直した。

☆　新旧住民交流魚つかみ体験

安野屋公民館前広場にて、水を一杯に張った仮設のプールに鮎を３００匹放流し、年齢別に鮎のつかみ取り体験をした。小学校統合後、初めての開催だったので、幼児から大人までの参加者が、軍手を頼りに一生懸命つかむ様子がみられた。

川漁師の高齢者の方達から、子どもや保護者に、鮎の行動特性を教授してつかまえ方の指導をしていただいた。神通川の自然からの恵みに感謝して自分のつかまえた鮎を塩焼きにした。

☆　安野屋の森でふれあいネイチャーゲーム

自然素材を活用した工作教室を子どもから大人まで体験した。すすきの葉を使って、コオロギを作成したり、植物や動物の連想ゲーム等を行い参加者全員が自然の中での遊びを満喫した。

作成した工作物は、どの子どもたちも大変嬉しそうに家に持ち帰った。

普段は何気なく見ていた身近な安野屋の森には、自然がいっぱいある。その素晴らしさに改めて気づき、いい活動となった。

☆　パークゴルフで世代交流

今年度は、猛暑続きで７月、８月とも熱中症の心配があったため、９月に延期してようやく実施となった。

長寿会連合会の協力のもと、天候にも恵まれて、参加者は和気あいあいと和やかな雰囲気で、世代交流が進んだ。

安野屋地区には、町内に長寿会のない所もあり、そのような地区の高齢者の方々にとっては特に、今回は大変楽しい交流の場となるとともに、ふるさと安野屋への愛着の心も一層増したのではないかと思う。

☆　安野屋地区文化祭で新旧の地区住民交流

１日目は健康展、２日目はお茶席も取入れた。また２日間、体験絵手紙教室も実施した。

作品は保育園児、小学校児童、サークル教室、公民館講座、母親クラブ作品、町内長寿会、一般住民の隠れた才能あふれる作品と多種多様だ。

特に今年度は、早くからの声掛けで、沢山のすばらしい作品が集まり、うれしい限りであった。

また、設営、片付けには各種団体や作品展示者の協力で大変スムーズに行事を進行することが出来た。

新しく安野屋に住むことになった新住民の参加もあり、清掃ボランティアや川下り体験に参加した親子なども参加してくれた。大変よい交流の機会となった。地区住民が公民館を中心に顔の見える交流をしていくことを、これからも大切にしていきたい。

◆参加者の声（感想や意見）

◇　安野屋の素晴らしさを改めて感じる機会となった。
◇　川をボートで下る体験は、いままでにない心地よさ、癒しを感じた。
◇　自分がつかんだ魚を焼いてもらって食べたのは初めてです。とてもおいしかった。
◇　すすきの葉でコオロギを作る事が出来るのは驚いた。自分も出来たのでまた驚いた。
◇　猛暑の中、広いプールを活用したイベントは大成功！地区の子供たちや、保護者・地域住民も大喜びであった。
◇　川下りやネイチャーゲームも、参加者にとって素晴らしい体験になった。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

①　共通目標

地域住民のふるさとでの自然体験学習の機会を充実する。
地域活動における各種の地域団体との連携体制を確立する。
安野屋地区の豊かな自然体験を通した地域住民の交流活動を推進する。
次世代の協力者の発掘と育成を図る

② 連携先と連携内容

・人的な協力

消防団：新旧住民交流魚つかみ体験の安全確保、運営、撤収、会場設営、運営、撤収
児童クラブ：行事全体の受付業務、参加者点呼、会場設営、運営、撤収
体育協会：新旧住民交流魚つかみ体験の魚塩焼き、会場設営、運営、撤収
母親クラブ：会場設営、運営、撤収
食生活改善推進委員会：スタッフのまかない作成
補導委員会：ネイチャーゲーム補助、スタッフのまかない作成

・場所の提供

学校開放委員会：駐車場の確保、交通整理

・事業の実行

NPO：川下り体験、新旧住民交流魚つかみ体験、ネイチャーゲーム体験
富山市ネイチャーゲームの会：ネイチャーゲーム体験
ボーイスカウト：ネイチャーゲーム体験

・事業の運営

安野屋地区各種団体（児童クラブ、消防団、体育協会、母親クラブ、食生活改善推進委員会、補導委員会、交通安全協会、老人クラブ、学校開放委員会等）とNPO法人とやまアウトドアスポーツクラブ、富山市ネイチャーゲームの会、ボーイスカウトなどと連携して運営した。

また、安野屋公民館ふるさと教育推進委員会として立案した企画を各団体で役割分担し、全体の事業を組み立てていった。

各担当部局の指導者の指示が適宜で、順調に事業は実行された。

③ ネットワークの成果

◇ さまざまな団体が、安野屋の素晴らしい自然を見直し体験しようという共通のテーマで連携できたため、地域住民が地域の自然を満喫し、ふるさとを再認識する機会となった。

また、川に関係した事業を展開する事により、神通川と共に生きてきた安野屋地区の特性を知る機会となり、また、普段の生活とは逆に川から地区の自然を見たことによって、地区の自然を広域的に感じれるようになった。

これまでに無い規模の事業実行であった為、今回の事業を通して連携した各団体とはその後も良好な関係が継続している。

④ ネットワークの課題

◇ 次世代の地域住民が地域のつながりをどのように考え、どのように再構築して行くかは予想できないが、今の私達ができることを精一杯頑張って、この地域力を伝承して行かなくてはならない。そのために、それぞれの団体が個別で頑張るのではなく、地域一体となって進めていく方法などを、各団体及び個人が一層連携して導き出さなければならない。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ 子どもから高齢者まで多数参加し、種々の野外体験活動を経験して「ふるさと安野屋」の良さ、特に川に関した地域特性を再認識した。地域の多くの人が協力し、人々がふれあう機会になった。

② 課題

◇ 小学校やPTAとの連携をうまく構築していく必要がある。小学校は統合され、現在４つの公民館の校区の子どもたちが通っている。子どもたちは同じ小学校に通っているので、小学校を核とした公民館同士の連携を今後どのように図っていくのかが課題となった。

◇ 自然体験活動においては、安全の確保を最優先する為の研修会を開催する必要性がある。

村木公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

魚津は古くから開け、縄文式土器が出土し、奈良時代には大伴家持も来て詩を詠み、戦国時代には魚津城が存在し、上杉軍と織田軍の戦いもあった。また江戸時代には北前船、明治以降には蒸気船が立ち寄り、魚津の産物は北海道ばかりでなく、全国各地へも流通されていた。現在魚津市には魚津まつりがあり、そこでは花火大会、たてもんまつり、蜃気楼踊りが催されているが、その発祥地は主に村木地区である。そこで村木地区の文化を改めて見直し、伝統文化を掘り起こしていく。

現在村木地区に、公民館傘下の団体として、高齢者学級、女性セミナー、体育振興会、文化振興会、食生活改善協議会がある。傘下外の団体として区長会、自主防災組織、社会福祉協議会、老人会、消防団、環境保健衛生協議会、鴨川にもサケを呼ぶ会、交通センター村木支部の団体がある。行事を通してこれらの団体が協力して、有機的に働き地域の由来や伝統文化を理解し、大人から子どもへと文化の継承を行う。これをもって地域の活性化を行い、ふるさとの教育の向上に発展させていきたい。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

現在、村木地区には、埋没林館があり、たてもんまつりや蝶六踊りの発祥の地でもある。伝統行事には、灯篭作り、灯篭流し、種類の多い蝶六踊り、御幣作り、火祭りがあり、多くの地域住民や団体が協力し合って行事を推進している。

しかし、昔存在したものの中には、現在では消えて存在しないものもあり、それ等を調べて復旧させていく。まずは、昭和７，８年頃の村木尋常小学校で作られたカルタに詠われている詩をもとに、当時の町の全貌に近づけていく。

手順としては、①広報で知らせる。②アンケートをつくる。③お年寄りから話を聴く。④現地見学、調査をする。⑤講演会を開く。

また協力関係としては、文化振興会、老人会、女性セミナー、育成会、小学校、団体がそれぞれが協力できる場面で活動する。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

公民館と各種団体が共同した、3 世代ふれあい清掃、3 世代ふれあいペタンク大会、花植え、七夕作り、七夕祭り、灯篭作り、灯篭流し、蝶六踊りの街流し、敬老会、体育祭、紅葉集会、文化祭、ケーキ作り、御幣作り、火祭り等の行事がより盛んに行なわれるようになる。

また親世代が主体的にかかわることで、地域の人々と共に、子ども達も多く参加協力するようになっていく。そして地域住民が自らの手で①現代版カルタを作る。②カルタから詩を勉強する。③小学校でカルタ大会を行なう。④卒業記念に贈る。⑤町でもカルタ大会をする。⑥紙芝居をつくる。⑦幼児や老人にも紹介する。このことが、やがては魚津市全体のカルタ作りにも発展し、地域おこしの大きな原動力になっていく。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
７月　３日(土)	地区探検	魚津市、朝日町	２５人
７月　７日(水)	七夕祭り	魚津神社	５１４人
８月　５日(木)	灯ろう流し	鴨川（餌指公園）	５３０人
８月　８日(日)	蝶六街流し	魚津駅前通り	１２３人
９月　２日(土)	魚市場見学	魚津おさかなランド	５１人
１０月　２日(土)	魚市場見学	魚津おさかなランド	２５人
１月　８日(土)	かるた大会	青少年ホーム	９０人

◆事業の様子

☆　地区探検

「三太郎博士の生誕地を訪ねて」をテーマに実施した。魚津の三太郎とは、川原田政太郎、盛永俊太郎、宇田新太郎の三博士に太郎という共通の名に由来する。

先ず、川原田博士の石碑を訪れ、講師より、次は、盛永博士の生家を訪れ、主人より、更に朝日町にある宇田博士の生家を訪ね、息子の両博士より、それぞれの苦労話や功績の説明を受けた。参加者一同、感銘を受け、科学の大切さと必要性を感じた。

かるた詩「さ：三太郎博士魚津のうんだ大偉人」

☆　七夕祭り

七夕祭りは、短冊に願いを書き、燃やすことによって願いが叶えられる。中央通商店街では、七夕の夜店があり、魚津神社境内では、七夕が燃やされている。数年前まで、ごみとして処理とされていた七夕が一昨年より、住民の理解を得て、魚津神社で燃納できるようになり、地区や他町からも七夕が持ち寄られ、今年は百十数本が燃やされた。

境内では、育成会で、かき氷の夜店を出し、七夕の火が下火になると、参加者での盆踊り大会も開かれた。

かるた詩「ね：念願の七夕祭り復興す」

☆　灯篭流し

灯篭作りから始まり、五百数十個の灯ろうが作られた。

当日は、各自の作った灯篭を持ち寄り、霊送りと先祖のご恩に感謝し、願いを込めて流された。子どもも大人も、家族やたくさんの人々が、餌指公園に集まり、灯篭の流れていく幽玄な様子に祈りを込めて眺めていた。

海を汚さないために、流れてくる灯篭を川に入り、河口で回収した。

かるた詩「む：村木地区夏の風物灯ろう流し」

☆　蝶六街流し

魚津祭りの蝶六踊の発祥は村木地区にある。従って、村木小学校児童は、その伝統文化の継承に、夏休み中に、手踊り、扇子、菅笠、花笠、脚半、山中、跳ねそ等の種類の多い踊りを練習した。

村木小学校の児童は魚津祭りの街流しの先頭を切って踊り、いろいろな蝶六踊りを披露する。また、今年より、蝶六を楽しむ会が発会し、自作の横断幕や、法被や股引、草履をそろえ、村木地区の踊に、華を添えた。

かるた詩「村木地区蝶六踊の発祥地」

☆　お魚ランド見学

魚の地産地消の推進事業として、児童、地域住民がお魚ランドを見学した。お魚ランドは、水揚げから輸送までを、衛生的で、安全安心の市場。児童には、漁業関係者の特別の案内で競り市や、魚の種類、取り扱い、輸送等についての説明があった。一般の人にはガイドがつき、施設についても詳しく説明された。

魚津には新鮮で、美味しい魚があることを再認識した。

かるた詩「朝市のお魚ランド声響く」

☆　かるた大会

青少年ホームで、ご幣作りが完成すると、その後、完成したかるたの、お披露目「かるた大会」が開かれた。

「郷土かるたは」、題材、読み札の詩、絵札の写真、絵札の説明等、すべて地域住民から募集し、読み札、絵札のそれぞれ 46 枚を選ぶのに投票などをしながら、皆が参加して出来た、参加型かるた。当日は児童の 4 チームと大人の 1 チームでかるた大会を行ったところ、地域の名所、行事等身近で、知らないことも出てくるので、非常に興味深く、和気藹々と楽しく大会を終えることが出来た。

かるた詩「る：類題のかるたを詠みて和（わ）をつくる」

◆参加者の声（感想や意見）

◇　地区探検では、魚津のうんだ偉人がおられることを知って、大変誇りに思えると同時に、科学の必要性を強く感じた。

◇　七夕祭では、念願の七夕復興す、のかるたの詩の如く、七夕祭で燃納ができるようになってよかった。

◇　蝶六踊の待流しでは、いろいろな種類の蝶六踊が出来る村木小学校の児童が自慢できる、との声もあった。蝶六踊はやっていて楽しい、との声もあった。

◇　かるた大会では、「郷土かるた」によって、知らなかった地元のことが分かり、誇りが出てきた。子ども、大人との共通な話題で話し合えるようになった。

◇　灯篭流しでは、作られた灯篭の品評会などもやれば、面白い企画になる、との意見もあった。灯篭を自分も作った、という達成感があった。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

①　共通目標

地域住民の協力関係の構築。そのための共通理解。
地区で行われているいろいろな行事を通して行事の内容を理解し、継承していく。
偉人を捜し、地域に根ざした伝統文化を理解し、継承していく。
地域に誇りをもって、住んでいてよかったと思えるようにする。

② 連携先と連携内容

◇ 七夕祭り　中心団体：地区振興会

数年前まで、七夕は小学校のグラウンドで回収され、ゴミとして処理されていたが、魚津神社の境内で燃やすことが許可され、地区で七夕祭りを開催することになった。

しかし、竹を販売する店もなくなり、山間地の地区の方へ竹の伐採を依頼し、用意した。竹の斡旋は地区回覧の他に、小学校、保育園にも知らせた。地区住民が求めやすいように、日曜日に一日を公民館で斡旋する日を設け、地区振興会、育成会が行った。地区以外からも竹を求めに来た。育成会、地区のお年寄りのサロンも七夕を作り、魚津神社の境内に飾りつけた。

神社の会場設営は、文化振興会、区長会、ボランティアで。竹を燃やすので、消防団は消防自動車とともに配置。夜は中央通りで夜店があり、児童のブラスバンド演奏、育成会のカキ氷店も出店した

◇ 灯篭流し　中心団体：文化振興会

灯篭は文化振興会、老人会、育成会、女性セミナー、家族等で五百数十個作る。公民館で灯篭作り講習会を開催したり、2週間程毎日、文化振興会や老人会で灯篭作りをした。

鴨川での灯篭流しの足場の設営は文化振興会で行うが、メンバーの高齢化が進み、川の中での作業は重労働であるため、新しい人の勧誘がされてきている。河口の灯篭回収は鴨川にもサケを呼ぶ会、交通整理は交通センター村木支部が担当する。地区の若手市職員のワーキンググループも協力する。

③ ネットワークの成果

行事を行うのに、中心となる団体があり、各団体は、主体性を持って行っている。自分たちの出来ない部分は、諸団体や住民に理解を求め、協力を得ている。

地区振興会が発足して、新たな行事が催されるようになり、いろんな場面での協力体制ができている

④ ネットワークの課題

各団体の役員が固定し、高齢化している。高齢者が元気で活発で、いろんな行事に関わり、生きがいを感じていられるが、力仕事を伴うときは、危険も生じてくる。年配者に対する遠慮もあるのか、若い人の協力が少ない。地区全体が高齢地区であるが、人生経験の豊富な人達の知恵をかりながら、若い人を巻き込み、地区を盛り上げていかねばならない。

諸団体に属さない人が気軽に参加や協力できるように、人脈づくり、広報活動の充実が必要である。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ 地区探検

平成 14 年から今年で 9 回目になる事業で、初めはごく狭い地区を訪れていたが、年を追うごとに、範囲が広くなって、バスを利用するようになった。社会福祉協議会の協力を得てバスが借りられた。バスの利用によって、市内の遠い場所も訪れることができ、市内の主だった名所、旧跡を訪れ、研修も広く、深くできるようになってきた。また、女性セミナー等の大人も加わり、ボランティアとして、児童の世話や交通整理を、地区探検の講師も、地域の有識者の協力も得られた。協力範囲が広くなった。

◇ 七夕祭り

当時は、角川へ七夕を流しに行っていた。流すことも、燃やすことも出来なくなり、村木、大町の小学校の校庭に竹を回収し、ゴミとして処理されるようになった。一昨年より、村木振興会の努力によって、育成会、区長会、自主防災、消防団、魚津神社、神社周辺の協力も得て、魚津神社の境内で燃やすことが許可された。神社での七夕の燃納には、毎年増えて、今年は百数十本になった。七夕祭りの復興を願う気持ちが強くあって、沢山の各団体の協力が得られるようになった。

◇ 蝶六踊の街流し

火の宮地区が蝶六の発祥地であり、魚津祭りの一大行事となった。蝶六踊の種類がたくさんあり地元の指導者が児童に教えている。夏休みの指導には、文化振興会、地元の踊り手、学校の先生等が指導を見守り、児童整列、菅笠、花笠等の道具の出し入れ等も手伝っている。協力が広がった。

◇　かるた大会

かるたの製作にあたり、題材、かるたの詩の募集は各種団体、地域全体に直接、回覧板を使って作成の趣旨を伝えて募集し、題材や詩の選定には、地域の人々投票を行って、46 首の選定を行った。読み札に合った絵札の写真、その説明も全地域全体の参加型のかるたが出来上がった。いままで気が付かなかった自分の居場所が、そこにあることに気付き、大人も子どもも、かるたに親しみを感じ、興味深く、楽しい大会になった。地域を知り、理解し、認識し、自分の地域の良さに誇りが持てるようになった。行事はその趣旨を皆が理解し自分もやっているという参加型にしたのでよかった。

◇　灯篭流し

灯篭作りから始まり、五百数十個灯篭が作られた。灯篭の台に、割り箸 4 本立て、それぞれ絵を描いた紙を貼り付けていく。当日は、各々の作った灯篭を持ち寄り、霊送りと先祖への感謝の気持ち、そして、何かの願いを込めて流された。それぞれ自分の作った灯篭は、製作の完成の喜びを得ると同時に、流すのが惜しい、という気持ちが交又した。流す場所の餌指公園には、たくさんの人が集まり幻想的に流れていく光景に、祈りを捧げている人もあった。参加した皆さんの中には、この光景を他の人にも見せたかった、と述べられていた。これもまた参加型の行事である。そこに喜びがある。

② 課題

◇　地区探検

何回も回を重ねていると、自分の地域の探検が少なくなり、範囲を拡げなければならない。その為に、歩くばかりでなく、バスなどの交通機関の利用が必要となった。また、児童の減少により、伝えたい児童の参加が少なくなった。学校との連携が更に必要となった。

◇　七夕祭り

七夕の竹を販売する店がなくなり、自分達で竹を用意し、竹はあるよと伝え、販売せねばならなくなった。竹の長さの長短も人によっていろんな要望があった。竹を燃やす場所の火の管理に気を使った。商店街は七夕祭の夜店が開かれているので、商店街との連携をとれば、もっと活性化できる。魚津神社の境内での飾りや催しも増やしたい。

◇　蝶六踊の街流し

今年は踊る場所が市の中心街より、駅前通りの方に変更になったので、踊る場所での整列方法を調べるのに実施検証が必要となった。児童の夜の参加であるため、疲労と迷子の懸念があり、付き添いの人数を増やす必要があった。

◇　かるた大会

自分たちで作った「郷土かるた」をたくさんの人に読んでもらい、地域の人に理解してもらうために、かるた大会を多く開く必要がいる。「かるた」にまだ載せたいものがあった。それをどのようにして満たすか。また「郷土かるた」の住民の要望にどのようにこたえるか。かるた本体以外の箱や詩集マップ等もかるたに関わるものであり、紙芝居等も製作したい。それをどのように解決していくか、の問題もある。

◇　灯篭流し

灯篭の流す場所は川渕ではなく、川の流れの中央辺りになるので、川に足場を作り、流す人の安全を考えねばならない。従って、足場は頑丈な物にして、夜の歩行には混雑しないように、足場での、行き来の整理も必要であった。また、道路の行き来には、地区の交通指導員やワーキンググループの協力も必要であった。灯篭は、鴨川にもサケを呼ぶ会の人によって、海に流れるのを止めて、河口で回収してもらっている。夜、川に入っての作業に危険が伴い、安全性が必要。

ふるさと教育推進事業　村木「郷土かるた」作り

1．村木尋常小学校　「郷土かるた」

昭和７、８年頃できる
昭和５２年絵の復活
70 歳、80 歳代の人が詩を
覚えている。
誇りを持っている。

2．「ふれあい」の行事が多い

三世代ふれあい清掃、ペタンク
花植え、地区探検、七夕祭、
灯篭流し、蝶六踊、敬老会、体育祭、
文化祭、ケーキ作り、ご幣作り、
火祭り

3．村木地区の特徴を「かるた」に。各会合で説明

題材募集　延べ 610 題
地区の誇り、伝統文化
住民の参加

諸団体、
全家庭へ回覧
１４０題に
約 80 題に絞る

4．「かるたの詩」募集

詩の応募箱を公民館に。
80 題の題材について
7 月中に約 480 首集まる

5．私の選ぶ「詩」投票

投票箱を公民館に。
480 首の内、自分の選ぶ
「かるたの詩」を投票。
投票数 1,050 票
各「かるたの詩」に配分。

6．４６文字,４８０首の「詩」への投票結果

480 首から 46 文字の
「詩」の選考方法の会議。

7．「詩」の選考会議　第１回

４６文字の「詩」を
選ぶ。
投票の多いもの、
題材が十分か。
字句が適切か。

8．「詩」の選考会議　第２回

9．「詩」にあわせた絵を探す。
『詩の一部の絵』

○閻魔様悪事をすれば舌抜かれ

10.カルタを配布

11.カルタ大会
平成 23 年２月８日(火)村木小学校体育館

大町公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

私たちの住む大町地域には、歴史遺産である魚津城跡やその周辺の寺社等の旧跡や旧北陸道沿いに商店街があり、これまでそれらの歴史遺産や伝統的行事などについて地域住民に周知すべく、さまざまな施設との連携を図りながら各種イベントを行ってきた。地域住民は公民館に非常に協力的で、子どもたちの参加率も高い。

しかし、それらのイベントは、改良を加えながら長年実施しているものの内容は単発であり、参加者は大町小学校の児童及びその保護者と地域住民に限られている。また、施設等との連携はイベントを行う時には強くなるが、それ以外の時には弱まってしまう現状がある。

これからは、大切にしてきた地域に伝わる伝統的な行事を担う若い人材を育成するといともに、地域内外の多くの団体や施設との連携を長く一層強化するための「何か」を見つけて、発信していかなければならない。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

公民館主催の住民参加型イベントや行事の更なる充実を図るため、地域内や魚津市内にある名所・旧跡などの施設や地元商店街との連携を更に強めていく。

また、地域内にある「魚津城」や「旧北陸道」及び「米騒動発祥の地としての米倉」の学習や保存・活用活動では、博物館だけではなく、図書館等とも協力してそれらの歴史的背景についての知識を深め、自分達のふるさとの大町の「名物」は何であるかをイベントや行事を通して住民自らが模索していく。さらに、それを地元住民だけでなく他地域の住民にも積極的に知らせ、更なる広域での連携をも図っていく。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

これまで、地域住民に限定していたイベントを、隣接地域にも拡大することで、改めて自分達の住む地域の素晴らしさに気付き、郷土愛を深めていく。また、地元にだけいては気付かなかった大町の「名物やよさ」を、他地域からの目で見ることで新たに気付くことができる。

地区内にある「魚津城」や「旧北陸道」及び「米騒動発祥の地としての米倉」の掘り起こしの活動は、商工会や首長部局とも連携していくことで、地域の賑わいづくりと共に、街おこしにもつながっていく。

さらに、町商工会などと連携した「銀座通り小学生児童によるシャッターの絵付け」などの活動は、公民館と地域住民による街おこしのみならず、公民館と首長部局が進める協働のまちづくりのモデルにもなっていける。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
７月　３日(土)	大町キラキラ七夕まつり	大町海岸公園	２００人
８月　８日(日)	うおづ祭り蝶六街流し	魚津駅前通り	１２０人
１０月　３日(日)	大町公民館大運動会	大町小学校	８００人
１１月１３日(土)	シャッター絵付け	銀座通り商店街	３０人
１２月　５日(日)	大町ふれあいもちつき大会	大町公民館	１２０人
１月１０日(月)	三世代交流火祭り御幣作り	大町公民館	４０人
２月２６日(土)	旧北陸道　案内看板設置	大町地区	１０人

◆事業の様子

☆　大町キラキラ七夕まつり

大町海岸公園においてステージイベントと屋台を行う。ステージでは大町幼稚園や魚津保育園の園児たちの発表や、地元でサークル活動をしている人たちの発表を行う。屋台では、各団体がそれぞれ焼きそば・どんどん焼きなどを担当するほか、大町海岸をきれいにする会が、日頃海岸清掃時に集めた天草を使ってのところてんの販売も行う。

日没頃より七夕の焼納を始め、大町地区内外から自宅で作った七夕を燃やしに来る人の長い列ができ、大変賑わう。

☆　うおづ祭り蝶六街流し

「米騒動」をテーマに、衣装や山車で“米騒動発祥の地”をアピールする。仮装隊だけでなく、踊り手も児童・婦人会・はねそ踊りそれぞれに衣装を決めて参加する。

踊り・仮装共、リピーターが多く、特に小学生のうちから踊っていた者は、その後中学・高校・大学へ進学した後も参加している。踊りの練習は、３～４回程度。

☆　大町公民館大運動会

魚津市の各地区で行われている地区運動会だが、大町では町内間の親睦を図るため「応援合戦」を行っている。応援合戦は毎年各団で趣向を凝らし、練習を重ねて行われている。他地区には見られない応援合戦をずっと続けて行きたいと考えている。

☆　シャッター絵付け

大町地区にある銀座通り商店街の活性化のため、空き店舗のシャッターに小学生の絵を描く。今回は「銀座ワイワイもちより市」の会場として使わせてもらっている店舗のシャッターに絵を描いた。デザインは、地元の大町小学校６年生の中からプロジェクトチームを組織して行った。小学生のデザイン画は、実行委員会有志の手でシャッターに転写し、「まちなかアート in 商店街」のイベント開催時に、６年生により彩色した。また、「銀座ワイワイもちより市」開催日に序幕式を行い、完成を祝った。

シャッターの絵を見に来る人の姿が見られるようになり、街の賑わい創出に一役買ったように思われる。

☆　大町ふれあいもちつき大会

古き良き伝統を子どもたちに伝承しようと、数年前からもちつき大会を復活させた。ついたもちは、餡・きな粉・大根おろし・ゴマをまぶして食べ、雑煮を作った年もある。また、白餅だけでなく、キビを混ぜたり、古代米を混ぜたりした変り種のもちもつく。

スタッフには、育友会・婦人会・老人クラブにも入ってもらい、三世代での楽しい会になっている。一般参加は町内回覧で募集している。

☆　三世代交流火祭り御幣作り

大町地区と村木地区の一部に伝わる祭りである「火祭り」に作られる「まとい」を模した御幣は、それぞれの町内ごとに作られているが、それはどこも大人だけで作業しており、子どもたちは関わっていない。そのため、地区のいたるところに飾られている御幣に、子どもたちは関心がないように思えるため、伝統文化の伝承を考え企画した。

実行委員は、委員長が実際に御幣作りに長年携わっている人から選んだ。また、参加した児童もその親も実行委員も男性がほとんどで、熱心に制作に加わっていた。

☆　旧北陸道　道標・案内看板設置

大町地区を縦断するように旧北陸道（北陸街道）が通っているが、普段は大町地区に住んでいる人にも意識されていない。五畿八道の一つであり、加賀藩が参勤交代のために使ったこの街道を広く知ってもらうために、街道の説明文や古い写真を看板にして立てる。

◆参加者の声（感想や意見）

◇　七夕まつりは、雨天にもかかわらず多数の参加者があり、「楽しかった」との声が聞かれた。また、海岸で燃やすことが恒例となりつつあり、七夕飾りに包装紙や広告の紙などを使って作ったものを自慢する人もいる。

◇　うおづ祭り蝶六街流しは、中学生や高校生・大学生が「また、来年も参加させてください」と言い、約束どおり参加している。

◇　シャッターの絵付けは、参加した児童たちからは楽しかったとの声が多く聞かれ、また地域住民はシャッターを見るために商店街へ足を運ぶようになり、「シャッターが良くなった」「可愛くなった」「賑やかになった」と絶賛している。また、他のシャッターへの絵付けの要望も出てきている。

◇　もちつき大会では、「つきたての餅がおいしかった」「餅をつくのが楽しかった」「きびを入れた餅もおいしい」と、参加した人達に喜んでもらえた。また、年配の女性スタッフからは「何年もしとらんだけど、覚えとったわ。できたわ。楽しかった。」という意見があり、もちつきが各家庭でされなくなって久しいことが感じられた。

◇　御幣作りでは、子どもと一緒に参加した父親たちから「こういう風に作っとるって知らんだ」という声が聞かれた。また、祖父世代の方からも「この作り方を、自分の町内でもやってみたい」という意見があり、大人たちにも改めて御幣に関心を持ってもらえた。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

① 共通目標

地域活動における団体の連携体制
地域の伝統行事の伝承
旧北陸道沿いにかつて発展した商店街の活性化

② 連携先と連携内容

◇ 協力団体

大町体育振興会、大町文化振興会、大町小学校、大町小学校育友会、大町婦人会、大町区長会
大町老人クラブ、大町スポーツクラブ、なでしこの会、交通センター大町支部、大町校区防犯組合
しんきろうの見える海岸をきれいにする会

◇ 場所提供

大町小学校、銀座通り商店街商盛会

◇ 事業実行

事業ごとにそれぞれの実行委員長が、事業を行うにあたり必要と思われる団体より実行委員（主に団体長）を招集、または個別に人員を選択・召集し、実行委員会を開催する。

実行に当たっては、実行委員会において各団体にそれぞれ得意とする部署を担当してもらい、部署の運営方法及び内容については各団体に一任する場合もある。実行委員長はそれを統括する。例えば、「大町キラキラ七夕まつり」では、ステージ発表は文化振興会が担当し、屋台は体育振興会・育友会・大町海岸をきれいにする会・婦人会・ボランティアグループなでしこの会が担当し、七夕燃納は消防団第２・第３分団が担当し、交通整理は交通センター大町支部が担当。大七夕制作を運動会の５色の団（自主防災会の組み分けと同じ・各団６～８町内で結成）で行ったので、会場の飾りつけや燃納の補助に区長会が加わった。これらの担当は、実行委員会の会合において、七夕まつりでの屋台やステージの内容は何をすれば良いか、住民に人気のあるものは何か、たくさんの集客をするには何が必要かなどを話し合いながら、それぞれの団体ができることを決めた。内容や方法は予算の範囲内で自由ということにしたので、それぞれの団体が楽しみながら案を出し、実行した。

③ ネットワークの成果

以前から公民館を中心とした地域行事に、ボランティアとして関わっていた体育振興会や文化振興会の役員は、行事に関わることにある意味慣れているため、スタッフとして関わりながらその中で自分たちなりの楽しみ方を見出し、こだわりを貫き通し、それによって行事が一層楽しいものになっている。

今回、ネットワークを広げるにあたり、老人クラブや民生委員など、これまでスタッフとしての関わりがほとんど無かった団体にも積極的に働きかけ、参加してもらった。始めは、スタッフということに少し身構えていたので、まずは一緒に参加して楽しんでくれれば良いと持ち掛け、会合に参加してもらった。会合を重ねるごとに不安が無くなり、行事終了後には参加して良かったとの感想が聞かれるようになり、年度の終わり頃になると、参加の仕方が積極的になってきた。

また、商店街と連携して行事を行ったことで、行事をするにあたり商店街を巻き込むことを意識するようになり、内容に広がりがでた。また、商店街の現状や問題が他団体にも理解され、連携した団体がそれぞれ情報を持ち寄り、色々な立場や角度からそれらについて考えることができ、問題解決に役立とうとしている。

④ ネットワークの課題

各団体の役員がほとんど交代せず、同じメンバーで固まっているため、各行事にスタッフとして参加する顔ぶれが固定してきている。それぞれの団体が、新たな人材を見出すことが課題となっている。また、団体所属に関わらずスタッフとして参加できるメンバーを増やしていくことも、今後の課題だと思う。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ 大町キラキラ七夕まつり

平成１９年度から始まった事業で、住民にはだいぶ定着してきており、この祭りをきっかけに七夕飾りを作る家庭が増えてきている。また、運動会（自主防災会）の団（６～８町内で結成・５団）ごとに、団長を中心に大七夕飾りを作ることで、町内間の連携や連帯を図ることができた。また、この行事で照明に各団所有の発電機及び照明器具を使用することで、同時に点検・修理を行うことができ、また各団所有の防災器具庫の常備品の点検も行い、自主防災の意識付けが図れた。

この行事は、地区にある魚津市消防団第２・第３分団や、交通センター大町支部にも協力してもらうため、それぞれの役割を住民が理解できた。

◇ うおづ祭り蝶六街流し

うおづ祭りは、毎年８月の第１金曜～日曜に行われるため、小学生だけでなく、小学生の頃に参加して踊りを覚えた中学・高校生や大学生も参加し、また、一般でも踊りの苦手な人のために仮装での参加も呼びかけているので、毎年１２０名前後の人たちが集まる。テーマを決めて、山車や衣装を約１ヶ月かけて制作するが、そのことが楽しいため、自主的に公民館へ足を運び作業をする人が年々増えている。また、誰でもいつでも足を運んで作業できるよう、公民館の１室を作業部屋として開放している。

◇ シャッター絵付け

商店街の活性化ということで、銀座通り商店街商盛会から持ち上がった企画を、公民館が協力団体との連携の橋渡しをする形で実行委員会を組織し、実行に至る。特に、シャッターに描く絵を児童に描かせようということで、学校との連携に力を注いだ。学校側との連携は、地区運動会・おおまち祭・スキー会・立山登山などを連携して行ってきた土台があるため、比較的スムーズだったが、時期的なことなどの擦り合わせに時間を割き、魚津市商店街連盟が関わっている「まちなかアート in 商店街」、銀座ワイワイもちより市の開催日とのタイアップができ、商店街の賑わい創出に色を添えることができた。

◇ 大町ふれあいもちつき大会

スタッフ常連の体育振興会・文化振興会・婦人会の他に、育友会、老人クラブにも働きかけた。もちつきの一連の作業（もち米をとぐ→蒸す→つく→まるめて餡やきな粉をまぶす）を、三世代で一緒にすることで、祖父母世代から親世代や子世代へ作業の手順を教えながら、昔のもちつきの様子や生活の様子などの話をするなど、三世代間のとても良い交流になった。

◇ 三世代交流火祭り御幣作り

子どもたちに伝統行事を伝承するために企画した。実行委員として参加した人たちは、毎年自分の町内の御幣を作っていながら、それぞれの町内が全く違う作り方をしていることを知らなかったため、大人たちも改めて御幣について考える機会となった。また、若い父親たちの中には、まだ町内の御幣作りに参加したことの無い人もおり、子どもたちと一緒に興味深げに作る姿が微笑ましかった。

今回作った御幣は、昔の火祭りの様子を描いた絵を参考に作ったため、実行委員会ではその制作方法について時間を割いて

話し合われ、子どもや若い父親世代だけでなく、高齢者世代も改めて御幣について学ぶ機会となった。また、実行委員からは、今回の作り方を自分の町内の御幣作りにも生かしたいという意見も聞かれた。

② 課題

◇ 大町キラキラ七夕まつり

７月７日にこだわると平日の開催になり、スタッフが準備等をすることが困難になるため、今年度は第１土曜日に行った。その影響からか、当日雨天だったからかわからないが、前年度より参加者が減ったように思われる。第１土曜日に開催する場合、開催日の周知の方法を考えていかなければならない。

また、魚津市内で７月に七夕をする習慣がある地区は、大町地区と村木地区だけなので、一緒に七夕まつりを開催することができないか、検討していきたい。

◇ うおづ祭り蝶六街流し

ここ数年は、踊りよりも山車制作や仮装に力が入っていたため、一般の踊り手が減ってきている。原点に返って踊りの方にも力を入れていきたい。

◇ シャッター絵付け

まだある空き店舗のシャッターへの絵付けを今後も続けながら、空き店舗を利用した誰もが集える居場所作りや、イベントなどを行い、商店街の賑わい作りをしていきたい。

◇ 大町ふれあいもちつき大会

もちつきをして、それを食べるだけのイベントなので、餅花を作るなどのもちつきに関係した伝統行事も行っていきたい。

◇ 三世代交流火祭り御幣作り

毎年１月下旬に、大町・村木地区の風物詩になっているはずの御幣だが、それが当たり前のようになりすぎているからか関心を持つ人が少なく、それが原因かどうかわからないが、子どもの参加希望が少なかった。（募集に対する申し込みが少なかったため、直接何人かに言葉をかけて参加してもらった）もっと、御幣に関心が持てるようなアピールをしていかなければならない。

【参考】大町公民館が取り組んできた魚津城をテーマとした活動の写真

①魚津城の戦いの説明看板
②大町歴史館と魚津城下町ジオラマ
③魚津城壁作り
④のろし上げ（のろし祭り）
⑤騎馬チャンバラ（のろし祭り）
⑥蝶六街流し

城端地区公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

富山県南砺市城端に伝わる『城端むぎや祭り』は、昭和２６年から始まり、本年で６０回を数える歴史ある祭りである。かつては、越中八尾のおわら風の盆と並び富山県の二大民謡祭りとして県内外より観光客が集まり賑わいをみせ、地域振興に役立っていた。

しかし、近年の急激な社会変化に伴う価値観の相違、地域の相互扶助精神の希薄化などから、住民の祭りに対する思いや、参加形態、運営方法などが変化しつつあり、この状態が続くと確実に先細りしていく心配がある。これまでのやり方を大切にしながらも、地域一丸となって伝統を守り、人材を育てていかなくてはならない。

また、地域に存在する文化財・史跡・天然記念物などを保存し、次世代に伝えなければならないが、その理解が十分とは言えない現状である。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

自治振興会など各種団体と連携し、『城端むぎや祭り』の歴史や成り立ち、及び祭りで演奏される歌の種類や歌詞の内容の歴史学習会を開催し、さらに、むぎや踊りの体験学習を地域全体を対象に開催して祭りに対する理解を深め、その上で祭りへ参加して、地域のネットワーク化（連携）の強化と祭りの活性化を図る。

また、文化財等の理解については、城端地域全体の住民から参加者を募り、計画的にふるさと探訪を企画する。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

地元住民に富山県の二大民謡祭り『城端むぎや祭り』への理解が一層深まると同時に『城端むぎや祭』を誇りに思い、守っていこうとする住民が城端地区全域で増える。また、城端地区の 5 公民館全てが協力参加することで、城端地域全体として祭りを盛り上げて参加する機運の醸成と態勢ができる。さらに、自治振興会、商工会、保存会、観光協会など地域ネットワークの強化に伴い、地域の活性化と観光資源としての一層の地域振興効果が見込まれる。また、全公民館が連携して計画的にふるさと探訪再発見活動を実施していくことで、城端地域全体として伝承すべき文化財等への理解が深まる。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
７月　４日(日)	ふるさと探訪再発見！北野編	北野地域	２５人
７月　７日(水)	城端むぎや祭歴史学習会１回目	城端行政センター	５０人
７月１４日(水)	城端むぎや祭歴史学習会２回目	城端行政センター	５７人
８月１８日(水)～ ９月１８日(土)	むぎや祭り踊り体験学習	城端各町内 11 箇所	３，１４７人
９月１９日(日)	城端むぎや祭	城端各町内９会場	３３０人
９月２０日(月)	城端むぎや祭	城端各町内９会場	３３０人

◆事業の様子

☆　ふるさと探訪再発見！北野編

住み慣れた城端地域の再発見を目的に実施。今回は、北野地区にある城端神明宮跡・大泉寺・円筒分水・長楽寺地蔵・北野天満宮等を地元の方の解説を聞きながら、散策した。それぞれの場所では「車で前を通るが、何があるのか知らなかった。こんな場所にこんなものが…？」等、地元で生まれ育った方でも知らなかった場所や知らない事も多く、有意義な散策となった。

☆　城端むぎや祭歴史学習会１回目

城端庵唄保存会の方より手作り資料を見ながら、「むぎや祭の歴史や成り立ち」について説明を受ける。特に昭和２６年９月１５日に開催された第１回むぎや祭について、この初回開催までに先人の方々がどれほど苦労されたのか、当時の町の様子や地域の方々の熱い思いを語って頂いた。参加者の中には、懐かしく当時を振り返り、何度も頷く姿も見られた。他にも貴重な意見や質問が飛び交い、今年６０周年を迎えるむぎや祭に対する思いが一段と深まった。

☆　城端むぎや祭歴史学習会２回目

麦屋節新声会の方より「むぎや祭に演奏される歌の種類と歌詞の内容」について説明を受ける。

最初に麦屋節の由来から麦屋節新声会の軌跡について詳しく説明を受ける。次に、現在むぎや祭に歌い継がれている麦屋節やお小夜節等の歌詞の由来について、当時の時代背景を織り交ぜながら語って頂いた。歌詞を追っていくうちに、参加者から自然と鼻歌が聞かれ、本格的に歌われる方もいらして、会場は一時祭の雰囲気に包まれた。

☆　むぎや祭り踊り体験学習

城端各町内１１団体それぞれの場所に分かれ夜７時頃より、町内毎にむぎや祭前日まで、少なくても１０日間、多い団体では２１日間毎日練習をする。保育園児や小学生・中学生や高校生・大人と年齢によって踊りが変わるため時間帯をずらして練習するので、この時期は、町内どこへ行っても夜遅くまで明かりが点され、三味線や胡弓の音色が町中響き渡っている。前々日には、当日の衣装を着け、地方も加わり本番さながらの稽古仕上げが行われる。

☆　城端むぎや祭

１９日と２０日の両日、午後２時より別院会場・じょうはな座にて各町内のむぎや競演会が行われ、駅前会場・出丸会場他７会場では、町並み踊りが行われた。

両日とも各会場にて、町内毎に約３０分間子ども達の手踊りから一般成人の踊りまで総勢約３０名で、毎日練習した成果を舞台の上で披露した。

子ども達の手踊りでは、まだ保育園に入園したばかりの小さな子の参加もあり、一生懸命年長児の真似をして踊る愛くるしい姿に会場からは、笑いと温かい拍手が起こっていた。また、一般成人の踊りでは、中学生や高校生が、練習初日のたどたどしかった踊りが嘘のように艶やかな着物姿で踊り、会場を魅了していた。それぞれの町内によって同じ曲でも、衣装はもちろん、踊りも違っているため、観客は飽きることなく楽しめる。

今回６０周年ということで特別に例年より１日多い３日間むぎや祭が行われたが、特に夜８時から行われた総踊りでは、今までにない沢山の若者の来場で夜遅くまで賑わっていた。

◆参加者の声（感想や意見）

◇むぎや祭り歴史学習会

- 祭りを始めるにあたり、「失敗するかもしれない、金の工面はどうするという消極意見が出たとき、推進者は『金は、おれが責任を持つ』と言われ、祭りの開催にこぎつけることができた。」という話には、先人の地域振興に対する熱い意気込を学ぶことができた。
- 麦屋節のルーツについても、いろんな説があることが分かり勉強になった。
- 子供が地方（じかた）の三味線を習いたいと言ったので、町内の人に協力してもらい古い三味線を集めて教えたと聞き、地域が一体となって地方の育成に力を入れていることが分かった。
- 歌の節についても、城端と五箇山地方とでは違いがあると聞き、興味深かった。

◇むぎや祭り踊り体験学習会

- 踊りもチームワークが大切なことが分かった。
- 踊りを覚えられて良かった。
- 大勢の人が観ているので緊張した。

◇ふるさと探訪再発見

- 立派ではなく変哲もない寺であったが、格式の高い由緒ある寺だと聞き驚いた。
- 神明宮跡は、現在地とかなり離れた場所にあったが、跡地は当時の街道筋で参詣に便利であったと聞いて、建立場所の条件や理由を知ることができた。
- 地元のことを、まず知らなければ、ふるさとを愛することができないと感じた。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

①　共通目標

- 地域振興のために、地域の大事な観光資源の財産であるむぎや祭りの継続と発展の方策。
- 住みよいふるさとにするために、地域住民に、ふるさとのことを良く知ってもらう機会の充実。

② 連携先と連携内容

◇公民館同士の連携

城端地域では、５館ある公民館で公民館連絡協議会を結成し、毎月館長・指導員等会議を開いて、各館が実施している事業の報告や意見交換を行い、情報の共有を図っているので、公民館同士の連携は普段から非常に密である。

その中で、単館の自主行事以外で、５館共同の事業を実施している。その一つとして各館が順番に企画を担当し、自館の地域の文化財、天然記念物、歴史的構築物・場所などを訪ね歩くふるさと探訪を実施し、ふるさとの良さの再発見に努めている。自館以外の地域の文化財や歴史を知ることによって、城端地域全体の総合的な視野に立ったまちづくり策定に役立つと考える。

◇自治振興会、むぎや踊り推進委員会、商工会、観光協会、城端麦屋祭保存会、婦人会等との連携

「城端むぎや祭歴史学習会」「踊り手公募」の参加呼びかけ・募集の広報は、５館がそれぞれ発行している公民館たよりに折り込みのチラシを入れて全戸配布をした。さらに、５館において、それぞれの地域の、自治振興会、婦人会など各種団体に参加の呼びかけをし、むぎや祭り踊り体験学習を行った。

③ ネットワークの成果

◇ 従前は、主催団体であるむぎや祭協賛会主体の祭りであったが、本事業により協賛会以外の団体も祭に参加し、城端地域全体の祭りとなった。

◇ ふるさと探訪では身近なふるさとの再発見ができ、５館が連携することにより城端地域全体の住民との交流もできた。

④ ネットワークの課題

◇ 各種団体と連携をして事業を実施したので、終了後は全体の反省会を行い、意見・課題等をうまく次回に繋げていくことが大事である。

◇ むぎや祭りに関して言えば、公衆トイレが少ないので、例えば、行政が管理する曳山会館などのトイレも遅くまで使用できるように、管理者と連携する必要を感じた。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ パート１、パート２と、２回の「城端むぎや祭り歴史学習会」の開催により、麦屋節を含めた祭りで演奏される歌の起源及び、祭り開催に至る経緯など祭りの歴史に対する理解が深まった。そして、祭りを開催し、地域振興に役立てようとする先人達の洞察力、滅私奉仕の精神を学んだこと、また、踊り手公募により、町内住民だけではなく、城端全地域住民が踊りに参加でき、単に見物するだけではなく、自ら祭りに参加しようとする自主的な機運が高まり、地域振興の一助となるきっかけとなった。

また、ふるさと探訪では、郷土史家による説明によって、知っているようで以外に知らないところを詳細に知ることができて、ふるさと再発見につながり、これからの住みよい街づくりの手立てとなった。

② 課題

◇ 踊り手公募については、祭りに出演する町内では、特に成年女子層の踊り手が不足し、その対策に頭を悩ますところであるが、公募による応募数、性別、年齢が不確定であり、応募を待っていては祭りに間に合わない場合が生ずる。踊り手不足は毎年のことであるので、公募を継続する必要がある。

また、小・中学生も少子化で減少し踊り手不足が生じているので、学校に出向き実演するなどして、児童・生徒にむぎや踊りや歌・楽器の演奏の地方（じかた）に関心を持たせて、出演に対する意欲を喚起させるため、学校との連携が不可欠である。

福光地区公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

子どもたちの自然体験や社会体験の不足、善悪の判断や規範意識の低下などが指摘される中、自然・歴史・文化等の郷土学習によってふるさとに対する認識を高めるだけでなく、ふるさとへの愛着と誇りを養う環境作りが必要である。また、地域住民の人間関係が希薄になってきたと言われる中、関係団体・地域住民が一体となり事業を展開することにより、人間関係を築くとともに地域の絆づくりに繋げたい。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

福光地域は自然環境に恵まれ、また歴史的にも貴重な文化財などが多く存在している。そんな環境の下、公民館・自治振興会・市文化課・地区住民などが連携し、ふるさと福光の文化財などの現状を調査し、ふるさと教育の学習に必要な看板・教材などを整備する。また、「親子で再発見ふるさと文化財探訪ツアー」を企画し、文化財を通じて先人の英知を学び、ふるさと福光への愛着と誇りを持ってもらう機会としたい。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

子どもたちが文化財に触れ理解することにより、ふるさとを愛し、地域社会の一員として地域に貢献したり、地域を大切にする心豊かな人間性・社会性を培うことができる。歴史的な文化財など伝統に慣れ親しみやすい環境が規範意識を高く保ち、犯罪の抑止効果に繋がると言われる。また、この事業を推進することにより、人間関係の構築や地域の絆づくりに貢献し、ひいては安心安全な町づくりに繋がることが期待できる。

◆事業の流れ

実施日	活動内容	場所	人数
9 月 2 日 (月)	看板等設置場所確認	福光福祉会館	23
10 月 16 日 (土)	看板組立作業	工務店作業場	10
10 月 23 日 (土)	看板等材料ペンキ塗装	〃	10
10 月 25 日 (月)	パンフレット原稿作成	福光福祉会館	3
10 月 30 日 (土)	看板等設置作業	広瀬城跡 他	11
11 月 1 日 (月)	看板等設置作業	女岩他	10
11 月 2 日 (火)	看板等設置作業	殿様街道 他	12
11 月 4 日 (木)	パンフレット印刷・製本	福光福祉会館	2
11 月 6 日 (土)	文化財など巡るツアー実施	福光城跡 他	37
11 月 30 日 (火)	地元文化財見学会	十村役得能家屋敷跡 他	13
12 月 7 日 (火)	地元文化財見学会	〃	12

◆事業の様子

☆ 公民館長会議（看板等設置場所確認）

11 地区公民館長が連携して、定期的に館長会議を開催し、日頃から情報交換を活発に行っている。この日は、看板・標識の設置について、設置場所、地元への説明、制作方法、今後の進め方など綿密な打合わせを行った。その結果、看板９箇所、標識５箇所を設置することが決まり、できるだけ手作りとすることでそれぞれ得意分野を担当することとなった。

☆　看板など組立作業

　工務店作業場にて、看板の材料検収及び、組立作業を行った。写真は看板の組立作業を行っているところ。
材料を購入して、組み立ては協力者とともに慣れない手つきでどうにか組み立てることができた。

☆　看板など塗装作業

　工務店作業場にて、看板・標識の塗装作業を行った。公民館長が中心となり、公民館職員が塗装することとなり、なるべく塗装むらができないように注意しながら丁寧にペンキを塗った。写真は標識（5 本）を塗装しているところ。
木材料は、すべて檜だ。運良く安価で入手できた。手作りでも長持ちするとのこと。

☆　看板設置作業

　公民館･自治振興会・地元の方々の協力により、看板を設置した。写真は完成した手作り看板を設置するところ。
手作りなので、とても愛着があり作業も楽しい。市指定文化財でも予算の関係などで、説明看板の整備が遅れていて、設置されていなかったリ､老朽化して朽ちてしまっているものも多い。市が設置する場合、材料も違うが１基あたり数十万円かかるという。今回の看板は基本的に手作りの為、1 基当たり約 5 万円と廉価。

☆　標識設置作業

　公民館･自治振興会・地元の方々の協力により、標識を設置した。写真は西太美地区「才川七のつなぎがや」（南砺市指定文化財）の誘導標識であり、埋め戻してモルタルを塗っているところ。
　これまで文化財がどこにあるか良くわからなかったが、これで良くわかるようになったと地元住民も喜んでいる。

☆　文化財などを巡るツアー実施

　文化財などを巡るツアーを募集したところ、37 名の親子の参加があり、手作りパンフレットを手に、文化財を巡り、講師の説明を受けた。
　写真は十村役得能家屋敷跡を見学しているところ。
　看板を設置した翌日、地元の秋の祭礼があり、新しい看板の前でお祝いに獅子舞の奉納があった。
これまで説明看板が無く苦慮していたが、今回の事業で整備され地元住民からお礼のお言葉をいただいた。

また、子ども達も普段あまり触れることがない文化財などに興味深深であった。興味を持ってもらうことで、ふるさとへの愛着や地域を大切にする心が養われることを期待したい。

写真は明治時代、陸軍演習場の施設であった、砲弾の的中率を観察する監的壕（かんてっこう）を興味深く見ているところ。

◆参加者の声（感想や意見）

◇　自分の住んでいる身近なところに、こんなすばらしい文化財などがあることを再認識した。
◇　郷土の歴史や文化に触れることが出来良かった。今回ルートになかった他の文化財も見てみたい。
◇　子供など後世に守り伝えていかなければならない。
◇　文化財など看板の整備が進んでいなかったが、今回の事業で整備できて良かった。多くの市民が訪れることを期待する。
◇　ふるさとの自然や文化、先人の苦労や偉業に触れることが出来、もっとふるさとのことを勉強してみたいと思った。
◇　次回もこのような機会があれば是非参加したい。
◇　手作り看板なので特に愛着があり、見守っていきたい。（公民館長）

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

① 共通目標

地域住民の人間関係が希薄になってきたといわれる中、関係団体・地域住民が一体となり事業を展開することにより、人間関係を築くとともに地域の絆作りに貢献する。

② 連携先と連携内容

連携先

◇福光地域１１公民館・地元自治振興会・地域住民・文化財審議委員・市教育委員会他

連携内容

◇11公民館の連携

・　11公民館の連携は充実しており、良好なネットワークを形成している。
・　公民館長会議のほか、不定期だが公民館指導員会を開催し情報交換を行っている。
・　市主催の成人式に、全公民館職員（館長･主事･指導員）が連携して開催のサポートをしている。(受付･入場準備･場内案内･来賓接待･参加者控室･記念写真撮影補助･後片付け駐車場案内他)
・　南砺市公民館まつりに向けて、事業内容、協力体制などの打ち合わせ、当日の事業協力に連携している。

◇ふるさと教育推進事業

・　各公民館に文化財など看板や標識の設置希望箇所の調査依頼
・　設置希望箇所から設置場所の選定（文化財審議委員他）
・　土地所有者などの許可確認（自治振興会他）
・　看板など組み立て・塗装・設置（公民館・自治振興会・地域住民他）
・　文化財などを巡るツアー企画・募集・実施（公民館・地域住民・文化財審議委員他）

③　ネットワークの成果

◇　公民館のネットワークが機能している為、年中行事の成人式や公民館まつりなど大きな行事がスムースに行うことが出来る。
◇　もともと公民館のネットワークは充実しているが、この事業を行うことにより、さらにコミュニケーションが密となり、より充実したネットワークが形成されたと感じる。
◇　公民館・自治振興会・地域住民などが連携することによって、新たな人間関係が生まれ情報交換がスムースとなり、それが地域の絆作りに貢献していると感じる。

④　ネットワークの課題

◇　さらに充実した、より質の高いネットワークを追求していかなければならない。

◇　公民館以外の他の組織との有機的なネットワークの拡大をどのように図るか。

◆事業の成果と課題

①　成果

◇　文化財等の看板を設置、整備することにより、ふるさとの文化財等への理解を深めた。

◇　文化財などを巡るツアーを通して、ふるさとの自然や文化、先人の苦労や偉業に触れ、地域の人々とのふれあいを深めた。

◇　文化財に触れ理解することによりふるさとを愛し、地域社会の一員として地域に貢献したり、地域を大事にする心豊かな人間性・社会性を培うことに結びつけたい。

◇　歴史的な文化財や伝統に慣れ親しみやすい環境が規範意識を高く持ち、犯罪の抑止効果に繋がると言われ期待する。

◇　この事業を通じて、関係者の人間関係の構築や地域の絆づくりに貢献し、ひいては安全な街づくりに繋がることを期待する。

②　課題

◇　事業の内容によっては、単年度で即成果の現れるものと継続しなければ成果が期待できないものがある。この事業は継続して行われてこそ意義のある事業であり、中途半端で終わらせないことが今後の課題である。特に、文化財探訪ツアーは継続して行うことが肝要で、今後公民館事業などに組み入れることを検討していかなければばらない。

◆その他

看板･標識の設置場所など

地区	文化財・名跡など	設置場所	種類
南蟹谷	殿様街道（街道跡）	能美	看板
広瀬舘	広瀬城跡	舘	看板
	不動明王	小坂	看板
	広瀬舘小学校跡	祖谷	看板
太美山	釜ヶ淵（名勝）	嫁兼	看板
東太美	監的壕	立美	看板
山田	啓發（旧山田）小学校跡	大塚	看板
吉江	十村役 得能家屋敷跡	田中	看板
	弘法杉と文殊寺	荒木	看板
広瀬	薬師如来（千手丸薬師堂）	竹内	標柱
西太美	才川七のつなぎがや（樹木）	才川七	標柱×２箇所
太美山	女石（奇石）	嫁兼	標柱
東太美	次郎右衛門堂・監的壕	立美	標柱

福野地区公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

富山県南砺市福野地域は、豊かな水と緑に恵まれ、散居村風景が広がる農村地域である。恵まれた自然環境や伝統を継承しながら、心豊かに生活している。

しかし、近年になって当地域でも核家族化が急激に進み、地域間や世代間の交流が希薄になってきた。伝統を引き継ぎつつ、底辺の拡大や新たな交流を模索している。

そこで、福野町で３６０年以上も守り続けている福野夜高行燈の原型といわれる田楽武者絵作りを中心にして、地域の子どもたちやその親世代の関心がより深まり、心豊かな連携のある地域づくりをめざしたい。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

神事ではあるが、現在の夜高行燈の起こりとして、現在まで引き継がれている田楽武者絵作りに、大行燈のある町部だけでなく村部まで、この地域の子どもから大人まで挑戦し、それを田楽行燈に仕立てる。作成した行燈は、各地区の文化祭や市の公民館祭りで飾るとともに、平成の一大イベントにまでなったスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドでのパレードにも参加し、他市町村の人々にもアピールする。また、来年は誰でも参加できる夜高祭前夜祭（４／30）の「文久の大提灯」の引き回しに参加し、伝統芸能を体験して祭りの活性化を図る。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

世代を超えて、子供から高齢者までが顔がわかり、声がけができるようになって、交流が広がり、新たなネットワークが拡大される。特に地域の公民館、児童クラブ、父母の会など諸団体と協力し、地域間の連携、世代間の交流が促進され、地域の元気につながる。

また、田楽武者絵作りを通して、夜高行燈の起源、夜高祭りの由来を知ることが、実際に行燈を引くことができる町部の住民だけでなく、村部の住民にとっても、歴史ある夜高行燈の伝統を守ろうとする福野全地域を挙げた住民意識に繋がっていく。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
７月　３日(土)	ミニ田楽行燈作り[37 基]	福野西部作業所	７０人
7月6日(火)・9日(金)	武者絵教室[20 基]	福野北部公民館	４１人
７月１８日(日)	子供宿泊学習(武者絵田楽行燈作り)[20 基]	福野南部公民館	７５人
７月２３日(金)	ミニ田楽行燈作り[10 基]	福野南部保育園	１２人
８月　１日(日)	田楽行燈教室[13 基]	福野安居公民館	１３人
〃	納涼祭で展示	福野南部地区他	約600人
８月１０日(火)	田楽行燈を作ろう[30 基]	福野東部公民館	４５人
８月２１日(土)	スキヤキ･ミーツ･ザ･ワールド　パレード参加	福野市街地	９０人
〃	～22日(日)　田楽行燈作り[20 基]	福野中部公民館	２０人
８月２８日(土)	ワイワイ学園（田楽行燈を作ろう）[20 基]	福野高瀬西公民館	２０人
９月２３日(祝)	富山県曳山サミットで展示	福野ヘリオス他	約200人
１０月２４日(日)	南砺市公民館まつりで展示	福光中部小学校	約600人
９月～１１月	南砺市福野地域の各地区文化祭で展示	福野地域７地区	
H23年2月上旬	大型田楽行燈（公民館ＰＲ用）製作予定	福野中部公民館	２０人

◎　完成したミニ田楽行燈の総数は１７０基、地域の協力者も含めて参加者総数は約１，８００人

◆事業の様子

☆　材料の一括購入・手配

蝋・蝋釜

木枠

墨・紅・筆・調合

和紙・原画・見本

蝋や蝋釜、木枠、墨や和紙などの材料は全て、これまで武者絵教室の開催経験のある福野中部公民館で準備した。講師依頼も人的つながりのある福野中部公民館が行った。

また今後、このような活動を継続していけるように和紙のサイズをＡ４とし、木枠もそれに対応する大きさの物を準備した。教室は一カ所で実施するのではなく、福野地区の各公民館を中心に７会場で行った。

☆　武者絵教室　　福野北部公民館

北部公民館では、大人の希望者を対象として、３回の教室を実施した。蝋引きが蝋釜を使って温度設定したことにより大変蝋引きし易いと人気であった。

Ａ４サイズの行燈づくりで、行燈制作に大変興味を持たれた方もおり、大きい武者絵に自費で挑戦された。

握り手棒付行燈を作成。

☆　こども宿泊学習（武者絵田楽行燈作り）　福野南部公民館

福野南部公民館では、毎年好評の公民館活動である「地域を学ぶ」事業に相乗りして実施した。

主な対象は小学生としたが、参加者が大変多く、材料が足りなくなったので、南部地域において４０基を追加して作成した。

ＰＴＡの方や色々なボランティアの方々多数参加し、行燈を通した地域の交流活動が進んだ。

握り手棒付行燈を作成。

☆　ミニ田楽行燈作り　　福野南部保育園

保育園と連携し園児対象の行燈づくりを実施した。参加したのは年長組の１０名である。

保育園では武者絵ではなく園児に、和紙に好きな絵を書いてもらった。園児らしいかわいい行燈ができた。

後に行われた公民館行事には、家族と一緒に全ての園児が参加された。

握り手棒付行燈を作成。

☆　田楽行燈教室　　安居公民館

安居公民館では、対象は大人の希望者とした。

カメラを向けるとイヤがられるなどの出来事もあったが、みんな大変熱心に制作に取り組んだ。自分の作品が完成した時の喜びはひとしおであった。

握り手棒付行燈を作成。

☆　田楽行燈を作ろう　　福野東部公民館

福野東部公民館では、対象は子ども達とした。

公民館の中は参加者の熱気もあり大変暑かったけれど、子どもたちは夢中で作成していた。

また盆前ではあったが、たくさんの協力者が子どもたちの制作に関わってくれたことも大きな収穫となった。

握り手棒付行燈を作成。

☆　田楽行燈作り　　福野中部公民館

中部公民館では毎年「田楽行燈作り教室」開講しているが再度新たな参加者を呼びかけて挑戦した。対象は経験の無い婦人会の皆さんとした。初めての経験なのにその出来ばえの素晴らしさには驚かされた。

置き型行燈を作成。

☆　ワイワイ学園（田楽行燈を作ろう）　高瀬西公民館

高瀬西公民館では、１５年くらい前から公民館活動で子どもを対象としたワイワイ学園を実施している。今年度、そこに新たに１事業増やす方法で実施した。

対象はワイワイ学園に参加している小学生とした。

置き型行燈を作成。

☆　様々なイベントで披露する

８月２１日（土）

福野町では平成３年に福野文化創造センター「ヘリオス」が建設され、その時から続いている異文化交流である「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」は、地区内外の参加者が集う一大イベントになっている。今年は公民館もこの行事に連携し、田楽あんどん隊としてパレードに参加し大好評であった。

９月２３日（祝）

富山県曳山サミット（福野会場）で、制作した行燈を展示した。県内外の多くの人の目をひいた。

１０月２４日（日）

市町村合併で４町４村が合併し新しくなった南砺市の公民館まつり（福光会場）で展示した。

８月～１１月

各地区の納涼祭（各地区会場）でも披露した。また、７地区公民館の文化祭（各地区会場）でも展示した。さらに、各イベント会場で出来上がったミニ行燈を展示して、会場に来られた皆さんにＰＲした。

◆参加者の声（感想や意見）

・思ったより簡単やった。　　・やって良かった。
・家に持ち帰って飾りたい。宝物や。
・大きい行燈にも挑戦したい。　　・何やわからんけど楽しかったよ。
・子ども達、楽しそうだが老人会もやりたいわ。
・うちの子がこんなに夢中にきれいにできるとはビックリ。
・イベントに参加した子どもは来年も出たい。出てない子は来年こそと。
・ボランティアの方はこんなお手伝いならまた呼んでね。
・紅で汚れたところがなかなか取れなくて困った。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

① 共通目標　・・・「伝統を引き継ぎ今を楽しもう」

幼い頃から親しんでいる夜高行燈。ふるさとの伝統を継承するため、その「田楽武者絵」に挑戦してみよう。

② 連携先と連携内容

連 携 先 ・ 福野中部公民館を拠点（早くからミニ行燈づくりの実績ある）に７公民館で実施
・ 福野小学校父母と教師の会（ＰＴＡ）、福野南部保育園
・ 福野老人クラブ連合
・ 福野町婦人会
・ 福野地区ボランティア
・ 各地区自治振興会及び公民館

連携内容 ・ 講師、木枠、和紙、紅の調合、蝋、蝋釜、筆　等の手配は福野中部公民館で行い各公民館が協力して事業を進めた。
・ 製作場所は各公民館で対象者は限定せず、それぞれの公民館独自のやり方で実行し富山県曳山サミットなどの地区以外の展示等は７公民館で協力して行った。

③ ネットワークの成果

◇ 福野地域の７公民館の館長、主事、指導員はそれぞれ地域で引き継がれてきた事業（伝統）を先輩に習い、各地区独自で頑張って来たが、今回のＢタイプの事業で各公民館が連携してひとつの目的に取り組めたことに「やって良かった」という満足感と指導員同士の信頼感と結束が増した。

◇ 富山県曳山サミットやスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドなど、県や町のイベントと連携することで公民館の活動を知ってもらうのと同時に、福野町のＰＲ活動にも貢献できた。
(案ずるより生むが易し・・地域から多くの協力者があった)

④ ネットワークの課題

◇ このような地区内の全ての公民館が連携し、地区一体となって取り組む活動を今後も継続して行くときは、中心になるスタッフの負担が大きくなるので、そうならないような参加スタッフの増加や役割分担などを検討していく必要がある。

◇ 一つの町ではあっても、各地域の実情ややり方に差があるので、今後の活動内容や連携の仕方を改めて検討していく必要がある。

◆事業の成果と課題

① 成果

◇ 福野地域７公民館がそれぞれの時期、やり方ではあったが、全公民館で武者絵行燈の製作に取り組むことが出来て参加者全員が満足の様子であった。（世話方も満足）

◇ 出来上がったミニ行燈は目的の一つである様々なイベントで披露し、ＰＲも出来て、とても楽しかった。また、会場の雰囲気も盛り上げる事が出来た。（スキヤキパレード、曳山サミット、公民館まつり、地区の納涼祭、地区文化祭、等）

◇ 地区の文化祭にも展示したが作品が増えてにぎやかになり、来場者も多くなった。

◇ 特に子どもたちは、来年こそは上手に描こう、今年は参加できなかったが次は参加したいと言っており、各公民館は色々な課題を克服しながら、来年も引き続き田楽行燈づくりを予定している。この事業が地域に定着していけば伝統文化を継承していく良い機会になる。

② 課題

◇ 夜高行燈のＰＲが目的のひとつだったため、出来上がった行燈を持ち帰りたいという方が多かったが、参加者にはがまんしてもらった。次回からは材料費を徴収して持ち帰ることが出来るなど、作成方法の検討が必要である。

◇ 子どもから大人まで３世代にわたっての対象となるので、世代交流はできるが、武者絵の指導方法が対象者により違うので、個々の技能や要望にあった指導は難しく検討が必要となった。

◇ 今後、神事である福野夜高祭と田祭りの行燈、田楽行燈のかかわり方を、地域の方々とよく話し合い楽しいふるさとの思い出作りにすることが課題である。

福野西部公民館　田祭り行燈練り回し

砺波地区公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

増山城跡は平成２１年７月に国指定史跡として認可され、梅檀野地区の地元自治会を中心としてその効果的な利活用について検討されるなど、城址が所在する地元住民の中では機運が非常に高まってきており、一般市民への関心の広がりもみられる状況にある。

増山城は、戦国期から織豊期に北陸地方の覇権形成において重要な役割を果たし、屈指の規模と防御機能が発達した縄張を有する城であり、越中を代表する中世城郭であった。しかしそのことをよく知らない市民も多く、もっと市民レベルでの学習機会の創設や市民全般へわかり易く周知していくことがもとめられている。そして、市民共有の財産として意識し市民全体で大切にしていきたい。また、専門家向けのリーフレットは存在するが、一般市民にとっては少し難しい内容となっている。

なお、これまでに地区の枠を超えて連係した公民館活動は過去に例がなく、この取り組みが初めての事例になる。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

市内各地区住民の各世代層や児童生徒にも分かりやすく親しみやすいリーフレットを、砺波郷土資料館や教育委員会文化財係などの協力を得て公民館職員の市民目線で協議し作成する。

増山城跡のフィールドワークを地元主催イベントと併用開催し、市内全公民館が全面的にバックアップしていく。　また、その事業の周知活動や参加促進活動を市内各地域全域で公民館が連係し展開する。

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

市内地区公民館の連携が一層深まり、市内の史跡（国指定）への誇りと愛着を市民全域（地区民）に芽生えさせることができる。

市内の 21 全公民館が同一テーマで連携・協力して取り組むことにより、増山城跡が砺波平野の散居村の景観やチューリップによる観光資源と同様に、市内外から注目度が高まり、公民館発の砺波市の活性化につながる。また、公民館が連携して取り組むこの事業を、市民レベルでの市民協働の先進的事例としてノウハウを蓄積し、今後の連携活動に役立てることができる。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
7 月 24 日（土）	増山城跡事前調査 増山城跡遊歩道整備協働草刈り活動	増山城跡 砺波市梅檀野地区	85 人
8 月 28 日（火）～	増山城跡リーフレット作成作業	砺波市庄川支所	24 人
9 月下旬～	増山城跡フイールドワーク広報活動 （地区広報活動）	各地区	250 人
10 月 31 日（日）	増山城跡フィールドワーク （増山戦国まつり）	増山城跡 砺波市梅檀野地区	750 人
12 月 4 日（土）	増山城跡フィードバック （ふるさと教育のつどい）	庄川生涯学習センター	56 人

◆事業の様子

☆　増山城跡事前調査　増山城跡遊歩道整備協働草刈り活動

平成２１年に国指定史跡となった増山城跡の現地確認と保全するために、実施した。ボランティアとして市内の多くの地域から参加があった。

今後の事業のデモンストレーションも兼ねており、起伏の多い山間地を検証した。

初めて足を運ぶ参加者も多く、曲輪などが残る山城について興味深く有識者へ質問するなど、愛着と誇りを高める活動となった。

市の東部の増山城跡がある栴檀野地区が中心であった例年の活動から、市全域へと参加者の幅が広がりを見せたことにより、参加者同士の新たなネットワークも生まれた。また、「ふるさと」をキーワードとして、国指定遺跡を市民の手で大切にしていこうというボランティア活動の精神が芽生え始めたことも大きな成果である。

増山戦国祭りやフィールドワークの実施に向けて様々な建設的な提案が出されるなど、実施意欲につながる活動となった。

☆　増山城跡リーフレット作成作業

増山城跡の市内外への周知と児童生徒へのふるさと教育の推進を目的として公民館が意見を出し合いリーフレットを作成した。

次の視点で様々な意見が反映された。

・知識や見聞を高めるための従来の知るためのものから、実際に持って歩いたりすることを想定した実用するものが必要である。

・公民館事業参加者（児童生徒からお年寄りまで）を意識して簡易な言葉で絵を多く取り込むべきである。

各地区公民館から様々な意見を出し合い編集することにより、増山城跡への学習が進み関心が高まった。後の事業への活動意欲につながった。

☆　増山城跡フィールドワーク（増山戦国まつり）

昨年に国指定史跡に認定されて開催された増山戦国まつりを砺波市全域での取り組みへと広げることを目的に１０月３１日（日）に実施した。

解説ボランティアが起伏の激しい山中を、そのいわれや造りなどを歩こう会形式で説明した。昨年よりも一般市民の参加者が増加し、賑やかな活動となった。

甲冑を身にまとった解説ボランティアである「曲輪の会」が現地にて歴史と素晴らしさを参加者に説明した。今回公民館が作ったわかりやすいパンフレットを片手に、砺波市にこのような史跡があったことに改めて感動を覚えている参加者が多く見てとれた。

歩こう会や歴史探訪は砺波市においては根づいてあるが、地域を超えて市内を散策する取り組みは少ないのが現状であった。今回の事業により、各地区の企画委員も数多く参加し、委員の実体験から今後の展開につながるものとなった。また、平成２２年に結成された解説ボランティアの周知にもつながり、相互に活動の幅を広げるものとなった。

☆　増山城跡フィードバック（ふるさと教育のつどい）

公民館関係者と学校教育関係者が「ふるさと教育」についてその必要性や今後の展望を共有し、砺波市として今後の目指すべき方向性等を再確認し、更なる活動の充実・発展と連係強化を図るために、ふるさと教育のつどいを実施した。出町子供歌舞伎曳山や自然体験事業などの実践発表が行われ、ふるさと教育の理解が深まった。

また、今回の事業の成果を共有することで、相互理解が高まり、今後の連携を強化することができた。

◆参加者の声（感想や意見）

◇　増山城跡フィールドワーク（増山戦国まつり）
- 身近にこんな素晴らしい箇所があることを誇りに思う
- 何もない山だけど説明を聞いてすごい場所だと思った
- 心と体のいい運動になった
- もっと多くの方に知ってほしい

◇　増山城跡フィードバック（ふるさと教育のつどい）
- 地域で子供を育てる意識が高い
- 地区活動がふるさと教育を既に実践している
- 学校教育と生涯学習は両輪であるべきと実感した

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

①共通目標

・公民館における「ふるさと教育」の推進を一層進める。
・公民館同士のネットワークやボランティアの会などとのネットワークを構築する。
・地区活動の広域連携化を推進する。
・市内全ての公民館が連携することで国指定遺跡となった増山城跡の活性化を図る。

②　連携先と連携内容

◇公民館同士の連携（市内２１地区）

砺波市２１地区すべてが増山城跡を利用し、市を盛り上げることを目標に協議し進めてきた。公民館の地域枠を超えた取り組み方の実践事例になったとともに、普段の地区活動の行動範囲も広がった。

◇学校との連携（市内１２校）

地域活動において学校側の理解は必要不可欠である。また、学校側も地域において子供たちを支え育てることを期待している。今回の取り組みによりその認識がこれまで以上に強まった。また、協力体制が強化された。

◇ボランティア団体との連携（曲輪の会）

曲輪の会の存在が、地域及び学校へ広く周知された。このような活動を継続的に実施することで、曲輪の会は解説ボランティアとして成熟した団体に育っていくことが予想される。砺波市の魅力を広く説明する観光ボランティアとして活躍が期待される。

③　ネットワークの成果

◇　従前は、増山城趾がある地区だけの限られたイベントであったが、市内全ての公民館が連携する本事業により、新たに国指定史跡となった増山城趾への思いや戦国まつりなどが市内全域のものとなった。活動が大きな広がりを見せることなった。

◇　公民館と学校関係者がともに集い共通テーマで研修したことで、相互理解が深まり、今後の活動基盤がお互いに強化された。

◇　地元だけでなく、公民館を始めさまざまなノウハウを有する関係者が話し合いを持つことで、これまでと違った視点で事業が吟味され、事業が大きく発展し成熟した。

④　ネットワークの課題

◇　今回は砺波市の全ての公民館が連携することで取り組んだが、結びつきを考える範囲を大分類と中分類など細分し、各地域の特色や文化圏にも配慮していく必要がある。

◇　砺波市内には８小学校、４中学校があるが、このような広域で子どもたちが参加する事業では、学校との日程調整などを綿密に行う必要がある。

◇　他地域、学校関係者およびボランティア団体と構築できた関係を一過性のものにするのではなく、今後もさまざまな場面や行事なのでお互いに活用していくことで、さらに高めていくことが必要である。

◆事業の成果と課題

①　成果

◇　増山城趾という共通体験をしたことにより、各地域の運営役員の史跡への関心が高まった。今後の地域活動への高まりに期待できる。

◇　わかりやすいパンフレットを整備したこと、ボランティア団体との関係が密接化したことに伴い、上記成果を生かした今後の活動を推進できる体制を整備できた。

◇　「ふるさと」をテーマに学校関係者と公民館関係者が一堂に介し研修したことにより、学校と地域との共通理解が深まり、今後の協力関係が整備できた。

◇　地域を越えて連携・協議してきたことがきっかけとなり、他地域間との共同開催事業が生まれコミュニティーに広がりを見せ始めている。

◇　市内の全２１公民館が連携・協力して取り組むことにより、広報活動等に力が入り昨年を上回る盛り上がりを見せた。それにともない増山城跡（地域資源）の名声が地域を超えて高まり限定的であった地域の財産を、市の誇れる財産として、多くの人が愛着を持ち始めるきっかけとなった。

②　課題

◇　砺波市内の公民館では、それぞれの地域に根付いた地区活動やさまざまな事業が実践されている。その中には単独公民館の事例としておくにはもったいないものもある。ふるさとを共通のテーマにこれまでの事業に新たな視点で脚光を当て、事業を見直していく取り組みが必要である。

◇　専門性を有する新たな団体や市全域を活動範囲としている団体との連携も大事だが、各公民館の既存の団体と、いかに互恵関係を築き、お互いに発展しあえるかを見据えた取り組みも大事である。

氷見地区公民館ふるさと教育推進委員会

◆事業・取組み等の概要

① ふるさと教育の推進や効果的なネットワーク化（連携）の現状と課題

現在、氷見地区にある７公民館においては、生涯学習としての各種教室等がさかんに実施されているものの、自らが住む氷見市に関して学習しようとする意欲の高まりはあまり見られず、地域住民への意図的・積極的な取り組みが重要であると考えられる。

市内には多くの誇れる史跡や天然記念物が存在するが、そこを訪問したことのない住民も多く、まずは、より多くの地域住民がそれらの学習の機会や実際に行って体感する活動を博物館などの協力を得て推進していくことが必要である。そして、県内有数の水産資源（キトキトの魚）やそれを活かした民宿などの資源以外にも、多くの誇れるものがあることを自覚し、県内外の人々に発信していこうとするきっかけにしていきたい。

② ふるさと教育推進の方策や効果的なネットワーク化（連携）の方策

氷見地区の７公民館それぞれが、参加者を募集し、自らの地域や市内の史跡天然記念物等の学習、博物館の見学などを通して、地域住民のふるさと意識の高揚と、公民館を中心とした住民密着型のふるさと教育が推進するように努める。

また参加した住民は、見学した成果をまとめて、公民館に来訪する人々に発表するなど、見学が学習（発信）に結びつくように努める。そして、その成果を中央公民館が中心となって集約して、公表することで、公民館同士のより一層のネットワーク強化と、公民館に集う人々の交流が生まれるようにしていく。さらに、素晴らしい史跡・遺跡が数多く存在する氷見市への理解と愛着が深まるよう、地域住民への意識づけを図っていく。

見学場所　国指定史跡　朝日貝塚、国指定史跡　大境洞窟住居跡、国指定史跡　柳田布尾山古墳、国指定天然記念物　イタセンパラ、氷見市立博物館、各公民館周辺の名所旧跡２箇所

③ 事業を実施した結果見込まれる効果など

多くの地域住民が、今まで知ることが少なかった史跡、天然記念物、博物館を見学し、現地で学習することにより、氷見には海や山の大自然やその豊かな恵みが豊富であるだけではなく、歴史や文化にも誇れるものが多くあることを改めて認識するとともに、地域住民が共に地域に出かけ地域を学習することの楽しさや喜びを知るきっかけとなる。

さらに、文化遺産を広報活用することで、県内有数の水産資源（キトキトの魚）やそれを活かした民宿など以外に、氷見を訪れた人々への新たな観光資源としても活用されるようになっていく。

◆事業の流れ

実施日	活　動　名	場　所	参加人数
８月１１日(水)	速川公民館ふるさと教育推進事業	市内史跡、天然記念物等	４０人
８月２０日(金)	上庄公民館ふるさと教育推進事業	同上	３３人
８月２２日(日)	十三公民館ふるさと教育推進事業	同上	２５人
８月２２日(日)	中央公民館ふるさと教育推進事業	同上	２３人
９月２９日(水)	窪公民館ふるさと教育推進事業	同上	４８人
１１月１６日(火)	阿尾公民館ふるさと教育推進事業	同上	３１人
１１月２６日（金）	宇波公民館ふるさと教育推進事業	同上	４０人

◆事業の様子

☆　速川公民館ふるさと教育推進事業

地区住民や公民館利用者等４０名がバスに乗車して、市内の史跡、天然記念物、博物館を見学した。昼食は氷見漁港内の食堂でキトキトの刺身定食を味わった。氷見市内に住みながら山間地にある公民館であるため、この食堂は初めてという声を多く聞いた。

市内を巡った後は、自分たちの地区にある旧跡として「小窪廃寺」跡を巡った。この寺は大伴家持が越中国守として赴任する前にこの地域を支配したとされる阿努氏の氏寺であり３０m程度の塔があったと推定されている。

（写真　塔の礎石前で話をする村田館長）

☆　上庄公民館ふるさと教育推進事業

夏休み中の実施であったこともあり、学童保育で公民館を利用する小学生１、２年生（１７名）や指導員が、地域住民と同じバスに乗車して、１日市内をバスで見学した。

歴史などをまだ十分理解できない小学生１年生も、柳田布尾山古墳の大きさや、大境の洞窟の中が少しひんやりしているところなどを、体感しているようであった。

（写真　大境洞窟住居跡の解説を聞く小学生の参加者）

☆　十三公民館ふるさと教育推進事業

公民館の近くにある湖南小学校の児童１０名とその保護者の参加も多くあった。

最初に、幕末の剣豪として著名な斎藤弥九郎の生誕地にある銅像を見学し、地元で研究する解説者の話を聞き、ふるさとの偉人に思いをはせた。

その後、国指定史跡朝日貝塚へ行き、縄文時代の住居跡が日本で初めて発見された貴重な遺跡であることや、バスケット型土器が出土していることなどの解説を聞いた。

（写真　朝日貝塚の解説を聞く小学生の参加者）

☆　中央公民館ふるさと教育推進事業

氷見市教育文化センター内にある中央公民館の利用者が多く参加した。同じ建物内にある市立博物館を見学し、展示物や氷見市の歴史に関する詳細な解説を聞いた。

同じ建物の中にある施設にも関わらず、博物館の見学は初めてという声も多く聞かれ、社会教育施設の連携の必要性を改めて強く認識させられた。

（写真　氷見市立博物館で解説を聞きながら見学する参加者）

☆　窪公民館ふるさと教育推進事業

４８名という多くの参加をいただき開催した。窪公民館ではふるさと学習を継続的に実施しており、こうした取り組みが多くの参加者に結びついたものと思われる。

公民館区域内にある氷見市海浜植物園には、国指定天然記念物のイタセンパラが展示飼育されており、二枚貝に卵を産み付け、稚魚が半年間貝の中で成長するという不思議な生態に興味を示すとともに、絶滅の危機に瀕している生態系の問題についても学習した。

（写真　イタセンパラの解説を聞きながら見学する参加者）

☆　阿尾公民館ふるさと教育推進事業

公民館周辺にある有名な箭代神社と西念寺を訪れた。それぞれ宮司と住職から、地域と深く結びついている両寺社の歴史についてわかりやすく解説を受けた。

参加者の多くからは、氷見に住んでいながら、市内の文化財を見て回るのは初めてという意見が多く聞かれ、こうした事業をもっと盛んに行ってほしい。とても誇りに思ったなどの意見が聞かれた。

（写真　西念寺の住職から寺の歴史を聞く参加者）

☆　宇波公民館ふるさと教育推進事業

氷見は市域が広いため、市内の文化財を網羅的に見学するのは容易ではない。市内で最も北に位置する当館の参加者は、氷見市南部に位置する国指定史跡柳田布尾山古墳を見学するのはほとんどが初めてであった。前方後方墳としては日本海側最大であること、古墳を築くために多くの人々の力が結集したことなど、学芸員の解説を熱心に聞き入っていた。

（写真　柳田布尾山古墳をバックに記念撮影をする参加者）

◆参加者の声（感想や意見）

- 若い人がもっと参加すると地域が活発になるし、次につながると思う。
- 自分の地域の歴史が分かれば、うれしいことで、公民館のこうした活動は大切だと思う。
- たのしそうだったからさんかした。（小学１年生）
- 公民館であれ、学校であれ、みんなが「ふるさと」意識を持つことは大事だと思う。
- 今日巡ったところはすべて初めてでした。氷見の歴史に少しふれられてよかったです。

◆諸団体や機関などとのネットワークの形成状況

① 共通目標
「氷見市の文化財等を通して、ふるさとを理解し、学び、体感する」

② 連携先と連携内容

氷見地区では、地図上ではすぐ横に見える村でも、隔てる山が海岸線近くまで伸びているために、一度市街地まで出て別の道を利用しなければならないなど、地理的に公民館が連携するのは難しいという条件があった。そのためこれまで公民館同志の連携は必ずしも十分ではなかったといえる。

しかし、今回の「氷見市の文化財等を通して、ふるさとを理解し、学び、体感する」という共通目標は、これまでの様子を大きく変えていった。各館が主事会議で情報交換をしたり、先に事業を実施して経験のある主事に、これから実施しようと考えている公民館の主事が、事業の実施方法や募集方法などで工夫した点について、何度も電話したりするなど、連絡を綿密にとりながら計画をしていた。

そして、各館が主体的にそれぞれのバス見学の運行を行った。今回改めて連携の意味や大切さを認識したとの声が主事等から多く聞かれた。

また、公民館間の連携だけでなく、その他の社会教育機関（氷見市立博物館、氷見市教育委員会生涯学習課）や、観光ボランティアグループ「つままの会」などの生涯学習団体と連携して事業が実施された。こうした連携の実績は、公民館にとって大きな収穫となった。

③ ネットワークの成果

公民館同士の連携だけでなく、他の社会教育機関との連携があわせて図られたことの意味は大きいと思われる。氷見市内の公民館の事業では、これまでとかくルーティンになりがちで、新たな事業を展開することが難しい傾向が見られたが、今回構築されたネットワーク力を活用し、今後は「ふるさと教育」に関わる新事業が多くの公民館で展開されることが期待される。

④ ネットワークの課題

こうした事業を繰り返し行うことにより、一層のネットワークが強化されると思われる。また、公民館利用者を含め地域住民が公民館にふるさと教育講座等の開催を期待する、いわゆるニーズの高まりが予想される。しかし、各公民館とも予算が限られる中、今回のネットワーク力を十分活用しながら、応えていく斬新なアイディアが求められる。

◆ 事業の成果と課題

① 成果

◇ これまで、氷見に住みながら、自らの氷見市に関して学習しようとする意欲の高まりがあまり見られなかった。地域住民への意図的、積極的な取り組みとして、住民に対して、国史跡３か所、国天然記念物１か所、氷見市立博物館を見学する機会を提供した。

◇ ７公民館合計で２４０名の参加があった。学童保育で公民館を利用する小学生から、８０歳を超える高齢者まで、様々な年齢の方々の参加者があったが、その内約７割の人々が、史跡や天然記念物の見学を初めて行ったとのことであった。

◇ 感想としては、ふるさとに愛着を持つことができた、誇りを持つことができたという声が９割を超え、またほぼ全員から、参加してよかったという意見であった。

◇ 公民館職員の中にも、初めて史跡について学んだという声もあり、社会教育を担う公民館の資質向上の必要性について、認識が新たとなった。

② 課題

◇ 公民館がふるさと教育の拠点となるためには、館長、主事等の職員や、公民館利用者、地域住民が主体的な学びを行う雰囲気作りや、博物館等の連携、他の公民館等のネットワーク作りが一層必要である。

◇ 氷見市に住んでいるのに氷見のことを意外によく知らない。また、史跡や天然記念物の見学が初めてという地域住民が多いという現状を踏まえた事業を今後も展開していく必要がある。

資　　料

地域住民のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察

公民館職員のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察

公民館ふるさと教育推進事業の概要

社会教育施設や各種団体とネットワークを形成し「公民館ふるさと教育」を推進

公民館のネットワークを構築し「公民館ふるさと教育」を推進

富山県の公民館におけるふるさと教育の推進

富山県の公民館における公民館同士のネットワーク

富山県の公民館における行政・他団体・他施設・他機関とのネットワーク

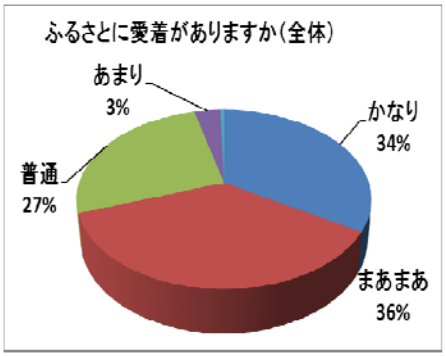
富山県公民館ふるさと教育推進協議会会則

富山県公民館ふるさと教育推進協議会事務局規定

地域住民のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察

（回答　７９６人）

１　ふるさとに愛着をもつ人は７割以上

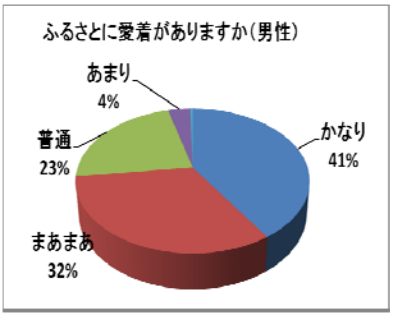


「あなたはふるさとに愛着をもっていますか」の問いに、「かなり」「まあまあ」と答えた人は全体の 70%であり、「普通」も含めると 97%であった。

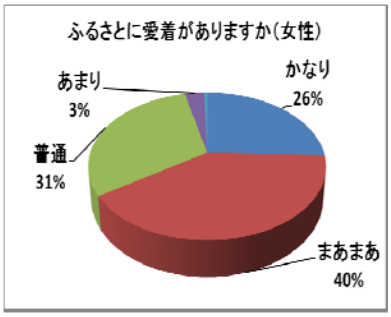
近年、地域のつながりや人間関係が希薄になり、地域への愛着が薄れてきていると報じられているが、公民館の事業に参加する地域住民は、自分が住んでいるふるさとに、愛着をもっている人が大変多い。

男性の方が今住んでいるふるさとに愛着をもっている人が多い

（男性の回答）



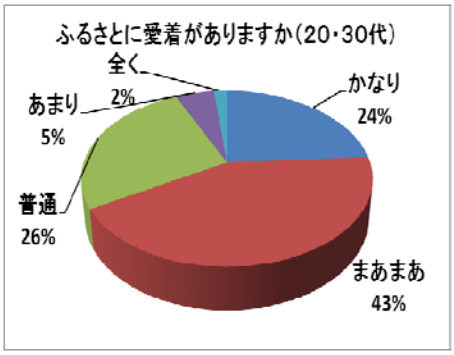
（女性の回答）



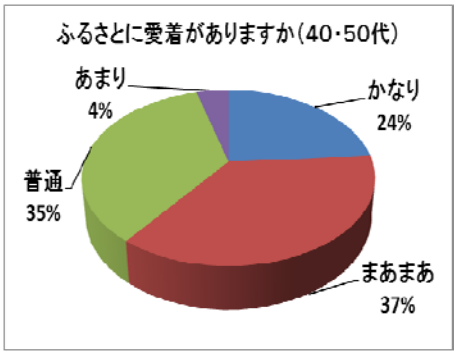
男性と女性では、男性の方が愛着をもっている人が多い。愛着が「かなり」あるという男性は 41%で女性より 15 ポイントも高い。これは、富山県では女性の場合、結婚を契機に今の土地に移り住んできた人が多く、男性は、その土地に生まれ育って住んでいる人が多いことが理由の一つと考えられる。

60 代以上では半数以上が、ふるさとに「かなり」愛着をもっている

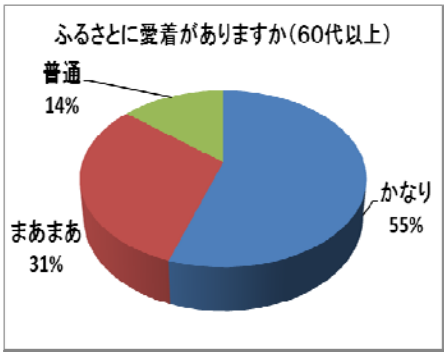
（20 代・30 代の回答）



（40 代・50 代の回答）



（ 60 代以上の回答）



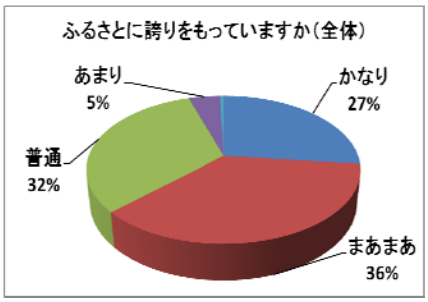
自分が今住んでいるふるさとの対する愛着には、年齢による差異が見られる。

年代別で見てみると、若い親世代の 20 代・30 代では、今住んでいるふるさとに愛着が「かなり」あると回答した人は 24%で、「まあまあ」の 43%も含めると、67%の人が愛着があると答えている。この年代は若い親層が多く、また幼い子どもをもつ親も多い。子どもを介してＰＴＡや児童クラブなどで地域行事に参加することが多いため、愛着の心もそれに支えられているのではないかと推測される。

40 代・50 代では 20 代・30 代より愛着をもっている人の割合が下がっている。40 代・50 代は、まさに働き盛りの時代で、会社や社会の中などでも責任ある立場になっている人が多い。子どもも大きくなり、忙しくて地域活動などにもあまり参加できない人が多い。愛着がある人の割合が減っていくのは、このように日々の忙しさに振り回され、地域のことを振り返る時間や地域の行事に参加する時間がないなどの理由が考えられる。

60 代以上になると、今住んでいるふるさとに愛着が「かなり」と回答した人が 55%になり、20 代・30 代、40 代・50 代の 2 倍以上に増えている。「まあまあ」も含めると 86%の人がふるさとに愛着があると答えている。結婚を契機にこの土地に住むことになった人でも、生まれたところでの生活より、今のところでの生活の方が長くなり、長年住み慣れた地区に愛着の心が強く芽生えてくるようである。

2　ふるさとに誇りをもつ人は6割以上

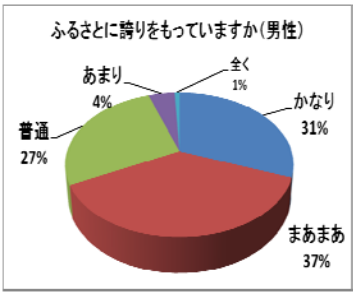


「あなたはふるさとに誇りをもっていますか」の問いに、「かなり」「まあまあ」と答えたのは全体の63%であった。「普通」も含めると95%であった。

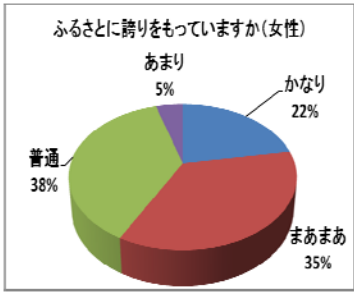
公民館事業に参加している地域住民は、ふるさとへの愛着同様に、ふるさとに誇りをもっている人も多い。

男性の方が今住んでいるふるさとに誇りをもっている人が多い

（男性の回答）



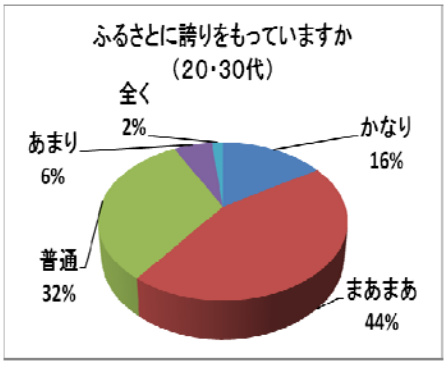
（女性の回答）

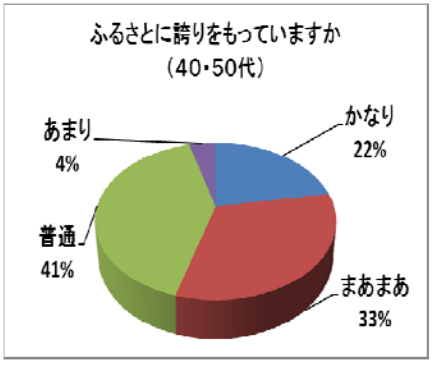


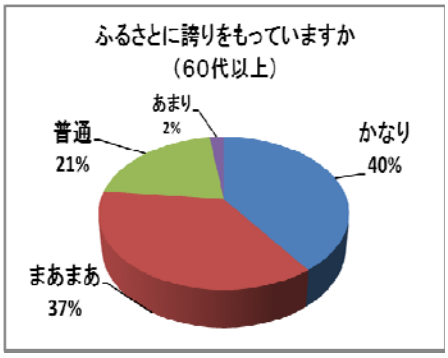
ふるさとへの愛着の感じ方と同様、男性と女性では、男性の方が、誇りをもっている人が多い。（男性68%、女性57%）

これもまた、愛着の感じ方同様に、富山県では男性の方が女性より、今の土地に生まれ育ち、住んでいる人が多いことが影響しているものと思われる。

60代以上では4割が、ふるさとに「かなり」誇りをもっている。誇りのもち方は、年代によって愛着の感じ方と同じ傾向が見られる







自分が今住んでいるふるさとに誇りをもっている人の割合は、愛着の感じ方同様に年齢による差異が見られる。

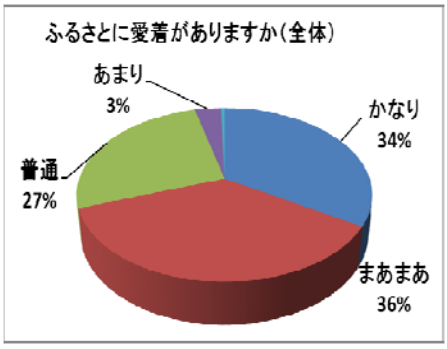
「かなり」だけをみると、20代・30代では16%、40代・50代は22%、60代以上になると40%となり、年代が上がるにつれてふるさとへの誇りを強く持つ傾向が見られる。60代以上では、20代・30代の2.5倍、40代・50代の約2倍に増えている。年齢が、ふるさとに誇りを強くもつ要素として働いている。

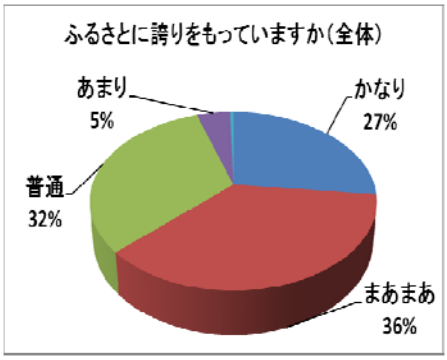
しかし、「かなり」に「まあまあ」を加えてみると、20代・30代では60%、40代・50代は55%、60代以上になると77%となる。ふるさとへの愛着の感じ方同様に40代・50代は割合が低下する傾向が見られる。また、60代以上になると大きく割合が増える傾向がある。

理由としては愛着の感じ方同様に、地域行事への参加度、仕事の忙しさ、年齢、その地域にどれだけ長く住んでいるのかなどが、影響していると考えられる。

公民館事業でふるさとに愛着を感じ、地域を誇りに思う気持ちを育てて行くには、仕事の忙しさ、年齢、その地域にどれだけ長く住んでいるのかなどの、公民館としては関与できない問題もあるが、多くの地域住民がより多く地域の行事に参加できるような、そして、参加をきっかけとしてふるさとへの関心を高める事業を仕掛けていくことが大切である。

3　ふるさとへの愛着とふるさとへの誇りの捉え方には、同じような傾向（大きな関係）がみられる



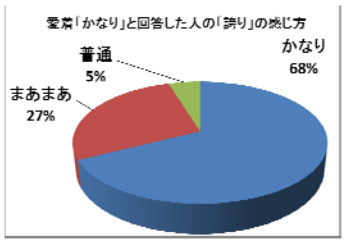


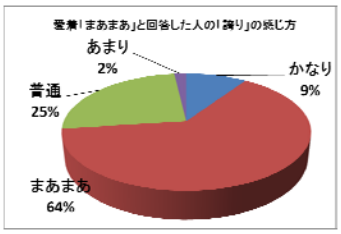
ふるさとに愛着をもっている人が「かなり」「まあまあ」と答えた地域住民は、全体の 70%であったが、誇りになると 63%となる。割合にして 7 ポイントの減少が見られる。

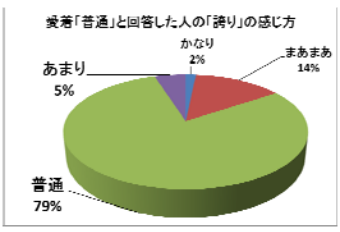
今自分が住んでいるふるさとには愛着があるけれども、ふるさとへの誇りとなると、それほどはないと捉えている地域住民がいることが分かる。

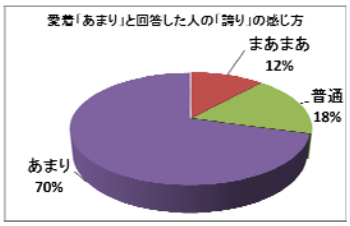
愛着を感じるかどうかは、家族と住んでいる今の土地に対する自分自身の感じ方や､そこでの人間関係の良好さなどがその大きな基準となる。しかし誇りとなると、例えば、豊かな自然環境、文化的な遺産や遺跡、伝統行事など、目に見える物があるかどうかも大きな基準となり、人間関係的な良好さだけではないため、外的な見慣れた、住み慣れた地区には愛着はあるが、自慢できるもの（誇れるもの）はあまりないと捉えている意識が影響しているのではないかと考えられる。

ふるさと教育の推進では、普段見慣れたものの中に、また自分たちが住んでいる身近な地域の中にも多くの素晴らしい、その土地ならではの誇れるものがあることを、参加した人たちがしっかり意識していけるように事業を企画していくことが大切である。また、地域内の温かな人間関係も、ふるさとの誇るべき素晴らしいものであることも意識していくようにして行かなくてはならない。









愛着と誇りの捉え方の関係には同じような傾向が見られる

ふるさとに愛着を「かなり」もっていると回答した地域住民の多くは、ふるさとに対する誇りも「かなり」あると回答している。

ふるさとに愛着を「まあまあ」もっていると回答した地域住民の多くは、誇りも「まあまあ」と回答している。

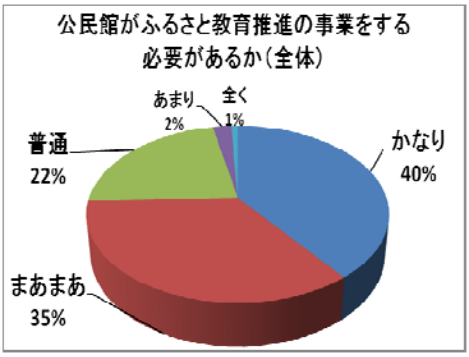
同様に、「普通」と回答した人の多くは誇りも「普通」と回答し、「あまり」と回答した人の多くは誇りも「あまり」と回答している。

愛着「かなり」	→	→	68%が	→	→	誇り	「かなり」
「まあまあ」	→	→	64%が	→	→		「まあまあ」
「普通」	→	→	79%が	→	→		「まあまあ」
「あまり」	→	→	70%が	→	→		「あまり」

このように、地域住民のふるさとへ愛着の感じ方と、ふるさとへの誇りの捉え方には、大きな関係がみられる。

ふるさとへの愛着が高まれば、ふるさとへの誇りも高まる。ふるさとに愛着をもつ人が増えていくように事業を展開していくことが大切である。

4　公民館がふるさと教育推進の事業を行う必要性があると考える地域住民は７割以上

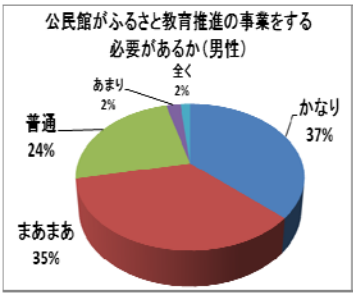


公民館がふるさと教育推進の事業を行うことに関しては、40%の地域住民が「かなり」必要があると思っており、35%の住民が「まあまあ」必要があると捉えている。両者を合わせると 75%が必要性を強く感じている。「普通」も含めると 97%になる。

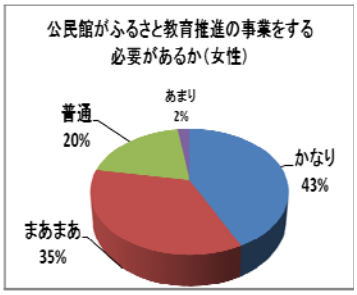
ふるさと教育の推進に関しては、多くの地域住民が、身近な公民館でふるさと教育を推進していく必要性を強く感じている。

女性の方がふるさと教育の必要性を強く感じている

（男性）



（女性）

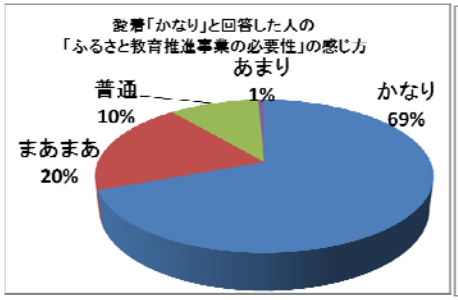


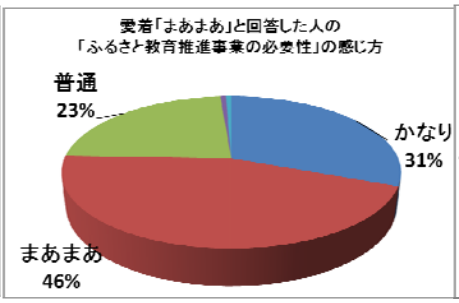
男性と女性では女性の方が必要性を「かなり」必要だと思っている人が多く 43%いる。男性では 37%となっており 6 ポイントの違いがある。

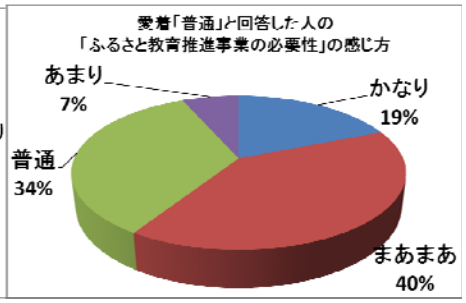
富山県では、女性の場合、結婚を契機に今の土地に移り住んできた人が多い。新しく住むようになった地域のことは知らないことが多いけれど、子どものために、新たに住むようになったふるさとのことを理解していくことは大切だと思う意識が働いているのではないかと思われる。また、女性の場合、子育てやサークル、講座や教室などに男性より積極的に参加する傾向が見られるため、そこで新たに知り合った友達などが増え、その様な人たちと今住んでいる地域のことをもっと知りたいと願う傾向があるのかもしれない。

公民館でのふるさと教育は、地域住民がふるさと教育の必要性を高く意識しており、受け入れられやすい事業となっていく。

5　ふるさとへの愛着が高い人ほど、ふるさと教育推進の事業を行う必要性を高く捉える







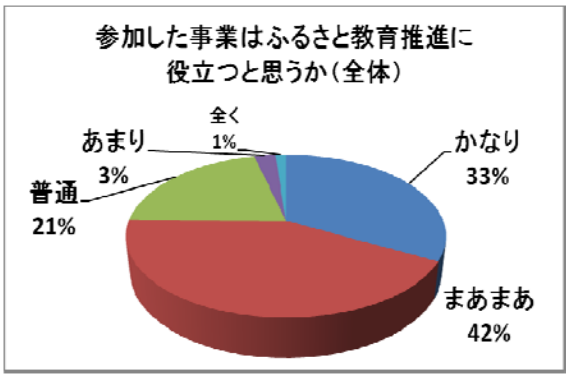
ふるさとに愛着が「かなり」あると回答した人の、69%はふるさと教育推進の必要性が「かなり」あると捉えている。「まあまあ」の 20%を含めると、89%の人は必要性を強く感じている。

「かなり」と「まあまあ」を含めた割合で見てみると、ふるさとに「まあまあ」愛着をもっていると回答した人では必要性が 77%に、「普通」と回答した人では必要性が 59%へと、ふるさとへの愛着が低くなるにつれて、ふるさと教育の必要性の感じ方が大きく減少していく。このように、ふるさとへの愛着の気持ちが高い人ほど、ふるさと教育推進の必要性 も強く感じる傾向が見られる。

さらに、愛着が「まあまあ」と捉えている人の 31%、愛着が「普通」と捉えている人でも 19%が、ふるさと教育の必要性を「かなり」と思っており、愛着の感じ方より必要性の感じ方の方が高くなる傾向が見られる。

公民館でふるさと教育を推進していく時には、やはり活動を通して、ふるさとへの愛着の心を一層高めていくことが大切である。また多くの地域住民はふるさとに愛着をもっている人が多いので、地域住民のそのような気持ちに応える事業を企画していかなくてはいけない。

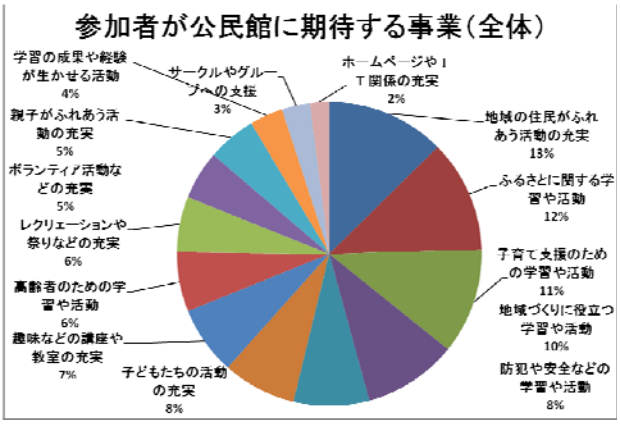
6　参加している事業がふるさと教育推進に役立っていると思う地域住民は 75%



自分が今回参加した公民館の事業は、地域における「ふるさと教育」の推進に役立つと思うかどうかの問いに「かなり」役立つと回答した人は全体の 33%で、「まあまあ」も含めると 75%の地域の住民は、「ふるさと教育」の推進に役に立っていると捉えている。「普通」も含めると、全体の 96%が参加した事業を好意的に捉えている。しかし、「あまり」役に立たない、「全く」役に立たないと否定的に捉えている参加者が 4%いた。

今回各公民館が実施した事業は、ふるさとへの理解やふるさとのよさを体験する、まさにふるさと教育推進の事業である。それにもかかわらず四人に一人が普通以下となっている現状をしっかり受け止め、その原因が事業の内容にあるのか、進め方にあったのか、それともふるさとを意識した活動になっていなかったからなのかを、再度検証していく必要がある。

7　住民が公民館に期待する事業は「地域住民がふれあう活動の充実」「ふるさとに関する学習や活動」など



地域住民が公民館に期待する事業について一番多かったのは「地域住民がふれあう活動の充実」で 13%、次に「ふるさとに関する学習や活動」が 12%となっている。3 番目は「子育て支援のための学習や活動」で 11%、4 番目は「地域づくりに役立つ活動」10%となっている。

他の項目は 10 パーセント以下になっている。

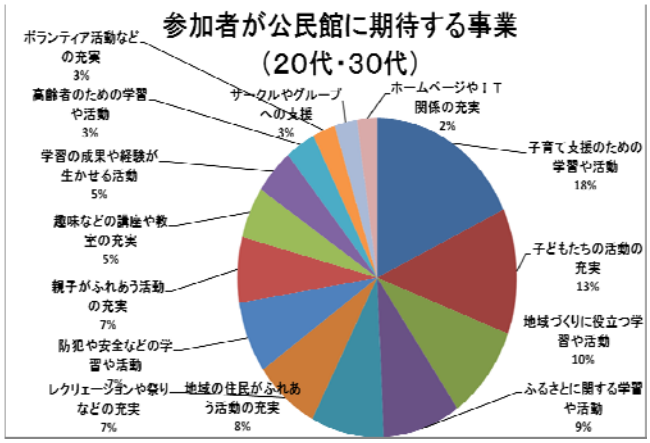
これまで公民館が力を入れて取り組んできた「趣味などの講座や教室の充実」「高齢者のための学習や活動」は 7 番・8 番となっている。

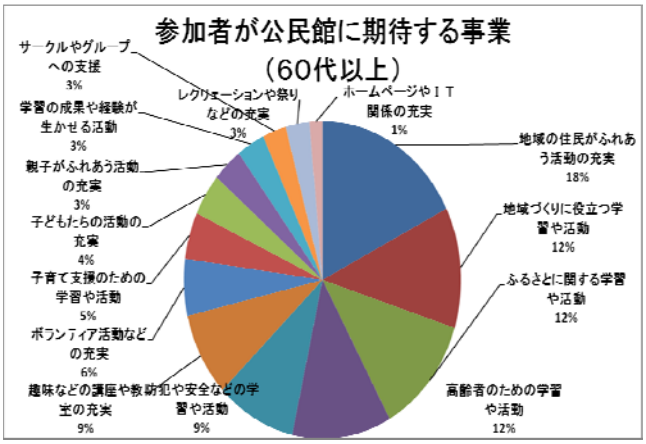
「ふるさとに関する学習や活動」や「子育て支援のための学習や活動」が上位に入っていていることに、注目したい。この二つの項目は、現在富山県が重点課題として取り組んでいる事項で、子育て支援の少子化対策条例やふるさと教育有識者懇談会の提言を受けた施策などが、地域住民に徐々に浸透してきていると捉えることができる。

また、「ホームページやＩＴ関係の充実」は 1%で、「サークルやグループへの支援」や「学習の成果や経験が生かせる活動」も低い割合を示している。情報化社会にあってＩＴ関係は避けて通れない事項である。団塊の世代とよばれている人々が退職を迎えている時代にあって「学習の成果や経験が生かせる活動」は、大変重要な公民館が取り組むべき現代的課題である。この分野に関しては、地域住民の意識がまだまだ低い現状をしっかりと押さえていかなくてはならない。そして県公民館連合会を中心に、公民館職員への啓発を積極的に進めるとともに、県の事業などとうまく連動し、意図的に推進していく必要がある。

「子どもたちの活動の充実」や「レクリエーションや祭りなどの充実」も 4 パーセントと低い割合を示している。これは、県内の公民館では、例えば県の委託事業「公民館わくわくどきどき自然体験事業」に 20 年度は 28 公民館、21 年度は 48 公民館で取り組んでいる。22 年度は「公民館子ども自然体験事業」に 80 公民館で取り組んでいる。実施していない公民館でも、学校やＰＴＡ、児童クラブや子供会などと連携しての子どもたちの事業を積極的に実施しており、大きな成果を上げていることから、今のままで十分ではないかと捉えている人が多いためではないかと推察される。「レクリエーションや祭りなどの充実」も同様の捉え方からであると思われる。

8　公民館に期待する事業は年代によって大きく異なる





公民館に期待する事業に関しては、年代による違いが顕著に現れる。

若い親世代の 20 代・30 代では、「子育て支援のための学習や活動」を 1 番目に「子どもたちの活動の充実」を 2 番目にあげている。さらに、「地域づくりに役立つ活動」や「ふるさとに関する学習や活動」も大切であると考えている。

『子ども』が大きなキーワードとなっている。

地域の絆が弱くなったと言われるが、公民館行事に参加してくる若い親世代では、地域やふるさとに関する事業に期待をもっている人も多くいる。

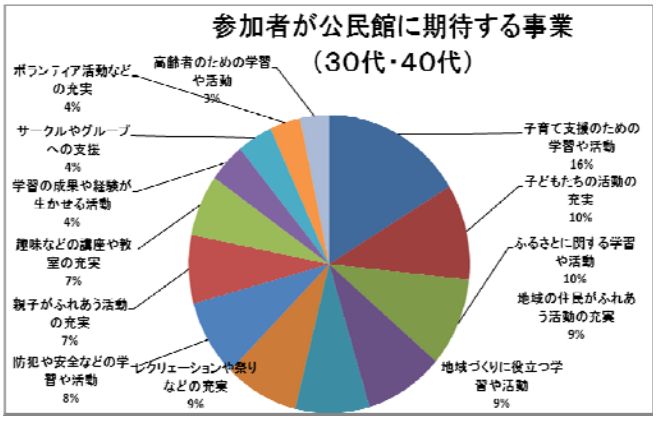
一方、60 代以上では、「地域住民がふれあう活動の充実」を 1 番に「地域づくりに役立つ活動」を 2 番にあげる。3 番には「ふるさとに関する学習や活動」を 4 番には「高齢者のための学習や活動」をあげる。　『地域』が大きなキーワードとなっている。

地域を強く意識している 60 代以上の方々の、豊かな人生経験やさまざまな知恵を、いかに地域に還元していただくのかを、公民館は考えて行かなくてはならない。

また 60 代以上で期待度が高い「高齢者のための学習や活動」は 20 代では関心が低い項目となっている。逆に 20 代・30 代で期待が高い、「子育て支援のための学習や活動」や「子どもたちの活動の充実」は、60 代以上では、関心の低い項目となっている。

そこで、住民ニーズによる必要課題を設定し解決していくためには、公民館が事業を計画する時、どの年代層を対象とした事業なのかを明確にしていくことが、非常に大事になってくる。

9　４０代も子育て世代

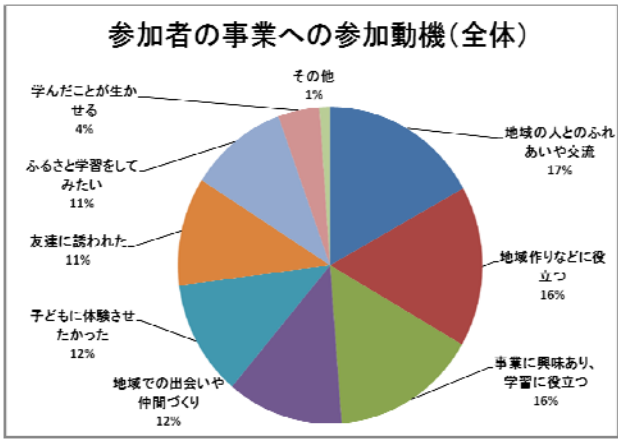


30 代 40 代では 20 代・30 代同様「子育て支援のための学習や活動」が 1 番目に「子どもたちの活動の充実」が 2 番目になる。40 代以降は、これまで働き盛り世代と言われてきたが、初婚年齢が高くなってきている現在では、40 代も〈子育て世代〉と見て行く必要がある。

この 40 代を子育て世代と見ると、子どもを対象とした活動では、若い 20 代の親から働き盛りの 40 代までの幅広い年齢層に、公民館が呼びかけていく必要がある。また同時に、幅広い年代が『子ども』をキーワードとして、いかに地域での年代間交流を図っていくのか、という新たな課題の解決が求められている。

公民館が上手に子どもたちの行事に取り組んでいけば、これまでなかなか公民館活動に参加してこなかった 20 代 30 代 40 代の地域住民を、子どもという共通のキーワードで公民館に取り入れていく、大きなチャンスともなっていく。

10　公民館事業への参加動機として多いのは「地域の人とふれあいや交流をしたいから」

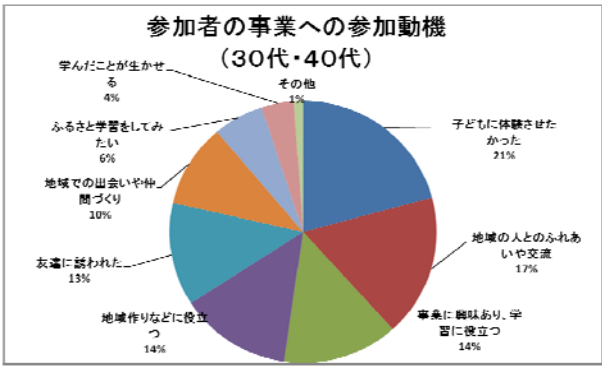


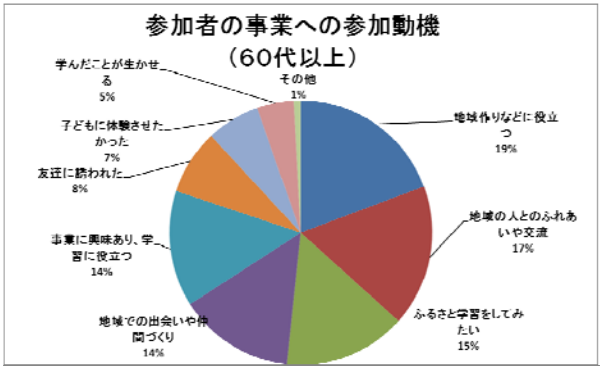
地域住民のふるさとに関する事業への参加動機について聞いたところ、1 番にあげたのは、「地域の人とふれあいや交流をしたいから」で約 17%であった。
2 番は「地域作りなどに役立つから」3 番は「事業に興味があり学習に役立つから」で、上位 3 項目で約 50%になる。「地域での出会いや仲間作りをしたいから」「子どもに体験させたかったから」「友達に誘われたから」「ふるさと学習をしてみたいから」なども 10%を越えている。参加動機の中には大きく突出する項目はない。地域住民はさまざまな動機によって公民館の事業に参加していることが分かる。

公民館ではこれらの、さまざまな地域住民の参加動機に応えていかなくてはならない。一つの事業でオールマイティのように満たしていくことはできないが、例えば、ふるさと学習に取り組む中で地域の人とのふれあいがあり地域での出会いや仲間づくりにつながるように工夫して、参加者の満足感を得ていくように事業を計画するとよい。また、同じふるさと教育でも、住民の興味をひくような内容で企画し、参加したことが地域作りに役立ったと実感させていくように計画するといった工夫が必要である。

公民館が 1 年間の中で実施出来る事業数は限られているので、一つの事業の中に複数ねらいをさだめ、成果（満足感）を求めていくことが大切である。

11　公民館に期待する事業同様、年代によって参加動機は大きく異なる





30 代・40 代で見たとき、1 番に「子どもに体験させたかったから」をあげており、21%いる。この数値からも 40 代は〈子育て世代〉と捉えていく必要がある。

20 代も含め、この年代層の参加動機は、『子ども』がやはり大きなキーワードとなっている。

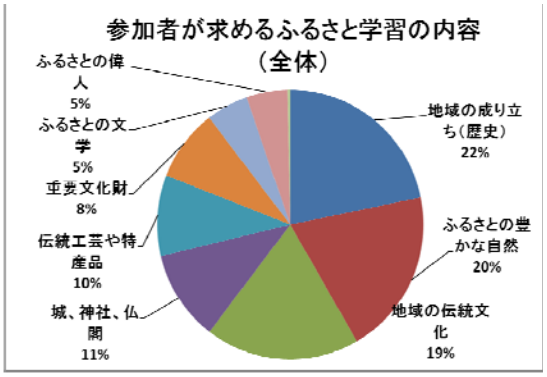
公民館では、子どもの参加を意識した事業の組み立てていく時には、合わせてこれら親の年代層をいかに参加へと導いていくのかにも工夫が求められる。

一方 60 代以上では当然のことながら「子どもに体験させたかったから」は低い順位となっている。

60 代以上では、「地域づくりに役立つ」が 19%を占める。自分が参加していることがしっかりと地域貢献につながることを求めて参加している。また、「ふるさと学習をしてみたかったから」とふるさと学習もこの年代では大きな参加動機となっている。

公民館では 60 代以降の利用者や事業への参加者が最も多いといった現状があり、事業を計画する時にはこの年代の参加を大いに期待していることも多い。しかしこの年代層は単に参加してもらえればよいというのではいけない。しっかりとした目的意識を持って参加しているのだと言うことを認識し、準備段階からの参画や、事業の中で主体的になって活躍できる場面を設定するなど、充実感や満足感がしっかりと得られるようにしていかなくてはならない。受け身の参加者から、一緒に事業を創っていく主体者にしていくことが大切である。そこに、これからの公民館活動の大きな可能性を見いだしていける。

12　地域住民が公民館に企画してほしいと思う事業は、「地域の成り立ち」「地域の伝統文化」「ふるさとの豊かな自然」



参加者に公民館でのふるさと教育に関して、どのような学習や活動があったらよいと思うかを聞いたところ、「地域の成り立ち」「ふるさとの豊かな自然」「地域の伝統文化」の 3 項目で約 60%になる。この 3 項目はそれぞれ大きな差はなくそれぞれ約 20%程度になっている。

その後は、「城、神社、仏閣」「伝統工芸や特産品」「重要文化財」が続き、それぞれ約 10%程度で続く。

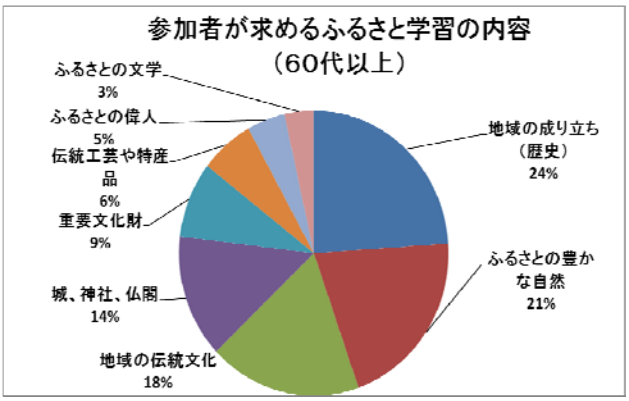
「ふるさとの文学」や「ふるさとの偉人」は 5%台と低い割合となっている。

公民館におけるふるさと教育では、このような学習や活動が中心に進められていくと予想される。このほかにもふるさと学習といった時には、その学習地域素材はそれこそたくさんのメニューがあるので、各公民館ではそれぞれの地域の実体を捉えて、自分の地域では何を大切に、何を伝えていくのかをしっかり見据えた事業を企画して行くことが大切である。

また、地域住民は一番に「地域の成り立ち」をあげているが、これに関しては、自然をテーマに、伝統文化をテーマに、城をテーマにと、さまざまなテーマで地域の成り立ちを探っていくことが可能であるため、テーマによった学習が進んでいくものと思われる。全ての分野で人物にスポットを当てた学習も考えられる。

さらに今の親世代は、親自身が子どもの時に自然体験をあまりしていない世代でもある。生まれた時から車社会の中で地域内を歩いたり自転車で回ったりして身近なふるさとの自然や史跡などを自分の体で直接感じるようなことをしていない親が多く、自分のふるさとのことをよく知らない。ふるさと教育事業では親子参加型の事業とし、親世代を積極的に引き入れていくなどの工夫などによって参加者のニーズに応えていくという考え方も必要である。

13　60 代以上では公民館に企画してほしいと思う事業は、「地域の成り立ち」

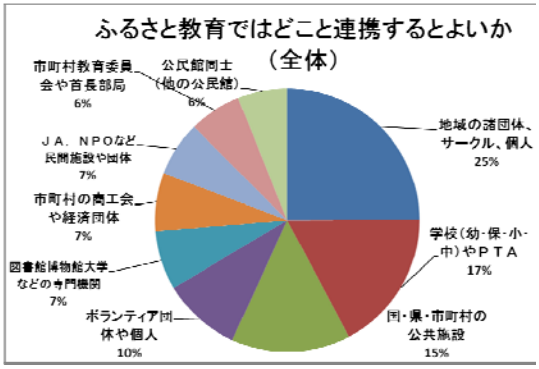


年代別で、公民館でのふるさと教育に関してどのような学習や活動があったらよいと思うかについて見てみると、どの年代でも 1 番から 3 番までの項目は「地域の成り立ち」「ふるさとの豊かな自然」「地域の伝統文化」の 3 項目であったが、60 代以上では「地域の成り立ち」が 24%で約 4 分の一を占めている。

一般の多くの人たちにとっては、自分が住んでいる地域の市史・町史・村史などを紐解いて学習する機会はあまりないのが現状である。

60 代以上になると、長年住み慣れて、愛着も大変強い自分の住んでいる地域について、改めてしっかりと学んでみたいという意識が強くなる傾向が見られる。その様なニーズに応える学習の機会や、そういった人たちを集めてサークル化への支援をしていくことで、地域を伝える人材の発掘にもつながっていく可能性が大きい。また専門的知識のある機関や郷土史家などと、どのように連携して取り組んでいくのか、各公民館の工夫のしどころとなってくる。

14　ふるさと教育で連携するのは「地域の諸団体・サークル・個人」「学校やＰＴＡ」



公民館で「ふるさと教育」を豊かに推進していくために、どこと連携（協力）していくことが大切だと思いますかとの問いには、「地域の諸団体、サークル、個人」を１番にあげている。そして２番には「学校（幼・保・小・中）ＰＴＡ」となっている。

この両者はこれまでも公民館が行事を実施する時には、大切にしてきた団体・機関・個人であり、連携体制もしっかり出来ているところが多い。ふるさと教育推進でもこれまで同様に大切にしてほしいと考えている。

「市町村の商工会や経済団体」や「ＪＡ・ＮＰＯなどの民間施設や団体」「市町村教育委員会や首長部局」「公民館同士」の連携が大切だと考えている人も 6%～7%いる。これらの諸団体等との連携はこれからの課題である。

課題と提案

① 地域住民の多くは、ふるさとに愛着を感じ誇りを持っている。そして公民館がふるさと教育を推進していくことに非常に関心があり好意的に見ている。富山県では地域住民のふるさとへの愛着の心を育んでいくため、公民館で地域におけるふるさと教育を推進していくための素地ができている。

これまで公民館での事業は、同じような趣味をもつ人たちが集まって学習する〇〇講座といったものや、三世代交流会や住民運動会、地区文化祭といった地域住民の交流や学習成果の発表などを積極的に行ってきており、地域での絆づくりの面から見たときには大変大きな成果があがっている。また、さまざまな地域に密着した事業を展開しているので、改めてこれは「ふるさと教育事業」と銘打って事業をする必要もないと考える。ただ、事業の中でしっかりと「ふるさと」を意識するよう、ふるさとの良さを実感するよう、公民館からの能動的な働きかけを意識的に行っていくことによって、ふるさと教育推進はスムーズに進むと思われる。

② 40 代も含めた子育て世代では『子ども』を意識した活動が、60 歳以上では『地域』を意識した活動が、地域住民の参加を促進していくための大きなキーワードとなっている。

そこで大切なのは、『子ども』を意識した活動では、単に多くの子どもたちが参加してくれればよい、親は行き帰りの安全のために公民館へ子どもを送ってきてくれればそれでよい、後は公民館が何とかするなどの考え方はよくない。親世代の参加をいかに促進していくのか、親世代同士の交流をどう図っていくのか、親世代の力をどのように生かしていくのか、事業で親子の交流をどう図っていくのかなど、親を強く意識した活動にしていくことが大切である。

また、『地域』を意識した活動では、単なる体験型の事業で、参加者が受け身で参加しているのではもったいない。特に 60 代以上の非常に地域意識や地域貢献意識の高い年代層の力を、最大限に引き出し活用していくように事業を企画して行くことが大切である。

③ 公民館が１年間の中で実施出来る事業数は限られているので、公民館におけるふるさと教育では、複数のねらいをもって計画していくとよい。ふるさと教育に取り組む中で、地域の人とのふれあいがあり地域での出会いや仲間づくりにつながるように工夫するとか、共同作業で参加したことが地域作りに役立ったと実感させていくように計画することが大切である。

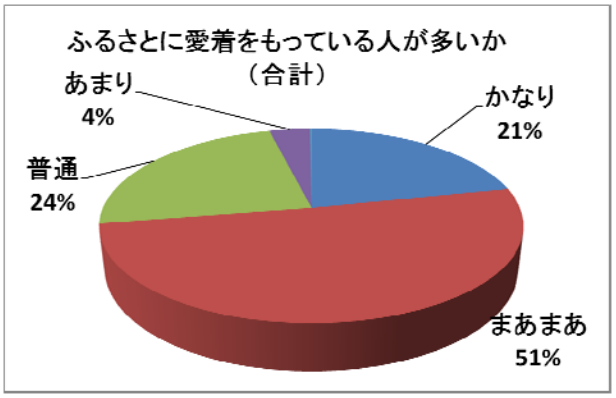
④ 公民館を中心とした地域でのふるさと教育は、単なる学びから「人づくり」「地域づくり」にと発展していくようにしていくことが大切である。例えば観光ボランティアの育成や特産品による地域づくり・町おこしなどは「人づくり」「地域づくり」にと発展していく。このようなときに「市町村の商工会や経済団体」や「ＪＡ・ＮＰＯなどの民間施設や団体」との連携は、公民館にとっても相手方にとっても大きな力となっていく。〈新たな公共〉という新しい考え方なども、積極的に取り入れていくことが大切である。

公民館職員のふるさと教育に関する捉え方の現状と課題に対する一考察

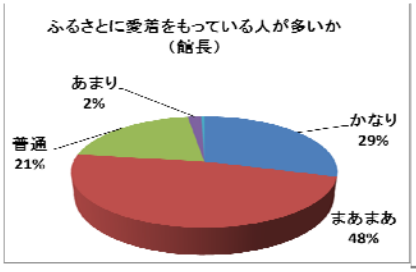
（回答７５８人）

１　ふるさとに愛着をもつ人は７割以上

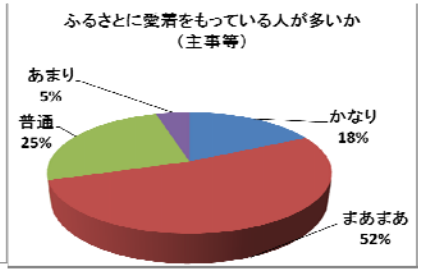
「あなたの地域ではふるさとに愛着をもっている人が多いか」の問いに、「かなり」「まあまあ」と答えた人は全体の72%であり、「普通」も含めると96%であった。一般的には地域への愛着が薄れてきていると報じられているが、地域住民と直接ふれあうことが多く、さまざまな地域行事を企画実践している公民館職員は、ふるさとに愛着をもっている人が多いと捉えて事業の推進に当たっていただいている。



（館長の回答）

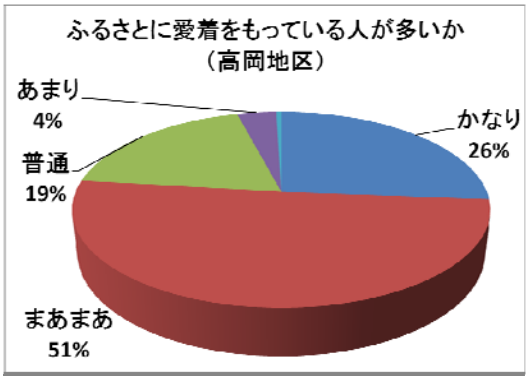


（主事等の回答）



館長と主事では、地域の代表者としての立場や、平均年齢がやや高く地域に長く住んでいる館長の方が、愛着をもっている人が多いと捉えている。（館長 77%、主事 70%）

（高岡地区の回答）



地域別に見たとき、高岡地区でふるさとに愛着をもっている人が「かなり」いるとの回答が 26%で、他地区に比べて高かった。

（新川地区 18%　　富山地区 21%　　砺波地区 19%）

このグラフには現れていないが、高岡地区の中心である高岡市では、31%の職員がふるさとに愛着をもっている人が「かなり」いると回答している。

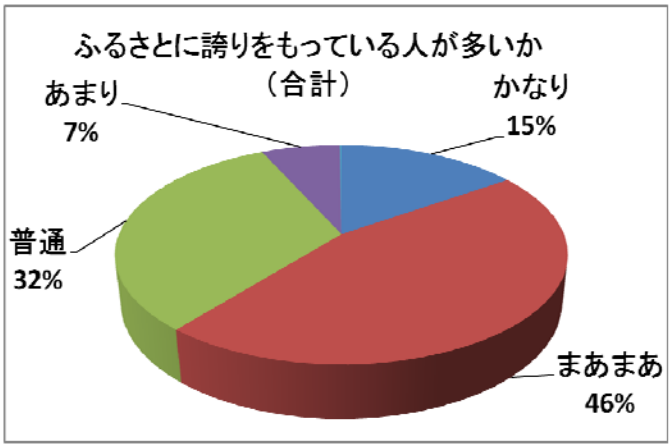
高岡市では平成 21 年度、「高岡市開町 400 年」の記念事業が数多く実施され、公民館を始め各種社会教育団体や自治会なども積極的に事業に参加してきたことで、ふるさとへの関心が高まったと考えられる。

公民館事業でふるさとへの愛着を感じる気持ちを育てていくには、ふるさと教育推進の各事業で、ふるさとをしっかりと意識した事業にしていくこと、自分たちの住んでいる地域はとても良いところだと参加者にしっかりと意識づけていくことが大切になってくる。また、市町村の記念行事などでは、記念行事をきっかけとして、ふるさと意識を高めるように公民館が主体的に仕掛けていくことが大切である。

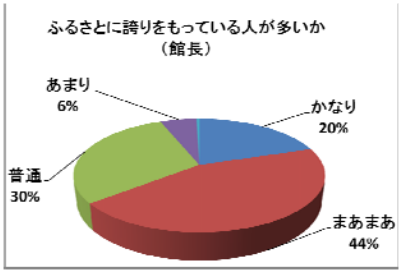
2　ふるさとに誇りをもっ人は6割以上

「あなたの地域ではふるさとに誇りをもっている人が多いか」の問いに、誇りをもっている人が「かなり」「まあまあ」と答えたのは全体の　61%であった。「普通」も含めると93%になった。

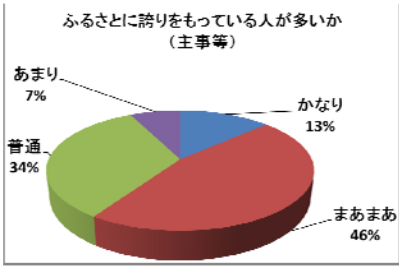
公民館職員は、ふるさとへの愛着をもっている地域住民が多いと捉えているが、それと同様に、ふるさとに誇りをもっている人も多いと捉えて各種事業に取り組んでいただいている。



（館長の回答）

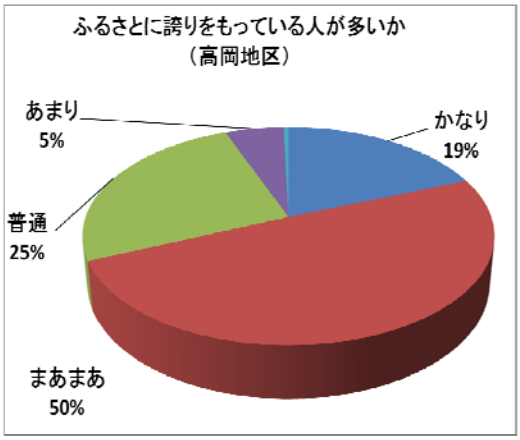


（主事等の回答）



また愛着の捉え方と同様、館長と主事では、平均年齢がやや高い館長の方が、誇りをもっている人も多いと捉えている。（館長64%、主事59%）

（高岡地区の回答）



地域別に見たとき、愛着と同様に、高岡地区でふるさとに誇りをもっている人が「かなり」いるとの回答が多かった。「まあまあ」も含めたとき高岡地区では69%になり、他地区に比べ9～16ポイントの大きな差が見られた。

まあまあも含めて高岡地区と比較すると

新川地区は53%で　　16ポイント低い

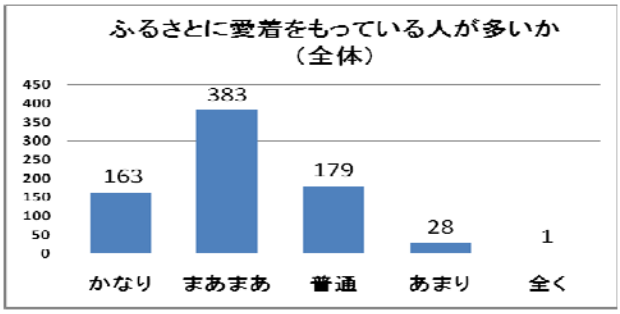
富山地区は60%で　　9ポイント低い

砺波地区は59%で　　10ポイント低い

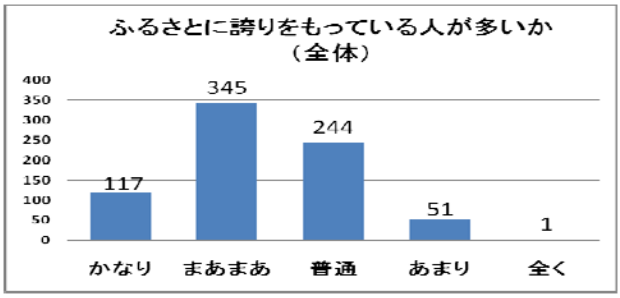
これも愛着と同様「高岡市開町 400 年」の記念事業に公民館が積極的に参加してきたことで、ふるさとへの関心が高まったことが大きく影響していると考えられる。

公民館事業でふるさとに愛着を感じ、地域を誇りに思う気持ちを育てて行くには、高岡市開町400年のような記念行事などに、公民館も主体的に関わっていくことが大切である。また、多くの地域住民が行事に参加するような、そして、参加をきっかけとしてふるさとへの関心を高める事業を公民館としても、仕掛けていくことが大切である。

3　ふるさとへの愛着とふるさとへの誇りの捉え方には、同じような傾向（大きな関係）がみられる



ふるさとに愛着をもっている人が「かなり」「まあまあ」いると捉えているのは546人で、これは全体の72%であったが、誇りになると462人で61%となる。割合にして11ポイント、人数にして84人の減少が見られる。

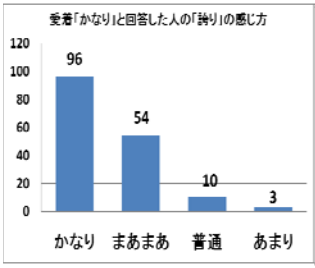


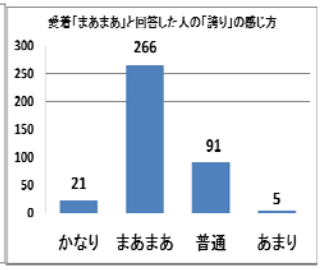
ふるさとへの愛着をもっている人は多いけれど、誇りとなると、それほどはいないのではないかと捉えている公民館職員が多くいることが分かる。

これには、見慣れた地区内には愛着のあるものは多いが、自慢できるもの（誇れるもの）はあまりないと捉えている職員の意識も影響していると推測される。

ふるさと教育の推進では、普段見慣れたものの中に、また自分たちが住んでいる身近な地域の中にも多くの素晴らしい、その土地ならではの誇れるものがあることを、参加した人たちがしっかり意識していけるように、事業を企画していくことが大切である。

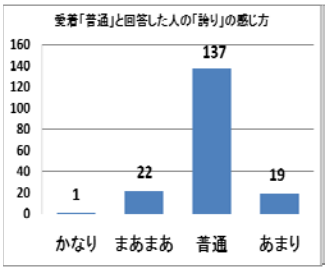
（愛着と誇りの捉え方の関係）

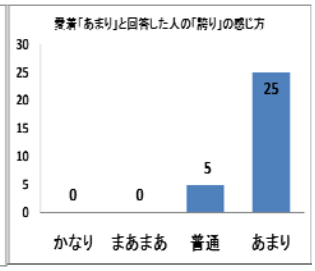




ふるさとに愛着をもっている人が「かなり」いると回答した職員の多くは誇りをもっている人も「かなり」いると回答している。

愛着をもっている人が「まあまあ」と回答した職員の多くは、誇りをもっている人も「まあまあ」いると回答している。





同様に、「普通」と回答した人の多くは誇りをもっている人も「普通」と回答し、「あまり」と回答した人の多くは誇りも「あまり」と回答している。

愛着「かなり」	→	→	59%が	→	→	誇り「かなり」
「まあまあ」	→	→	69%が	→	→	「まあまあ」
「普通」	→	→	76%が	→	→	「まあまあ」
「あまり」	→	→	83%が	→	→	「あまり」

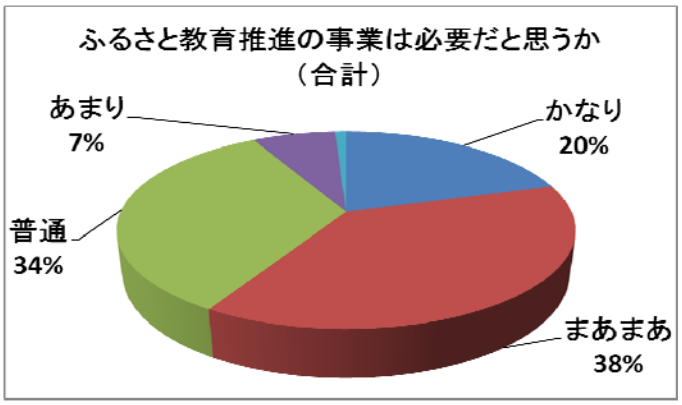
このように、ふるさとへ愛着とふるさとへの誇りの捉え方には、おおきな関係がみられる。

ふるさとへの愛着が高まれば、ふるさとへの誇りも高まる。まずは、ふるさとに愛着をもつ人が増えていくように、愛着をもっている人が多いと実感できるようにしていく事業が必要である。

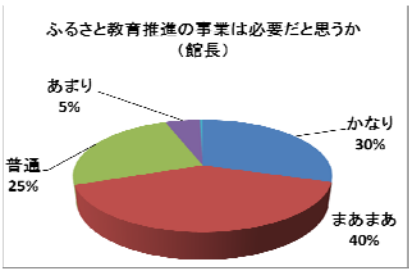
4　公民館がふるさと教育推進の事業を行う必要性があると考える職員は約 6 割

公民館がふるさと教育推進の事業を行うことに関しては、20%の職員が「かなり」必要があると思っており、38%の職員が「まあまあ」必要があると捉えている。両者を合わせると 58%が必要性を強く感じている。「普通」も含めると 92%であった。

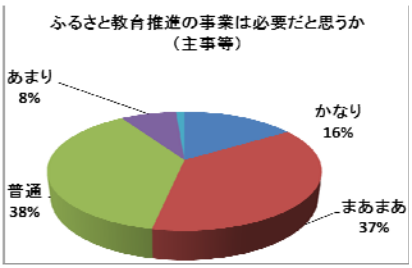
公民館ではさまざまな地域行事を企画実践しているが、ふるさと教育推進を肯定的に捉えて事業の推進に当たっていただいている。



（館長）



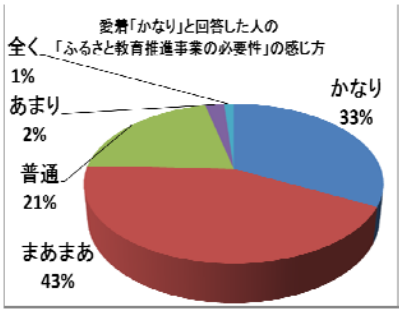
（主事）

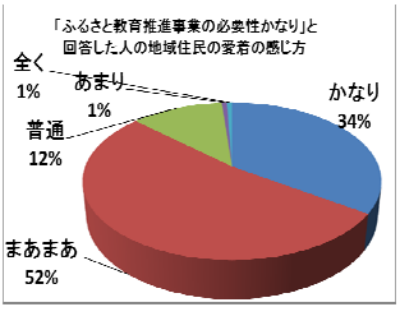


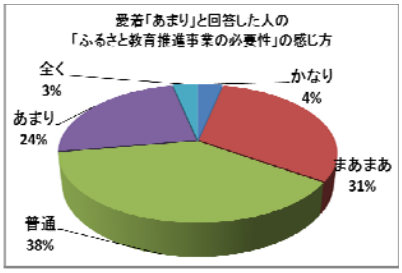
館長と主事では館長の方が必要性を「かなり」必要だと思っている人が多く 30%いる。主事では 16%となっており大きな違いがある。「まあまあ」必要だと答えた人も含めると、館長は 70%が必要性を強く感じているが、主事では 53%となっており、17 ポイントの大きな違いがある。さらに主事では「あまり」必要がないと答えた人が 40 人おり、「全く」必要が無いと答えた人も 6 人いる。

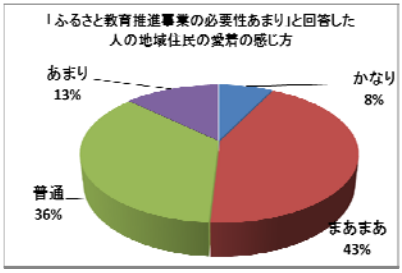
公民館でふるさと教育を推進していくとき、実際の実務を取り仕切り、案内を出したり準備をしたりしていくのは主事さんである。ふるさと教育の推進に当たっては主事さん方にしっかりと理解していただくと同時に、自分がふるさと教育を進めていくのだという意識を高めていく必要がある。

5　ふるさとへの愛着の捉え方の高い人ほど、ふるさと教育推進の事業を行う必要性を高く捉える









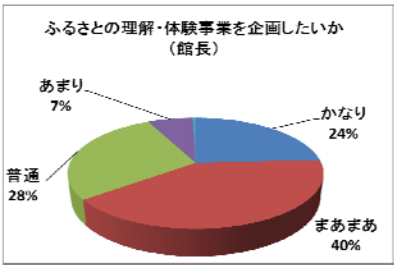
ふるさとへの愛着をもっている地域住民が多いと感じている職員ほど、ふるさと教育の必要性を高く感じる傾向がある。逆に、ふるさと教育の必要性を高く感じている職員ほどふるさとに愛着をもっている地域住民が多いと感じる傾向が見られる。

反対にふるさとへの愛着をもっている地域住民があまりいないと感じている職員ほど、ふるさと教育の必要性を低く感じる傾向がある。

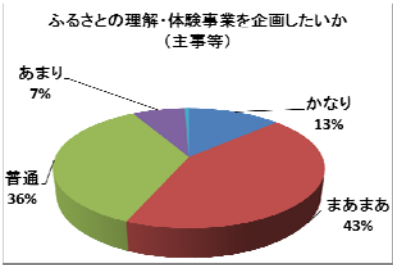
ふるさと教育の必要性を感じ、そのような事業を企画実施して多くの地域住民に接し、喜ばれることが重なれば、愛着をもっている人が多くいると捉えるようになる。また、地域にはふるさとに愛着をもっている人が多いので、地域住民のそのようなニーズに応える事業を企画していかなくてはいけないと思うようになり、企画する必要性も高いと感じるようになるのではないかと思われる。

6　ふるさとへの理解やふるさとのよさを体験する事業を企画したいと思っている人は６割

（館長）



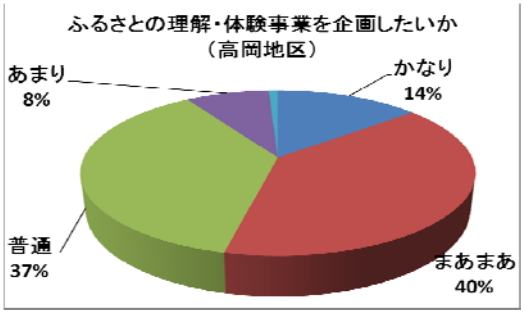
（主事）



ふるさとへの理解やふるさとのよさを体験する事業を企画したいかどうかの質問では、「かなり」「まあまあ」と回答した人は、全体では59%いる。

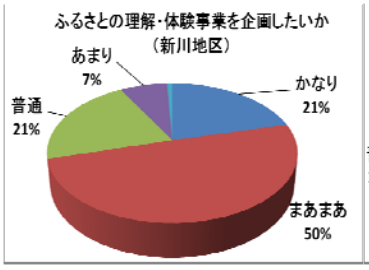
しかし、館長と主事の間には企画したいと思うか思わないかに大きな差が見られる。館長は「かなり」と思う人が24%で、主事より11ポイントも高かった。

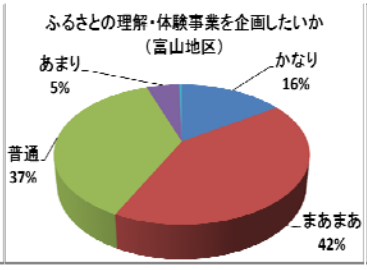
現実に事業を企画実施する場合、主事さんは、チラシの作成や配布、人数の掌握や案内などさまざまな庶務をこなして行かなくてはならない。そのような現実を考えたとき、ふるさと教育は良いことだとは思うけれど「ちょっと」と考える人が多いのではないかと思われる。まずは、主事さん方への理解をしっかり進めた上で、企画してみようと思う人を増やしていくようにしていかなければならない。

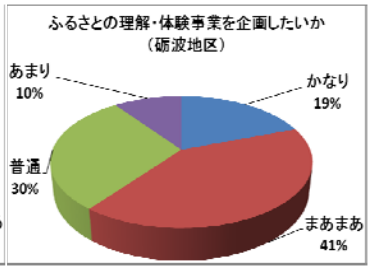


愛着や誇りをもっている人が多いと捉えている高岡地区が、企画したいと思う人の割合が 14 パーセントで一番少なかった。

これは、高岡地区の中心の高岡市で、「高岡市開町400年」の記念事業で、これまでふるさと理解に関する数多くの事業を企画したり参加したりしてきたため、もう十分なのではないかと思っている人が多いためと推測される。

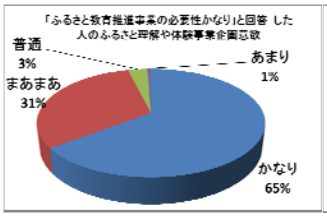


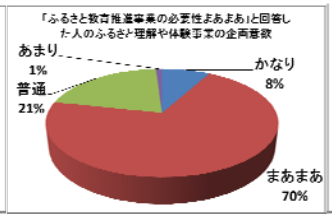


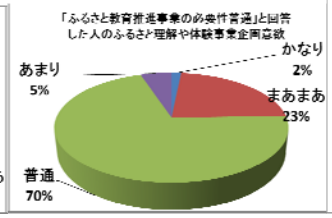


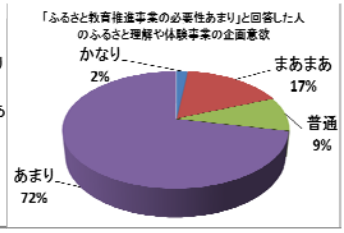
また、富山地区や高岡地区の都市部よりも新川地区と砺波地区の村部の方で、ふるさと教育を企画したいと思う職員が多いといった傾向が見られる。村部の方が都市部より豊かな自然が残っており、人と人とのつながりもまだ強い。さらに地元意識が強いことなどから、地域内の各種団体やいろいろな人の協力を得て事業が企画できるのではないかなどの意識が影響していると考えられる。

7　ふるさと教育推進事業の必要性が高いと捉えている職員ほど事業企画の意欲も高い



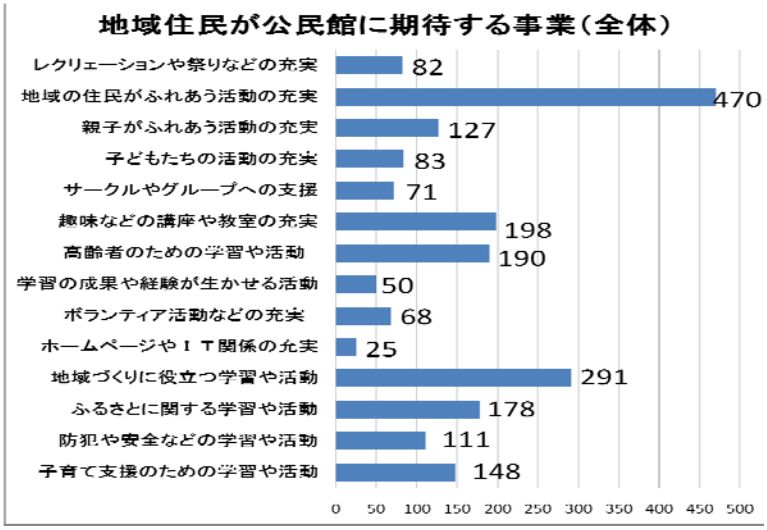






両者の間には強い関係が見られる。必要性が「かなり」あると思っている人の96%は事業の企画にも意欲的である。一方、必要性を「普通」と思っている人になると、事業の企画に意欲的な人は25%に減っていく。「あまり」必要ないと思っている人では19%に減っていく。ふるさと理解やふるさとの良さを体験する事業は本当に必要なのだと感じ、企画したいと思う職員が増えていくことが非常に大事である。

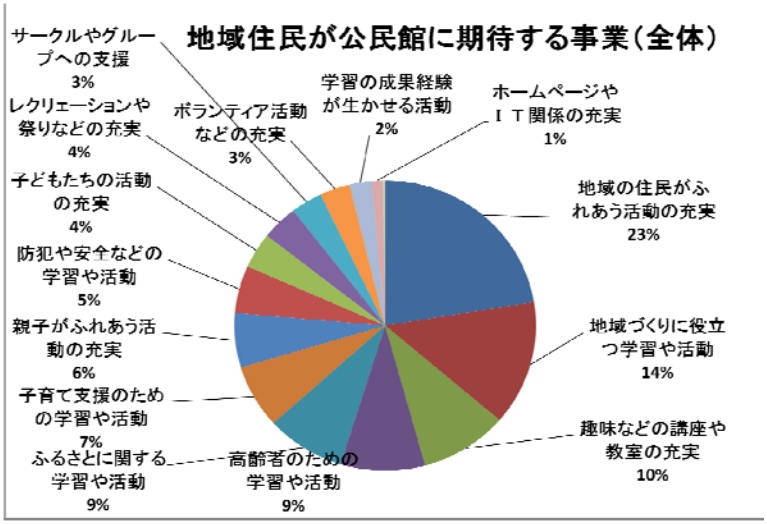
８　住民が公民館に期待する事業は「地域住民がふれあう活動の充実」「地域づくりに役立つ学習や活動」



地域住民が公民館に期待する事業について一番多かったのは「地域住民がふれあう活動の充実」で 23%、次に「地域づくりに役立つ学習や活動」で 14 パーセントであった。

他の項目は 10 パーセント以下になっている。

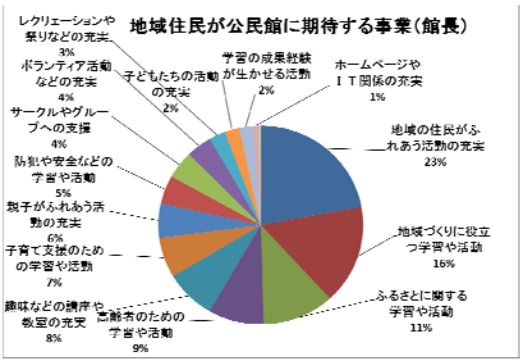
これまで公民館が力を入れて取り組んできた「趣味などの講座や教室の充実」「高齢者のための学習や活動」が 3 番・4 番となっている。「ふるさとに関する学習や活動」は 5 番目となっている。

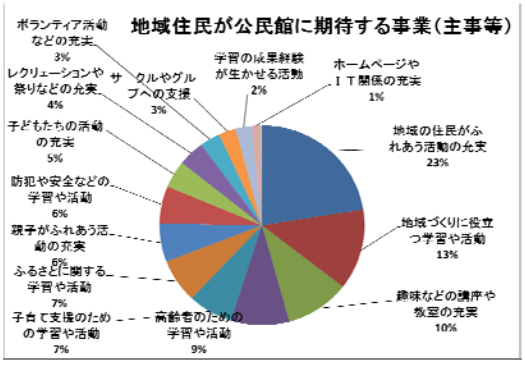


「ホームページやＩＴ関係の充実」は 1%で、「学習の成果や経験が生かせる活動」も 2%で大変低い割合を示している。情報化社会にあってＩＴ関係は避けて通れない事項であり、また大量の団塊世代が退職する時代にあって「学習の成果や経験が生かせる活動」も大変重要な公民館が取り組むべき課題となってくる。

この事業に関しては、県公民館連合会を中心に、公民館職員への啓発を積極的にしていかなくてはならない。

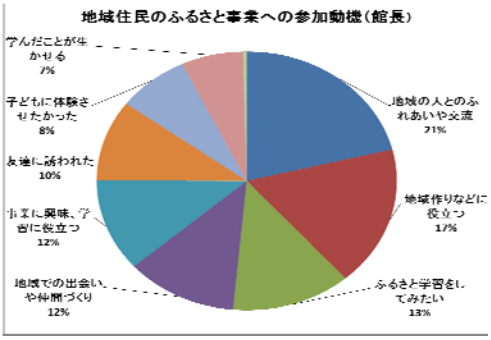
また、「子どもたちの活動の充実」や「レクリエーションや祭りなどの充実」も 4 パーセントと低い割合を示している。これは、県内の公民館では、例えば県の委託事業「公民館わくわくどきどき自然体験事業」に 20 年度は 28 公民館、21 年度は 48 公民館で取り組んでいる。22 年度は「公民館子ども自然体験事業」に 80 公民館で取り組んでいる。実施していない公民館でも、学校やＰＴＡ、児童クラブや子供会などと連携しての子どもたちの事業を積極的に実施しており、成果を上げていることから、今のままで十分ではないかと捉えているためではないかと推察される。「レクリエーションや祭りなどの充実」も同様の捉え方からであると思われる。

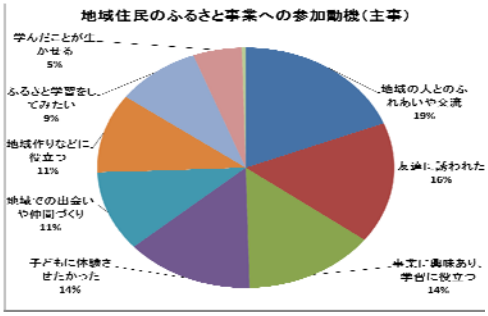




館長では「ふるさとの関する学習や活動」を上位にあげるが、主事は「趣味などの講座や教室の充実」を上位にあげている。主事さんは、日々趣味などの講座で公民館を訪れる利用者と接しており、また利用申請の事務手続きしているため、そのような声を直接聞く機会が多いためであると考えられる。

９　ふるさとに関する事業への参加動機として多いのは「地域の人とふれあいや交流をしたいから」



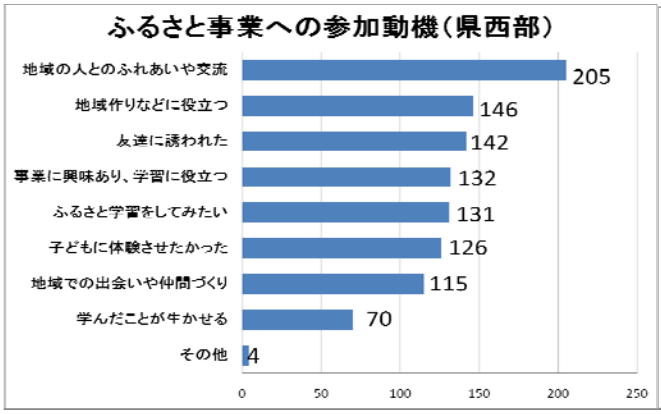


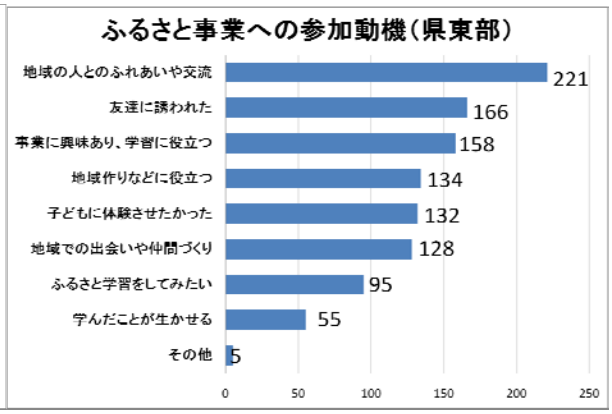
地域住民のふるさとに関する事業への参加動機について聞いたところ、館長・主事とも 1 番にあげたのは、「地域の人とふれあいや交流をしたいから」で約 20%であった。

しかしその後の捉え方は、館長と主事で違っている。館長が 2 番～4 番目に上げているのは
「地域作りなどに役立つから」「ふるさと学習をしてみたいから」「地域での出会いや仲間作りをしたいから」である。
主事が 2 番～4 番目に上げているのは、
「友達に誘われたから」「事業に興味があり学習に役立つから」「子どもに体験させたかったから」である。

地域住民が公民館に期待する事業でも館長と主事の捉え方に違いが見られたが、館長は地域の代表としての立場から、常に、地域としてとか地域のためにといった見方をする傾向がある。そのために「地域作り、ふるさと学習、地域での出会い」など地域に関わる事項を上位にあげると考える。

一方、主事の方は、利用者と直接接する機会が館長より多いため、「友達に誘われた、事業に興味があった、子どもに体験させたかった」など、より具体的な動機を上位にあげていると考える。

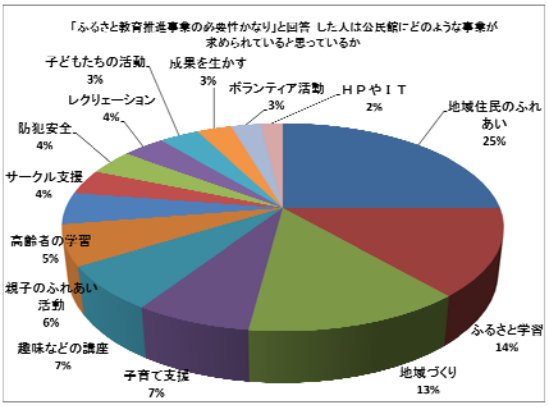


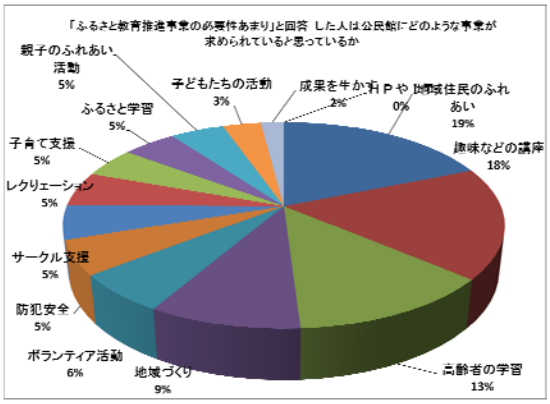


県東部と県西部とも、「学んだことが生かせるから」という動機に関しては、県東部は 55 人で 5%、県西部は 70 人で 7%となっており、ともに最も低くなっている。今後、地域の人材の発掘・活用という観点から、公民館が講座や事業を計画していくときには、単に参加する人を募り集めて事業を実施するといった方法からの脱却と参加者が受け身的な参加にならないように工夫していくことが大切である。

また、合わせて 125 人の「学んだことが生かせるから」との回答があるので、公民館で学んだことを生かしている人も多くいると推測される。趣味のサークルや講座、公民館主催の講座などで学んだ人を講師にまで高めていく活動や、さまざまな人の知識や知恵を生かす活動を、今後ふるさと教育推進の中で、公民館がしっかり意識して、意図的に取り組んでいくことが大切である。

10　ふるさと教育推進事業の必要性を強く感じる人は「ふるさと学習」「地域づくり」を地域住民が求めていると捉える





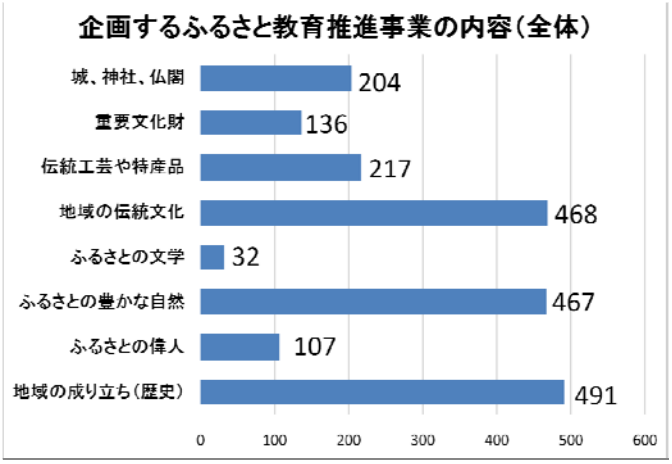
ふるさと教育の必要性の感じ方の高い低いに関係なく、地域住民が公民館に求めている事業は、1 番に「地域住民ふれあい活動」であるとしている。

ふるさと教育の必要性が「かなり」あると思っている人は「ふるさと学習」「地域づくり」を住民が求めている事業の上位にあげる。

逆に、ふるさと教育の必要性は「あまり」ないと思っている人は、「趣味などの講座」「高齢者の学習」が住民の求めている事業だと捉える傾向が見られる。

今後ふるさと教育を県内の公民館で展開していくためには、館長・主事などの公民館職員が、ふるさと教育は公民館にとって必要な事業だと思うような取り組みが求められている。県公民館連合会の各種の研修会や、今後実施していく現地研修会、公民館ふるさと教育推進フォーラムなどで、公民館がふるさと教育に取り組む必要性をしっかり伝えて行かなくてはならない。

11　職員が企画したいと思う事業は、「地域の成り立ち」「地域の伝統文化」「ふるさとの豊かな自然」



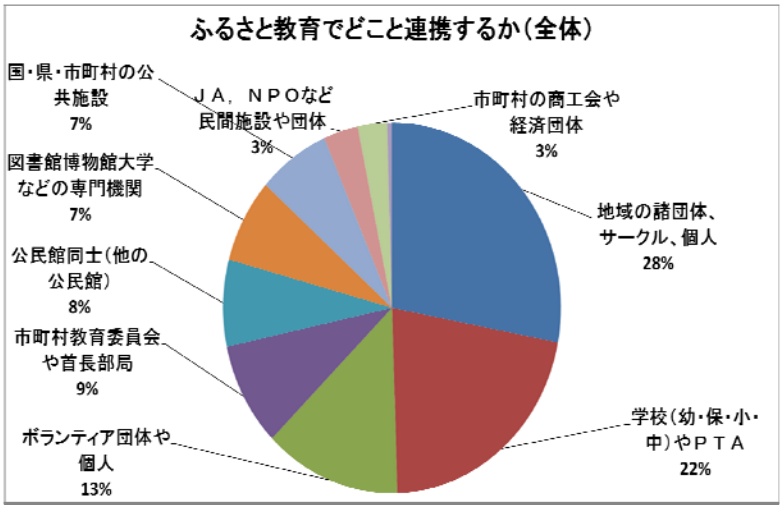
公民館で「ふるさと教育」を推進する事業を企画するとしたら、どのような学習内容や体験事業を企画するかの問いでは、館長や主事、地域によって若干の違いが見られるものの、上位 3 項目「地域の成り立ち（歴史）」「地域の伝統文化」「ふるさとの豊かな自然」で約 67%を占める。

今後これらの学習や体験を中心に各公民館で事業が展開されていくと予想されるが、その時には、単にその 3 項目の事業を実施するのではなく、どのようなストーリーで事業展開を進めていくのか、地域住民の学習や活動の機会が広がるためにはどうしたらよいのか、豊かに学習を進めていくために団体や機関等とどのように連携すればよいのかなど、複眼的に事業を展開していくことが必要である。

また、大人だけの活動にせず、子どもたちの参加を促してふるさとの素晴らしさを体感させ意識させていく活動にしていくことも重要である。

さらに今の親世代は、親自身が子どもの時に自然体験をあまりしていない、車社会の中で地域内を歩いたり自転車で回ったりして身近なふるさとの自然や史跡などを自分の体で直接感じるようなことをしていない親が多く、自分のふるさとのことをよく知らない。ふるさと教育事業では親子参加型の事業とし、親世代を積極的に引き入れていくなどの工夫が必要である。

12　ふるさと教育で連携するのは「地域の諸団体・サークル・個人」「学校やＰＴＡ」



公民館で「ふるさと教育」を豊かに推進していくために、どこと連携（協力）していくことが大切だと思いますかの問いには、公民館がこれまでいろいろな事業を推進するときに大切にしてきた「地域の諸団体、サークル、個人」を１番にあげている。そして２番には「学校（幼・保・小・中）ＰＴＡ」となっている。両者で50%となっており、ふるさと教育推進でもこれまで同様に大切にしていきたいと考えていることがわかる。

次に、「ボランティア団体や個人」「市町村教育委員会や首長部局」「公民館同士」の連携が大切と考えており、それぞれ10%程度となっている。

「市町村の商工会や経済団体」や「ＪＡ・ＮＰＯなどの民間施設や団体」との連携となるとそれぞれ 3%程度となっており、これらの諸団体等との連携はこれからの課題となってくる。

課題と提案

① 公民館での事業は、これまで「テーマ」で学んだり企画されたりすることが中心であった。同じような趣味をもつ人たちが集まって学習する〇〇講座といった学習内容で人が集まって学ぶ、住民運動会・地区文化祭といった共通内容で事業が実施されるなどである。

ふるさと教育ではこれまで同様「テーマ」での学習や活動が中心となって進むと考えられるが、「エリア」で学ぶという視点も大切になってくる。１公民館の管轄エリアを越えた、例えば市町単位のエリアのことを学ぶといった活動も出てくる。そのようなときに「市町村教育委員会や首長部局」「公民館同士」の連携は、これまで以上に重要さを増すと思われる。

今年度国の委託事業を受けて実施している「公民館ふるさと教育推進事業」では、複数の公民館が連携（共同）して事業を進めることで、これまでになかった公民館の可能性が見えてきた。今回は市町単位の大きな連携であるが、例えば小学校区、中学校区単位で見たときには、一つの学校区に複数の公民館が所在している。学校区を単位とした公民館連携事業は、新たな公民館の可能性を見いだして行くことになるのではないかと考える。

② 公民館を中心とした地域でのふるさと教育は、単なる学びから「人づくり」「地域づくり」にと発展していく。例えば観光ボランティアの育成や特産品による地域づくり・町おこしなどに公民館が関わっていくとき、「市町村の商工会や経済団体」や「ＪＡ・ＮＰＯなどの民間施設や団体」との連携は、公民館にとっても相手方にとっても大きな力となっていく。これまで社会教育法23条を厳格に捉えすぎるあまり、公民館が連携することが少なかった団体との連携は公民館の今後の課題であり、いろいろ模索することが必要である。そして実践した事例をおたがいに共有する仕組みを考えていく必要がある。

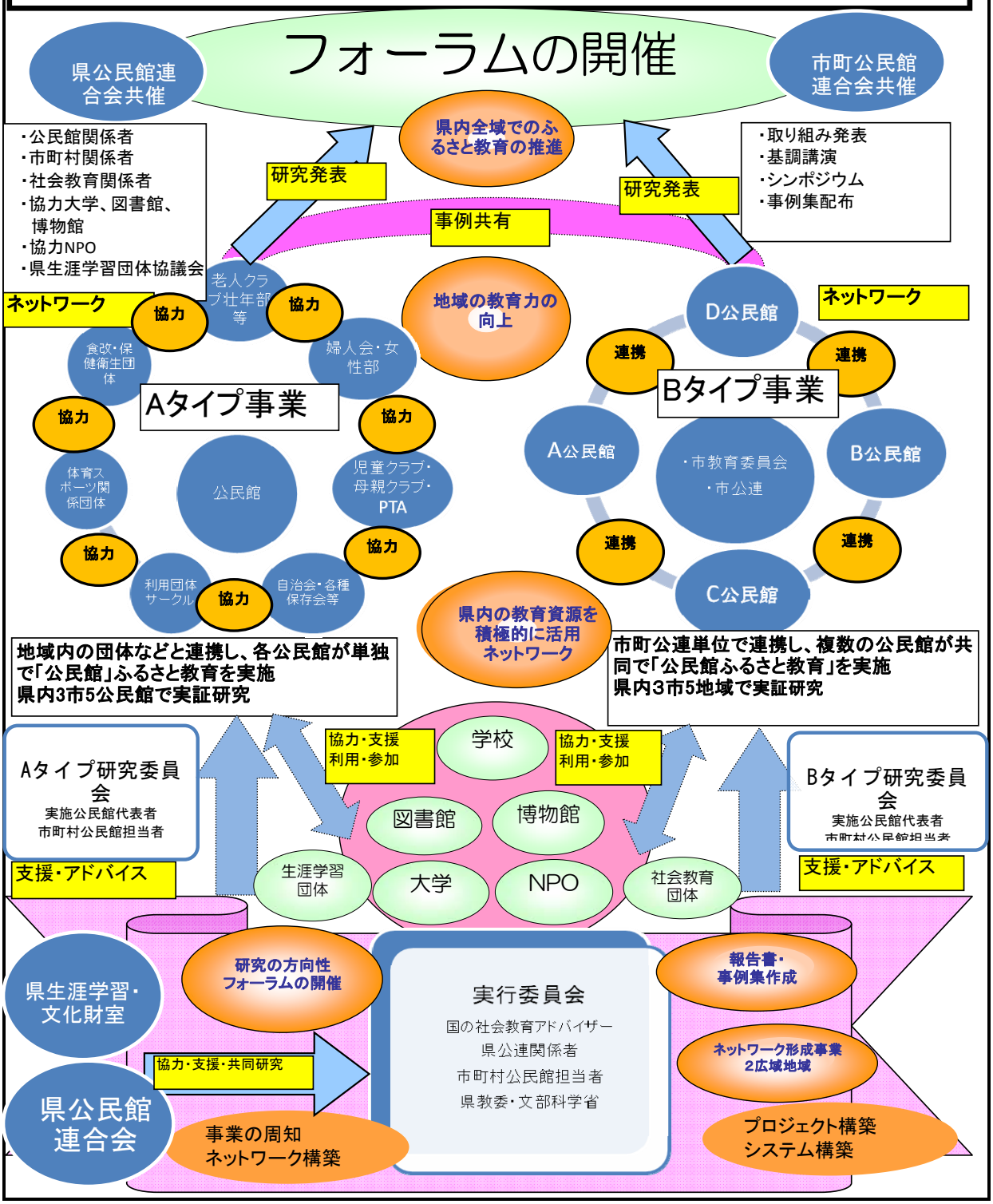
併せて、県内には約 2，700 の自治公民館がある。これまでも市町村立公民館と自治公民館はさまざまな事業で連携してきているが、県内のどこでも実施できる「ふるさと教育」という共通の課題で、今まで以上の連携を進めていけるのではないかと考える。

公民館ふるさと教育推進事業の概要

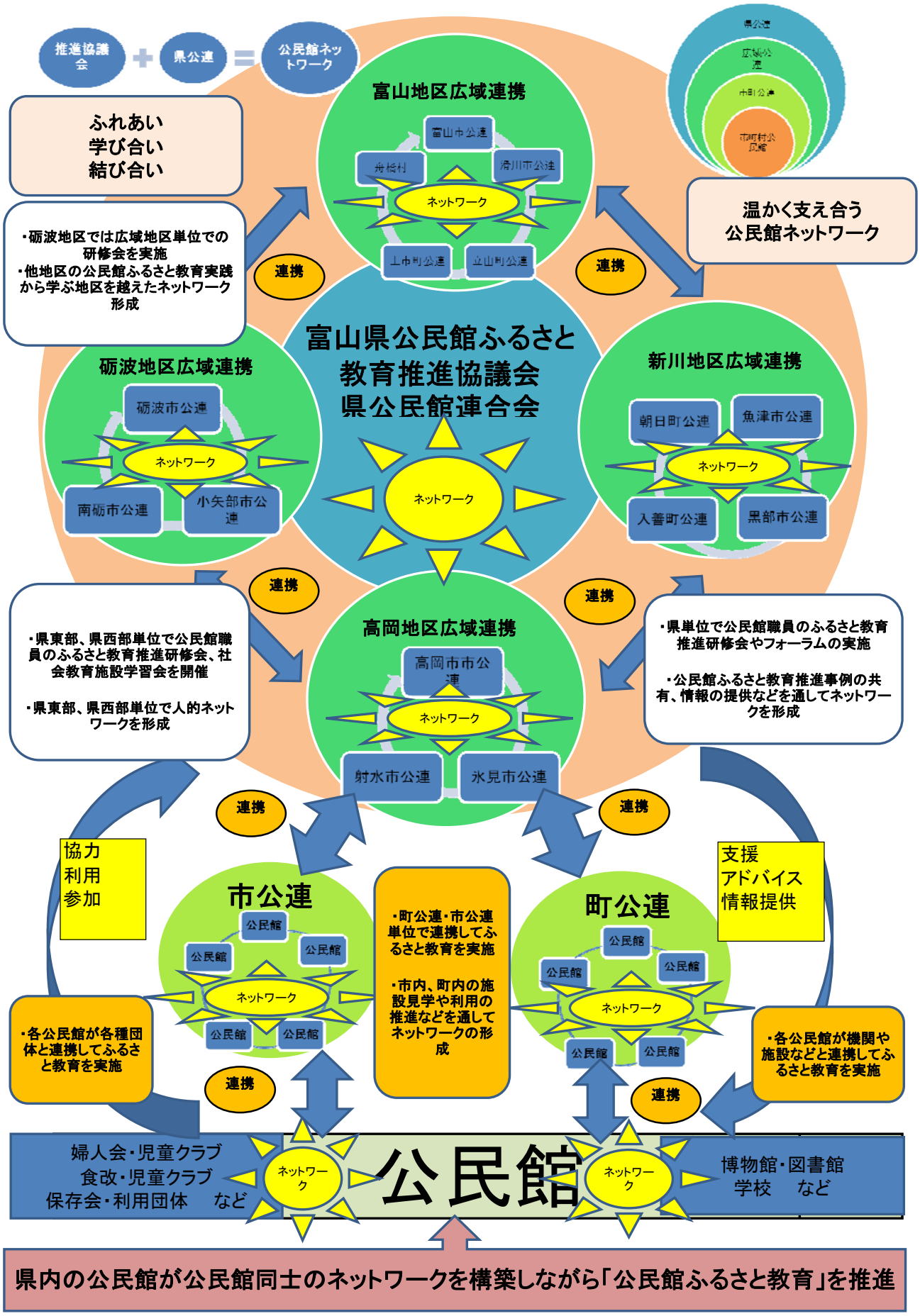
文部科学省　　社会教育による地域の教育力強化プロジェクト事業
一効果的なネットワーク化の促進一

事業の概要
公民館を中心に地域内の各種団体や社会教育施設・教育機関などと連携して「富山県公民館ふるさと教育推進事業」を実施する。そして、公民館同士のネットワークの構築と各種団体や社会教育施設等との効果的なネットワーク形成の在り方を実証研究する。そのことで、地域の教育力の向上と社会教育施設としての公民館の今後の進むべき道を探る。

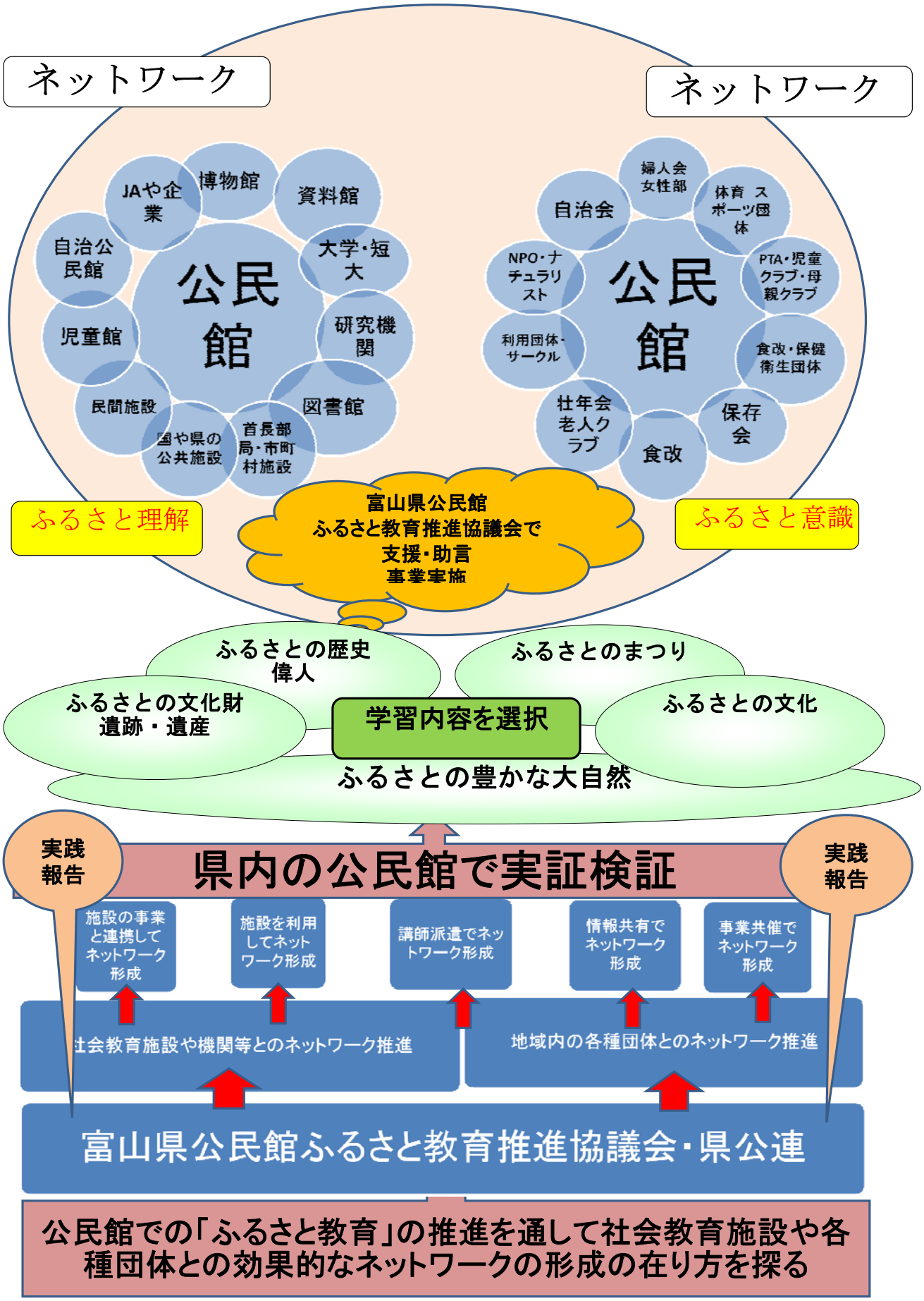
- ふるさとまなびのための人的ネットワークの構築
- ふるさとまなびを運営する広域・多角的システムの構築
- ふるさとまなびを展開する多様な施設連携の構築
- ふるさとまなびを進めるプロジェクトの構築
- ふるさとまなびの「まなび・つたえ」レシピの作成
- ふるさと学びをとおした富山県公民館のネットワーク構築



公民館のネットワークを構築し「公民館ふるさと教育」を推進



社会教育施設や各種団体とネットワークを形成し「公民館ふるさと教育」を推進



	公民館を中心としたふるさと学習を実施して社会教育施設等の効果的なネットワーク化を推進する意義	富山県の公民館のふるさとに関する学習の現状	富山県で公民館のふるさと学習を推進する上での課題	事業を実施した結果みこまれる効果等
富山県の公民館におけるふるさと教育の推進	・　**現在公民館には「ふるさと教育」を推進するプロはいない。**また、推進のノウハウをもっていない。郷土史家などを口コミ等で探している。郷土学習をしているところはしているが、やってないところは全くしていないなど、地域間の温度差が激しい。しかし、ふるさと教育で新たな連携のノウハウを身につけ、新たに連携の幅が広がるネットワーク化により、地域間格差の解消となる。 ・　富山県は、厳しい自然（海あり、山あり、大河川あり、雪あり）と常に深くかかわり文化を創ってきた歴史がある。自然と闘い、自然を利用し、自然に親しみ今の県民性を形成してきた。ふるさと学習において、自然をテーマにすることで、あらゆる所へ学習が広がっていく可能性がある。広がっていくため、広げていくためには、そのようなノウハウや知識をもった機関等との連携・ネットワークは不可欠である。 ・　**単なる自然体験や郷土学習の単発的な体験や学習の連続からの脱却**となっていく。いろいろな機関や人達とネットワークを組んでいくことで、身近なところから学習が始まり、それが広がり深まっていく。例―（水をテーマ） 身近な地域の水→農林省関係施設の見学学習→建設省関係の施設見学学習→現地調査→ダム→立山砂防 ・　実践結果等を公民館連合会が有するネットワークを中心に、広めていくことで**県内公民館にふるさと教育を推進していこうとする大きな潮流**が生まれる。 ・　ふるさとの学習を通して、地域内の連携、市町村内での連携がより強化されていく。	**1　公民館を支える地域団体とふるさと教育** ・　市町村における郷土に関する学習状況を調査したところ、20 年度 21 年度の 2 カ年で舟橋村を除く 14 市町において全体で 212 の事業が報告された。下記のように公民館が郷土に関する学習の中心になっている。 教育委員会主催が 36 事業(内小中学生も対象 7 事業) 公民館主催 127 事業(内小中学生も対象 26 事業) 図書館主催 2 事業(内小中学生も対象 0 事業) 博物館・資料館主催 19 事業(内小中学生も対象 6 事業) その他主催 28 事業(内小中学生も対象 8 事業) ・　**学習は地域の特性や、地域の自然、暮らし、文化に焦点をあてたものが多い**。内容は公民館単位でさまざまであり、市や町での共通のテーマや方向性を持っては実施されてはいない。 ・　公民館で小中学生を対象とする自然体験事業「公民館わくわくどきどき自然体験事業　県単事業」を実施している。**公民館での子ども対象の自然体験教室の大切さが認識され**、実施していこうとする公民館が増えてきている。 20 年度　10 市町村 28 公民館 21 年度　13 市町村 48 公民館 22 年度　14 市町　 80 公民館で自然体験 ・　市町村によって（教育委員会主催・公民館主催とも）実施数に大な開きがある。 ・　各公民館では、地域内の色々な諸団体の協力を得ながら内容によっては小中学校と連携して事業を展開している。	・　公民館では、いろいろな形で地域の教育をしているが、**富山県全体として生涯学習の中にふるさと教育が位置付けられておらず、それぞれの地域における歴史を小さく学んでいこうとする活動に終始**している。 ・　ふるさと学習講座の内容として、地域ブランドを入れていくことが必要である。各地域にはそれぞれ、大切なものがあり、人物であれ、歴史であれ、自然・文化であれ、それぞれの地域で大切にしていかなければならない事が必ずある。それなくして地域のふるさと教育にはなっていかない。 ・　「公民館わくわくどきどき自然体験事業」など、子どもたちの自然体験活動において、単なる体験から、ふるさとの豊かな自然を十分実感でき、ふるさとの自然に愛着が持てるなど、ふるさとを強く意識した活動に変えていく必要がある。また、公民館では子どもを対象とするふるさと学習が少ない。 ・　**公民館でのふるさと学習は、地域理解を深めることや、交流には非常に効果的に働いているが、その域を超えていない。** ・　**公民館のふるさとに関する学習講座は、単独公民館主催事業**であって、市町公連や複数公民館の連携による講座は見当たらない。また、公民館を支える各種団体と**協働で事業を実施している例は少ない。** ・　ほとんどのふるさと学習講座は生涯学習の一環として実施されており、教養的なものが主流である。	・　地域で学ぶことは、自分がいつか、伝える側になることにつながっていく。**学び→伝える→学び→伝えるサイクルが地域に発生し根づいていく。ふるさとを伝える主体が育つ**。 ・　学校で地域のことを学んだ子どもたちが、伝承者としてその学びを再び学校で教え、伝えていく先生となれるのはごく一部であり、学校での学びは伝承サイクルにはなっていかない。しかし、地域で、地域の人から学んだ人は、次世代の地域の伝承者として多くの人が残る。**「地域に学ぶ生き方」を身につけ、「ふるさとを伝える主体」が地域に育っていく。** ・　地域に住みながら地域のことをよく知らない大人が増えている。そのような年代層を積極的に公民館活動に取り込むことで、公民館の大きな活性化につながると同時に、**次の時代の公民館を担う人材育成**につながる。 ・　単独の公民館で、ふるさと学びの人材育成は難しいが、地域の魅力の発掘や活用を、ネットワークによって推進していく手法は、他の事業でも生かされていく。 ・　公民館連合会と連携して事業を推進することで以下のことが明らかになり、それが、県内公民館の共通財産となり、今後公民館におけるふるさと教育推進の指針となっていく。 ふるさとまなびのための**人的ネットワークの構築** ふるさとまなびを進める**プロジェクトの構築** ふるさとまなびを**運営する広域多角的システムの構築** ふるさとまなびの**「まなびつたえ」レシピの作成** ふるさとまなびを通した**公民館ネットワークの構築** ふるさとまなびを展開する**多様な施設連携の構築** ・　**地域を挙げて取り組む活動を通して、子どもたちの模範となれる大人の育成や仕掛けが工夫**されていく。
	・　公民館の連携や、他機関との連携で獲得されたものは、ふるさと自慢のような形での発信や、文化・伝統の継承など計画的・継続的に実施されていく可能性を強く秘めている。 ・　ふるさと教育という共通のテーマで、県内各地にさまざまな機関等との連携パターンが生まれ、それが広まっていくと、**公民館の活性化と同時にそれぞれの機関の活性化**にもつながっていく。	**2　機関と連携してふるさと教育** ・　立山博物館や高岡万葉博物館などでは、**博物館の特色を生かしてふるさとの自然や歴史・文化に関する講座や講演を定期的**に行っている。富山大学や富山国際大学などでも**大学が有する高い専門性を生かしながら、ふるさとに関する公開講座**を行っている。これらの講座は県民カレッジ連携講座として実施されている。 連携講座　　富山大学 5 講座・埋蔵文化財センター1 講座 高岡万葉歴史館 4 講座　など	・　博物館や大学でのふるさとに関する講座は、主催講座として実施されており、公民館と連携している例は見られない。公民館の方からも、ふるさと学習で連携を求めている事例が見当たらない。	・　現在学校では「郷土を開いた人々」などで、ふるさとのことを学習している。しかし学校は教科の目標に従って学習している。地域学びは本来、親や地域の人から伝えられ学んでいくものである。学校ではなく、公民館が中心になって単独館では難しいふるさとのさまざまなことを学ぶことによって、各施設等とネットワークが進む。また主体的に取り組むことで、**社会教育で地域学びをする方向へ、また、社会教育による「子ども教育」の創出へと、公民館自身が意識転換**していく機会となる。
	・　ふるさと学習は、生涯学習団体の学びを生かすことが出来るよい素材となる。また、各団体等が連携しやすい素材である。協働で取り組むことによって、生涯学習団体以外にも、**ガールスカウトやボーイスカウト、婦人会などでは、新たな入会者を増やす機会にもなっていく**。相互に利益がある。	**3　団体とのネットワークでふるさと教育** ・　地域における自主的な学習活動を支えている団体として、生涯学習団体やサークルがある。とやま学遊ネットには 2500 の団体が登録されており、その中で**歴史（郷土史・考古学・古文書）に関する学習を行っている団体やサークルは 49 団体**あり、公民館等を利用して活動している。	・　生涯学習団体の中で郷土に関する学習を行っている団体は、郷土史や古文書の研究など専門性の高い分野が多い。また、学習内容が難しいがゆえに、それが多くの住民の共有のものとはなっていない。生涯学習団体での学びが有効に活用されていない。活動の場が少なく、またその活動が広く知られていないなどの問題を抱えている。	・　ふるさとの再発見、再認識になり、住んでいるふるさとへの理解を深め、誇りを持ち、ふるさとを大切に思う人が地域に増える。地域の教育力の向上になっていく。

文科省の【社会教育における地域の教育力強化プロジェクト事業】を、指定課題「効果的なネットワーク化」を活用して、公民館ふるさと教育を推進する　　(№.2)

	富山県の公民館同士のネットワーク推進の意義	富山県の公民館同士のネットワークに関する現状分析	公民館同士のネットワークを推進する上での課題	事業を実施した結果みこまれる効果等
富山県の公民館における　公民館同士のネットワーク	・　ネットワークによって、単独公民館だけでは出来ない事業の展開が可能となる。また**複数館の連携や市町村の枠を超えた連携など新たな連携が創設**されていく機会となる。 ・　市町村内の各種施設や団体、県や国の施設やその利用団体など、公民館職員として、現状を幅広く知ることで色々な活用が始まる。機関や団体とのネットワークづくりは、さらに多くの機関や施設や人を知ることにつながり、豊かな事業、多様な利用、実行性のある利用につながる。 ・　公民館事業は、活発さや地域密着度など、地域間の温度差が激しいが、新たな連携のノウハウを共同で身につけ、新たな連携機関の幅が広がるネットワーク化により、**地域間格差の解消となる。** ・　地域内や市町単位でのこれまでのネットワークをしっかり継承していくことで人が代わっても財産が継承される。	1　**市町村公民館** ・　県内 15 市町村、322 公民館が存在し、市町村における社会教育の推進の中心的役割を担っている。また多くの生涯学習団体の活動拠点となっている。 ・　多くの地域内の団体（自治会・婦人会・PTA・食改・児童クラブ・青年団・老人会・民生委員、学習団体、体育振興会、ボランティア団体など）が集いそれぞれ独自の活動を進めている。また、地区民運動会や公民館祭りや納涼際などで、公民館の各部会、利用団体、各自治会が公民館と連携・協力し、事業を進めている。 ・　**各公民館単位で、地域内における諸団体と、地域を単位としたネットワークづくりが長い年月をへて、地域に定着し、維持され構築されている。地域とのつながりは強固**である。	・　市町村公民館では、各種団体と協力してさまざまな事業を展開しているが、事業で手いっぱいになっていたり、例年同じような事業を繰り返し実施せざるを得なくなっていたりしているところもあり、手詰まり感やマンネリ化の解決が、求められている。事業等の実施に関して、公民館長や公民館主事、指導員の意識の高低による温度差がある。 ・　現代的な課題に取り組んだり、事業の一層の充実を図ったり、新たな事業を計画したりするときに、地域内の諸団体の連携に加え、いろいろな機関との連携の在り方を探る必要がある。 ・　市町村公民館では、**団塊世代の大量退職により、館長、主事等の世代交代**が進んでいる。**これまでのノウハウの継承をいかにしていくか**が問われる。	・　地域密着型、地域内のことだけを見ている公民館活動からの、脱却の機会となる。また、ネットワーク化を図りながら事業展開することで、**公民館の人材育成と地域人材の発掘が同時に推進**される。 ・　公民館が、各施設や機関とネットワークを形成していくことで、地域だけを見ていたミクロ的な視点から、地域を取り巻くいろいろなことに目を向けマクロ的な視点を持つようになっていく。**公民館活動が、「グローカル」な取り組み（広い視野に立って自分の足元をしっかり見つめていく）へと変容**していく ・　連携のノウハウを公民館が持つことは、公民館にとって事業を豊かにすることにつながる。相手方の施設や機関にとっても、連携によって多くの地域住民にその認知度が増し、利用者が増えるなどの効果がある。
	・　複数公民館の協働や、他の施設との協働の講座開催などが可能になる。そして、例えば一級河川黒部川の名水を訪ねて、富山の水資源などの学習が、流域公民館の協働で実施された場合、**各館の得意分野を生かしての事業実施が可能**となる。 ・　新規事業の開拓のみならず、既存事業の一層の充実と豊かな学習につなげていける。	2　**市町公民館連合会** ・　県内 15 市町村のうち舟橋村を除く、14 市町で市・町単位の公民館連合会が設置されている。 ・　市町単位で、公民館のネットワークが維持されている。 ・　平成の市町村合併で新市になったところでは、新市公民館連合会が組織された。 ・　**南砺市では** 4 町 4 村が合併し、南砺市公民館連合会が組織されているが、それとは別に**旧の町公民館連合会があり、旧のネットワークを維持した活動を展開**している。	・　市や町には、公民館連合会が存在し、お互いに研修をしたり連絡調整的な役割を果たしたりしている。協働事業として市町の公民館祭りや公民館フェスタを実施しているが、各公民館利用団体の学習成果の発表にとどまっているところが多い。 ・　現代的な課題や、市民の共通課題を解決していくために、市町村内にある、いろいろな施設や機関との連携の在り方や、協働事業の在り方などを探る必要がある。	・　市町村単位で事業やネットワーク化に取り組むことで、個々の公民館職員の資質の向上と、企画力、運営力の向上につながる。 ・　また、市町公連単位での事業は、市町公連としての連帯感の強化と運営力・企画力の向上になるとともに、事業によっては、市や町を超えた公民館同士の連携が始まる可能性が高く、新たな人的ネットワークが形成される可能性がある。蓄積されたものは市や町の共通財産となっていく。
	・　合併前の市町村単位が小さい時には、村では 1 村 1 公民館であり、小さな町では、5～6 程度の公民館数であった。他市町村の活動を知ることや、他市町村の社会教育施設を知ることは、職員の資質向上と、企画能力の向上になっていた。合併によって市が大きくなったが、**広域連携は有効に働く。** ・　**「テーマで学ぶ」から「エリアで学ぶ」へと、意識・関心の方向を変えていく**ことにつながる。	3　**〇〇地区公民館連合会** ・　富山県は、平成の大合併以前は、4 つの教育事務所があり、新川地区・富山地区・高岡地区・砺波地区の 4 地区に分かれ、事務所主導の社会教育推進がなされていた。**砺波地区には、合併以前から、現在の砺波市・小矢部市・南砺市の 3 市で組織する砺波地区公民館連合会**がある。現在は、年 2 回にはなったが、市町村担当者も含めた研修会を実施し、**広域圏でのネットワークを維持**している。	・　以前は **4 教育事務所に社会教育主事が派遣**されており、広域圏での事業を実施していた。また、町村には**県からは社会教育主事が派遣**され、市町村の生涯学習の振興と、市町村間の情報交換や連携に大きな役割を果たしていた。**その機能がなくなった今日、広域圏単位での連携や隣接市町村等との連携、それぞれの情報交換などをどうしていくのかが、大きな課題**となっている。	・　他市の情報や社会教育施設を知ることは、新たな活動の可能性や利用を生みだすとともに、自市の公民館活動や社会教育施設の在り方を見直したり点検したりするよい機会となっていく。 ・　狭い地域の中では気がつかなかった、新たな視点や新たな運営方法を知ることになり、公民館職員の資質の向上になる。 ・　**「エリアで学ぶ」ことを通し、多くの人々の意欲や専門性が活用**されるようになる。
	・　県公民館連合会では、各種事業、情報交換、調査研究等を通して、市町村公民館のネットワークづくりに努めており、安定した形で維持されている。公民館のコミュニティセンター化の問題など、今後求められる新たなネットワークの在り方を探っていく機会となる。また、自ら事業主体の一つとなって実証研究進めることで、**多くの財産とノウハウが、県公民館連合会にも蓄積**されることになる。	4　**富山県公民館連合会** ・　平成 21 年現在、県内 15 市町村 322 公民館で組織する富山県公民館連合会が存在し、県内公民館の相互の情報交換、研修、調査研修、資料収集等の活動を行っており、県内公民館ネットワークの中心である。 初任者研修会・館長研修会・主事指導員研修会の実施 現地研修会の実施　　公民館大会の実施 広報誌（年 3 回）発行　など 情報・人的なネットワークの形成に不可欠な存在である。 ・　富山県公民館連合会は、全郡市からの理事と全市町村からの評議員で構成されている。**各郡市、市町公民館連合会の事業はそれぞれ独立して実施**されている。それぞれの**活動状況は把握していない。**県も同様である。	・　今後も、県公民館連合会は、県内公民館ネットワークの中心となっていく。市町村を結びつけていく事業や、事例やノウハウの蓄積をして、県内の公民館が手軽に使いやすいようにしていくことなどを組織的に実施していくためにはどうしたら良いのか探っていく必要がある。 ・　県公連の事業は、県の公連事務局が中心に企画準備され、理事会や評議員会に諮って決定され執行されている。理事・評議員が協働で事業を企画実施するようなことはない。	・　**公民館連合会と連携して推進することで、ノウハウ等が、全県規模で獲得**される。また、県公連も取り組むことで、事業の様子や成果などが、広報で県内の公民館に一斉に配信され、県内の公民館に共通に理解されていく。**財産として急速かつ確実に定着**していく。

文科省の【社会教育における地域の教育力強化プロジェクト事業】を、指定課題「効果的なネットワーク化」を活用して、公民館ふるさと教育を推進する　　(№.3)

	富山県の公民館と施設・団体のネットワーク推進の意義	富山県の公民館と施設・団体のネットワークに関する現状	施設・団体とのネットワークを推進する上での課題	事業を実施した結果みこまれる効果等
富山県の公民館における　行政・他団体・他施設・他機関とのネットワーク	・　首長部局や首長部局管轄の施設との連携や、ネットワークづくりによって、相互の信頼関係や新たな人とのつながりが生まれる。 ・　公民館と社会教育施設・団体などが連携することの利点を、双方が学ぶことになっていく。	・　首長部局の事業も多く公民館でなされているが、多くは**下請け的なも**のが多い。また福祉関係の事業で公民館に求められるものが増えてきている。婦人会などの団体の協力を得て実施している。また、公民館によっては、首長部局の予算を使っていたり、首長部局の仕事を兼務する職員がいたりと形態は、地域によってさまざまである。 ・　県内の公民館には、図書館やコミュニティセンターとの**複合施設になっているところも多い**。	・　**地域協働のまちづくり**をしていくという首長の方針で、公民館を廃止して**コミュニティセンター化し様とする動き**がある。事業の下請け、消化機関となることがないように首長部局との関係や在り方を探っていく必要がある。 ・　県内の多くの市町村では、公民館が図書館などと同居していたり、隣接していたりするが、双方に連携しようという意識が少ない。	・　首長部局に公民館を理解し大切にしていく意識が浸透し、また公民館にとっても理解したうえでの事業となるため、**事業の下請け意識が小さくなる**。 首長部局の**公民館のコミセン化を防いでいく一つの有効な手段**となっていく。 ・　地域の実情に応じて工夫して作られたネットワークは、事業終了後も、使いやすいネットワークとして、地域に残っていく。**何度も使ううちに地域に根づいていく**ようになる。
	・　公民館長や公民館主事、指導員の**意識の差による活動差や地域間における温度差**の解消につながっていく。 ・　システムとして連携が確立していくことで、その時々の館長や公民館職員の人間関係の広さや、市町村担当者の意識や情熱等に影響されることが少なくなる。	**6　公民館と、学校、他の社会教育施設、社会教育団体、NPO, 博物館、図書館との連携** ・　**公民館での講座は、その公民館が所在する狭い地域を対象**にして実施されることがほとんどであり、**市町村内の人材や、館長等の人脈を頼って実施**しているケースが多い。必要に応じて大学や施設の先生等を講師として迎えているが、各公民館が個人折衝で講師を決めている。	・　現状維持でも、各公民館で、講師探し等をして事業が出来ているので、他の社会教育施設や機関、大学、博物館や図書館などと連携したりすることの大切さはわかっていても、それ以前に大変さの方が先に立ってしまい、二の足を踏んでしまう傾向がある。	・　館長や公民館職員の人間関係の広さ等に影響されることが少なくなり、**ノウハウさえ身につければ、だれでも大学や博物館を利用したり連携したりして事業**を進めることが出来るようになっていく。
	・　ふるさと学習などの共通テーマや事業で、**多くの施設を知り活用していくことの優位性**等について意識されるようになる。 ・　公民館事業がより豊かでバラエティあふれたものになっていく。	・　公民館の館長・主事の中には、例えば県の**映像センターに多くの貴重なふるさと映像のコンテンツ**が蓄積されていることを**知らない人が多い**。県や国のいろいろな施設や大学などと関わったことのない人も多い。	・　外からの強い、外的刺激や外的誘因がなければ、よいこととわかっていても、必要だと認識していても日常の生活の中で、公民館職員自からが、新たに色々な施設を見学したり学習したりして、見聞を深めていく動きにはなっていかない。	・　公民館職員の資質の向上と、企画能力の向上になっていく。また、**各施設をコーディネートする力**が付いていく ・　ふるさと学習などの共通テーマや事業で、他の施設やこれまでかかわったことのない団体、地域の実情に応じて、ネットワークづくりをそれぞれが工夫して進めていくことで、地域性を生かした活動が形成される。
	・　県レベルでは、相互に関わり合う機会は少ないが、地域の公民館レベルで見たときには、例えば地区単位の婦人会活動、あすの富山県を創る協議会の中の生活学校や生活会議の活動、ボーイスカウトやガールスカウトの各支部活動、PTA の地区活動など、公民館利用団体の間でそれぞれが、連携協力関係にあることが改めて意識されていく。	・　富山県には社会教育団体振興協議会というものがあり、①県公民館連合会②県PTA連合会③県高等学校PTA連合会④あすの富山県を創る協議会⑤県婦人会⑥県青年学級振興協議会⑦県視聴覚教育協議会⑧日本ボーイスカウト富山県連盟⑨ガールスカウト日本連盟富山県支部⑩県図書館協会⑪県社会教育委員連絡協議会の 11 団体が加盟している。現在その事務局が公民館連合会にある。	・　**社会教育団体はそれぞれが独立して、独自の活動を展開**している。**相互に活動内容に干渉し合わない不文律**があり、県の社会教育大会は協働で運営しているが、それ以外での連携はない。	・　現に存在するネットワークが、例えば富山県のふるさとを意識した活動で情報交換されるなどしていくことで、より強いネットワークへと変わっていく推進力となりえる。 ・　**子ども「に」地域を「を」返すことを基本理念としていくことで社会教育における「子ども教育」を創出していく重要性を共通認識**として各団体で実践されるようになる。
	・　公民館と博物館などでお互いのメリットが相互に理解されることで、**相互利用推進のきっかけ**となる。 公民館→事業や学習内容が豊かになる 身近な施設、利用しやすい施設 博物館→利用者増や、博物館事業理解者の増加	・　大学との連携でも、特定の先生との個人交渉が中心であり、**大学と連携して実施しているわけではない。**中央公民館の〇〇大学講座を含め、機関との連携で実施している学習は見当たらない。**博物館と連携している事例も見当たらない。図書館も、**事業は館単独で実施しており、公民館との**連携はない。**	・　博物館や資料館などは、それぞれが、設置の目標に従って、独自に立派な社会教育活動や学習活動を展開している。 公民館では必要な時に博物館から講師を呼んで話を聞く利用型がほとんどであり、博物館側でも事業は広く県民や市民を対象としているため、館の所在する地元の公民館であっても連携している例はほとんど見当たらない。	・　今後公民館が事業で利用していく施設や機関が、社会教育施設、首長部局の施設、県の市施設、国の施設、大学などの研究機関などと広がっていく機会となる。生涯学習団体やNPOの活用も始まる機会となる。**公民館の人的関係が、地域内限定的から、地域外へ**と広がっていく。また**施設や機関の持つ「知」が地域づくりに生かされていく**。
	・　生涯学習団体の学びを積極的に生かし、活用していくことで、生涯学習として自分たちが学ぶことで満足していた段階から、その学びを地域の人々にも、わかりやすく伝えていこうという意識の変革と活動につながっていく。	・　富山県内には 2,500 を超える、生涯学習団体・サークルが、県民カレッジのとやま学遊ネットに登録されている。 公民館を利用している団体も多い。生涯学習団体の活動は、郷土史研究など専門性の高い分野から趣味のサークルまでと大変幅ひろい。県単位で生涯学習団体協議会が組織されている。	・　生涯学習団体は、単なる公民館利用団体とみなされていることが多く、団体の側でもそれでよしとする雰囲気がある。従って、公民館祭りなどで発表の機会があり、単に発表して活動を宣伝しているだけの場合が多い。	・　生涯学習団に対して、**単なる利用団体からの脱却**が図れる。学習の成果を生かし、学習の成果を社会に還元していくことで、公民館活動を支える団体として組み込んでいける。さらにそれらの団体がもつネットワークが、公民館の財産になっていく。

富山県公民館ふるさと教育推進協議会会則

（名称）
第１条　　本会は、富山県公民館ふるさと教育推進協議会（以下、「推進協議会」という。）と称する。

（目的）
第２条　　推進協議会は、富山県の公民館を中心としたふるさと教育推進の在り方を、効果的なネットワーク化の視点から実証研究し、もって地域における公民館を中心としたふるさと教育の促進並びにこれからの公民館の進むべき方向を探る研究を目的とする。

（所掌事務）
第３条　　推進協議会は、前条の目的を達成するため、フォーラム等の開催、ネットワーク形成事業の実施、事例集の作成を行うとともに、各推進委員会が実施する事業の実施状況等の把握、実施後の検証に関すること等を行う。

（事業年度）
第４条　　推進協議会の事業年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月31日に終わる。

（組織）
第５条　推進協議会は、次に定める役員及び委員をもって組織する。

２　委員は、生涯学習・文化財室、公民館関係者、市町村教育委員会関係者の中から、会長が委嘱する。

３　委員の任期は、委嘱された日から当該年度の３月31日までとする。ただし、会長が必要と認めたときは再任することができる。

（役員）
第６条　推進協議会に、次の役員を置く。
⑴会長　　１名
⑵副会長　　１名
⑶監事　　１名
２　会長は、富山県公民館連合会会長をもって充てる。
３　副会長は、富山県教育委員会生涯学習・文化財室室長をもって充てる。
４　監事は、会長が委嘱する。

（役員及び委員の職務）
第７条　会長は、会務を総理し、推進協議会を代表する。

２　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

３　監事は、会計その他の事務を監査する。
４　委員は、推進協議会の構成員としての職務を行う。

（会議）
第８条　推進協議会の会議は、定例会及び臨時会とし、会長が招集する。

２　会議の進行は、会長が会議の議長となり、副会長は会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

３　会議は定例会として年３回行う。

４　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

５　会議は、次に掲げる事項を審議し決する。
⑴ 事業計画及び実績に関する事項
⑵ 富山県の公民館におけるふるさと教育推進に関する事項

（国の社会教育アドバイザー、アドバイザー、研究委員会委員の出席）
第９条　会議には、国が委嘱する社会教育アドバイザーの出席を求め指導・助言を受けることとする。会長は、必要に応じて推進協議会委員以外のアドバイザーに出席を求め指導・助言を受けることとする。また、必要に応じて研究委員会の委員に出席を求めることができることとする。

（事務局）
第１０条　推進協議会の事務局は、富山県教育委員会生涯学習・文化財室内に置く。

（細則）
第１１条　この会則に定めるもののほか、推進協議会の運営に必要な事項は、会長が別に定める。

附則　　この会則は、平成22年４月１日から施行する。

富山県公民館ふるさと教育推進協議会事務局規程

（趣旨）

第１条　この規程は、富山県公民館ふるさと教育推進協議会（以下「推進協議会」という。）会則第１１条の規定により、事務局の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。

（組織等）

第２条　事務局は、次の表の左欄に掲げる職員（以下「職員」という。）を置き、その職務は、それぞれ同表の右欄に掲げるとおりとする。

職	職　　務
会　長	会長は事務局を代表し、事務を総理する。
副会長	副会長は会長を補佐し、会長に事故があるときは、事務を総理する。
事務局長	会長の命を受け、事務局の事務を掌理し、その事務を処理するため、所属の職員を指揮監督する。
事務局員	上司の命を受け、担当事務に従事する。

２　事務局長には、富山県生涯学習・文化財室家庭成人教育班長をもって充てる。

３　事務局員には、富山県生涯学習・文化財室家庭成人教育班及び振興班の担当職員をもって充てる。

（事務処理）

第３条　推進協議会の事務は、決裁の権限を有する者の決裁を得た後でなければ処理してはならない。

（会長の決裁事項）

第４条　会長は、おおむね次に掲げる事項の決裁をする。

（１）　基本方針に関すること。

（２）　重要な事業の計画又は実施方針に関すること。

（３）　通知、申請、照会、回答及び報告に関すること。

（４）　すべての収入調定、支出負担行為及び支出決議。

（事務の専決）

第５条　専決事項については、別表第１のとおりとする。

２　前項の規程にかかわらず、重要又は異例に属すると認められた事項については、会長の決裁を受けなければならない。

（代決）

第６条　決裁権者が不在の時は、別表第２に掲げる決裁権者の区分にしたがい、第１順位者が代決し、決裁権者及び第１順位者が不在のときは、当該区分に従い第２順位者が代決する。ただし、重要又は異例に属する事項については、この限りではない。

（文書）

第７条　施行する文書に付する記号は「富公ふ協」とする。

２　前項に定めるもののほか、文書の取り扱いについては、富山県の例による。

（委任）

第８条　この規程に定めるもののほか事項については、事務局長が別に定める。

附　則

この規程は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

別表第１（第５条関係）

事務局長専決事項
１　軽易な通知、申請、照会、回答及び報告に関すること

別表第２（第６条関係）

決裁権者	代　決　権　者	
	第１順位者	第２順位者
会　　長	副会長	事務局長

平成２２年度文部科学省委託

公民館ふるさと教育推進事業活動報告書

発行日　平成２３年３月

編集発行　富山県公民館ふるさと教育推進協議会
〒930-8501　富山市新総曲輪７－１

TEL (076)444-3435

FAX (076)444-4434